

# 動物の適正譲渡における 飼い主教育



# はじめに

## 「動物の適正譲渡における飼い主教育」作成にあたって

日本の犬や猫の飼育頭数は、約2,100万頭にも達し、またペットとして飼育される犬や猫の位置づけや役割も多様化し、家族の一員、パートナーとして扱われるようになってきています。しかし、その一方で年間犬が11万頭、猫が20万頭、都道府県等に引取られています。

環境大臣の定める「動物の愛護及び管理に関する施策を総合的に推進するための基本的な指針」では犬猫の引取り数、殺処分数の減少を大きな目標の一つとしています。しかし、多くの自治体において、新たな飼養希望者又は所有者の発見には苦慮しているところであり、収容された犬及び猫の多くがやむなく殺処分されるに至っています。今後、殺処分数の減少のためにも、さらなる適正譲渡の推進が重要となります。

また、譲渡後の動物が適正に飼養されるよう、譲渡対象の動物や譲渡者を適切に選定する必要があります。「適正譲渡」とは譲渡する動物の数を単純に増やすことではなく、譲渡事業を通しての適正飼養の普及につながるものとするのが望まれます。

本書では、平成21年3月に発行した「子犬の子猫の適正譲渡ガイド」の内容をさらに充実させるとともに、特に譲渡事業を通じた地域への長期的な適正飼養の普及に主眼をおき、自治体での取り組み事例を交えて、相手に伝わるコミュニケーションテクニックまで盛り込んだものとなっています。各自治体の実情に合わせ、本書をご活用いただき、適正譲渡の一層の推進に役立つことを願っております。

### ■ 参考資料

これまでに発行され配布された資料です。参考にしてください。

- ・「成犬の適正譲渡～もう一度幸せに～」  
(DVD / 成犬の適性テストの方法を収録)  
平成19年3月発行



- ・「より多くの可能性を～民間との連携で広がる適正譲渡～」  
(DVD)  
平成20年3月発行



- ・「子犬と子猫の適正譲渡ガイド」(DVD付冊子)  
平成21年3月発行



- ・「譲渡候補犬のためのリハビリとマッチング」(DVD)  
平成22年2月発行



※ 冊子の内容は環境省のHPからダウンロードできます。

# 目次

適正譲渡の  
4つの柱 1

適正譲渡の流れ  
と飼い主教育 2

動物の適性  
評価 3

譲渡希望者の募集  
～譲渡事業のPR 4

譲渡希望者の  
調査 5

事前講習会 6

マッチング 7

正式譲渡  
(動物を渡す時) 8

しつけ方教室 9

飼育相談 10

追跡調査 11

参考資料

1. 適正譲渡の4つの柱 .....	2
2. 適正譲渡の流れと飼い主教育 .....	4
3. 動物の適性評価 .....	6
4. 譲渡希望者の募集～譲渡事業のPR.....	10
5. 譲渡希望者の調査 .....	14
6. 事前講習会 .....	18
7. マッチング .....	30
8. 正式譲渡（動物を渡す時）.....	38
9. しつけ方教室 .....	42
10. 飼育相談.....	62
11. 追跡調査.....	80
参考資料（電話相談の例）.....	82

## コラム

1 飼育放棄をする飼い主に何を伝えるか .....	5
2 犬の返還率 45.26%! ～熊本市動物愛護センターの取り組み～ .....	13
3 留守がちな家庭は、本当に動物を適正に飼えないのか？～譲渡条件の緩和を考える～.....	16
4 外飼いの猫の苦情 ～他人の敷地で排泄をする～ .....	21
5 地域に合った飼い方指導を！ .....	23
6 犬種傾向を知っておきましょう .....	34
7 うちの家族には、どんな動物がぴったりかな？ ..	35
8 おすすめできない「叱り方」.....	43
9 松本市「猫のにゃんでも相談会」.....	56
10 和歌山県の事例「里帰りイベント」 .....	81

## TOPICS

独自の適性評価の基準作りのポイント.....	8
本当に相手に届く伝わるコミュニケーションを！ .....	24
不妊去勢手術の徹底 .....	28
犬も、飼い主も、ほめて楽しく ～しつけ方教室でのコミュニケーションスキル～ .....	55
飼育相談で大事な「姿勢」「質問力」「助言力」.....	78

## How to

トラブルを予防する動物の飼い方.....	22
犬のエネルギー発散の方法.....	54
猫の飼い方アドバイス (猫がトイレを失敗するときは?).....	58

## FAQ

Q1: 攻撃性に関する適正評価テストの判断は?.....	7
Q2: センターで行う子犬の社会化は? .....	7
Q3: 猫の適性はどう見る? .....	61
Q4: 飼い猫の不妊去勢手術を薦めるには? .....	61
Q5: 猫の室内飼いを決断させるには? .....	75

# 1. 適正譲渡の4つの柱

現在多くの自治体で動物の譲渡事業が行われています。この事業で重要なのは、単に譲渡数を増やすことだけではなく、適正な譲渡を行い、地域の模範的な飼い主を増やし、ひいては行政に引取られる動物の数と、その殺処分数の減少につなげることです。適切な譲渡事業を今後も息長く続け、効果的な飼い主教育を行うために、まず、行政が行う譲渡事業の意味やビジョンを職員間で確認しておきましょう。

## ① 収容される動物を減らす

### ■ 飼い主への返還率をあげる

捕獲収容された飼い主不明の犬が、飼い主の元に戻る確率はどの程度ですか？  
その数字が低い場合は、飼い主に対する教育が必要ということになります。

①鑑札やマイクロチップなど、飼い主明示のIDを犬に付けること

②犬が迷子になった場合、どこに連絡し探せばいいかの情報の普及

保健所や収容施設に連絡するという方法を知らない飼い主も結構多くいます。

狂犬病予防接種、動物愛護週間、事前講習会などの機会をとらえ、繰り返し広報し、一般に周知させていくことが求められます。マスコミの活用も有効です。



### ■ 窓口で適切な指導をする

飼育放棄で飼い犬の引取りを求められたり、飼い犬や飼い猫が産んだ子犬・子猫の引取り依頼があった場合、飼い主の責任について十分な指導を行う必要があります。

### ■ 動物取扱業者への啓蒙・教育を行う

ブリーダー、ペットショップなどの動物取扱業者が、一般市民に対して安易な飼養を勧めたり、適切な飼育案内をしていなかったことが原因で、飼い主による飼育放棄が起こることもあります。またブリーダー崩壊によって数多くの動物たちが行き場を失う問題も多く起きています。こうした悪循環を予防するために、動物取扱業者に対する啓蒙、また職業倫理の徹底をうながす必要があります。

## ② 適正な飼養者を増やす

譲渡された動物が再び収容されることがないように、そのためには……

### ■ 譲渡の際に適切な飼育指導をする

事前講習会、譲渡後のしつけ方教室などで、適切な飼育方法を伝えましょう。

### ■ 飼育相談に適切に対応する

吠える、引っ張る、トイレがうまくできないなど、電話や来所による相談があった場合に、適切な対応（その場でのアドバイス、専門家の紹介、情報提供など）をすることで、問題が深刻な飼育放棄につながらないようにしましょう。

### ■ 住民に対して譲渡事業のPRを行う

行政の現状や譲渡事業について、積極的に地域にアピールすることで、動物愛護事業への理解が深まり、ひいては適正飼養者を増やすことにつながります。広報誌や地域のマスコミを活用し、動物を飼っている人以外にも、常に情報発信し、行政が行う事業に対するサポーターを増やしていきましょう。

### ■ 動物取扱業者への啓蒙・教育を行う

動物を販売する際には、購入者に対しての「説明責任」が法律で定められていますが、その徹底や、内容が適切かどうかなど、取扱業者への研修などの機会をとらえ教育し、また、問題が多い業者に対しては個別に指導するなどの対応は非常に重要です。



### ③ 適性ある動物を譲渡する

適性ある動物を譲渡することで、その後の適正な終生飼養を可能にし、地域社会でのトラブルや事故を防ぐことにもつながります。特に攻撃性が認められる動物についての判断は、行政だからこそ慎重にならざるをえません。非常に難しい選択を求められる作業ですが、安全であることを重視し進めていくことが、譲渡事業の継続にも関わってきます。そのためには……



#### ■ 適性評価を行う

環境省がこれまでにDVDやテキスト、講習会で伝えてきた「適性評価」の方法を基に、それぞれの地域の実態を踏まえた適性基準が求められています。

収容施設にどの程度余裕があるか、リハビリに手をかけられるか、団体譲渡を行っているか、譲渡希望者が多いか少ないか、ボランティアの協力はあるかなど、さまざまな条件に合わせて、テストや判断を行いましょう。

#### ■ 動物と譲渡希望者のマッチングを行う

最も重要な作業です。このマッチングを丁寧に行うことで、ボーダーラインにある多くの動物にも譲渡の可能性が出てきます。

### ④ 不妊去勢手術を徹底する

譲渡事業の成功は、不妊去勢手術の徹底を抜きにはありえません。特に猫に関しては、現在殺処分数の8～9割が子猫であることを考えると、飼い主に対する不妊去勢手術の啓蒙が急務でしょう。また、「地域猫」や「野良猫問題」も含めた大きな視点からの問題解決が求められています。



以上のようなポイントを理解せずに  
譲渡事業を進めると……



①不適正飼養者の増加  
～苦情の増加



②収容動物、  
処分数の増加

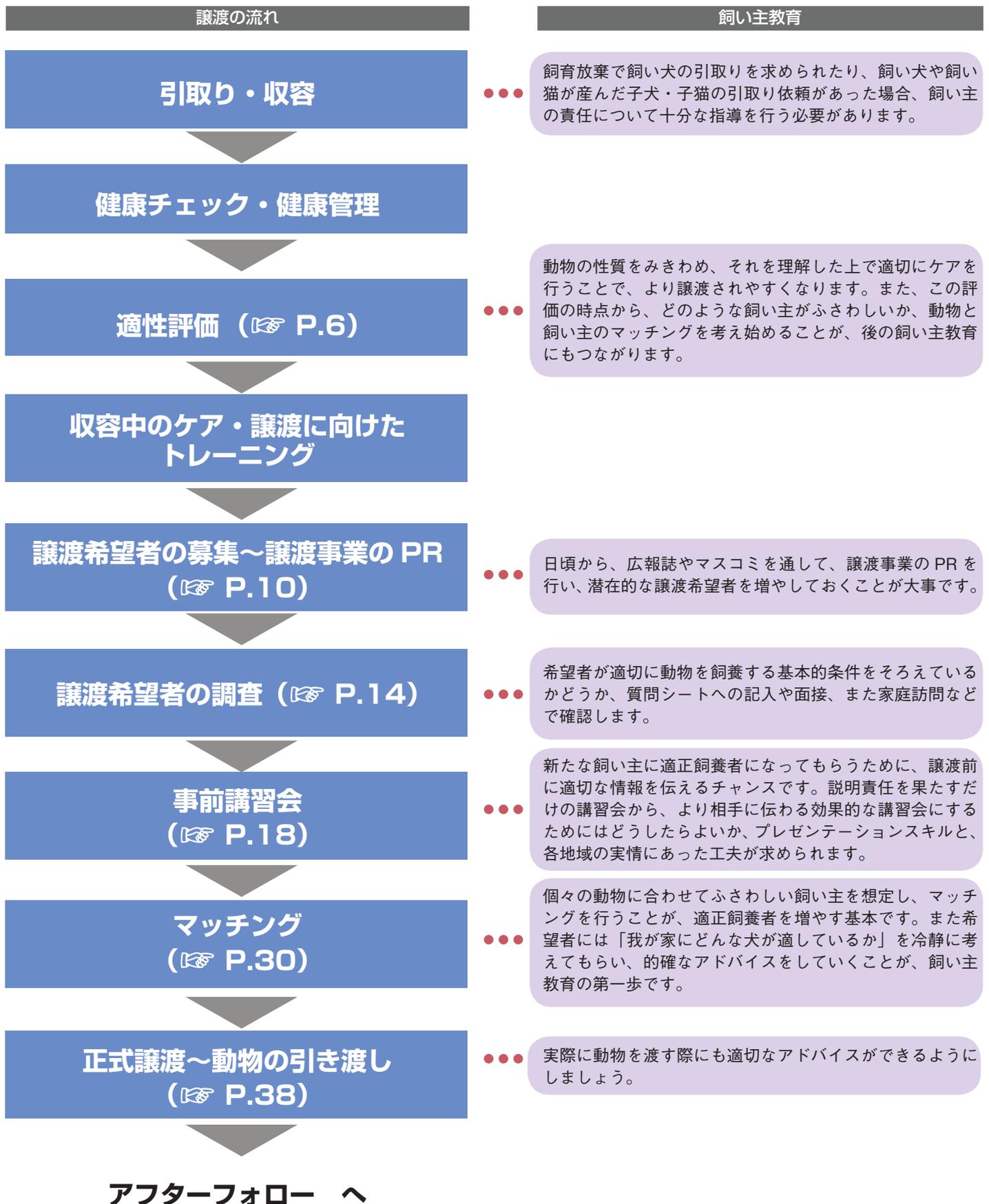


③事故や公衆衛生  
問題の発生

**ただ単純に譲渡すればいいわけではありません。**  
そのためには、飼い主教育、地域への啓蒙など「伝える作業」も重要です。  
この本を参考に「積極的かつ効果的に伝える」ことを始めましょう。

# 2. 適正譲渡の流れと飼い主教育

基本的に、譲渡事業は以下の流れで進められています。各段階でどのような飼い主教育、また啓蒙活動ができるかを示しました。(詳しくは各ページを参照してください)



## ■アフターフォロー

譲渡後のしつけ方教室  
(👉 P.42)

譲渡後の「しつけ方教室」では、訓練ではなく、人と動物が互いに快適に暮らすために役立つ内容を中心に考えましょう。しつけ方教室の対象は犬だけでなく、猫の場合もあります。いずれも、飼い主にとっては気軽に飼育相談できる場所であり、行政サイドから見ればきちんと適正飼養がなされているかどうかの確認ができる機会でもあります。

譲渡後の飼育相談  
(👉 P.62)

吠える、引っ張る、トイレがうまくできないなど、電話や来所による相談があった場合に、適切な対応（その場でのアドバイス、専門家の紹介、情報提供など）をすることで、問題が深刻な飼育放棄につながらないようにしましょう。

追跡調査  
(👉 P.80)

譲渡後、3カ月あるいは半年を目安に、飼育状況を報告してもらうようシステムを整えましょう。特に重要なのは、「不妊去勢手術」の実施報告です。報告がない場合は電話や家庭訪問で確認をすることも必要ですが、人員不足の場合、動物愛護推進員やボランティアなどの力を借りることも検討しましょう。

## COLUMN 1

### 飼育放棄をする飼い主に何を伝えるか

飼い主が引取りを希望してきた場合、どのような対応ができるでしょうか。

行政の立場上、引取りを拒否することはできませんが、この機をとらえて、動物愛護の観点からの指導を行うことは必要なのではないのでしょうか。

ただ、引取りを求めてくる飼い主にもさまざまな事情があります。以下のようなアプローチも参考にしてみてください。

**例①** 安易に引取りを求めるのではなく、飼い主自らが積極的に次の飼い主を捜すようにアドバイスをする。（ホームページの利用や、愛護団体への相談など、具体的な方法を提示することが有効です）

**例②** 子犬や子猫の引取り依頼の場合、母親の不妊手術を早急に行うように指導することが最も大切です。誓約書を書かせ実施報告をしてもらうことを条件に子犬を引取る、それが実施されない場合には今後子犬の引取りには応じない、としている自治体もあります。実際にどのくらいの数の動物が殺処分されているか、具体的に話すことで効果を上げる場合もあります。

**例③** 問題行動（吠えるなど）が原因で引取りを依頼してきた場合、しつけインストラクターやトレーナーなどの専門家に相談してみたか聞いてみましょう。地域にそうした人がいることを知らない、また問題解決の糸口があるかもしれないことを知らない人もいます。専門家のリストを渡して一度相談してみることを勧めましょう。

※いきなり動物を連れてきて「引き取って欲しい」というかたちではなく、まず電話による引取りの問い合わせがある場合も多いものです。その時点で「連れてくるということは殺処分になること」だと伝え、原因は何か、連れてくる前にできることはないか、ぜひ積極的にアドバイスしましょう。

# 3. 動物の適性評価

現在多くの自治体で、譲渡に適する動物であるかどうかの評価が行われています。適性評価や様子観察を総合して出された判断に基づき、適性ある動物を譲渡することは、その後の適正な終生飼養を可能にし、地域社会でのトラブルや事故を防ぐことにもつながります。



## なぜ適性評価が必要か？

適性評価・判断については、行う自らも多くの葛藤があり、また地域住民や動物愛護団体からのさまざまな意見もありますが、行政からの譲渡事業である以上、必要不可欠なステップです。その理由としては……

- ・ 現在の収容頭数から考え、すべてを救えない現状があるならより適性のある動物から、より多くを救う努力を……
- ・ 攻撃行動があるなど、リスクのある動物を社会に送り出すわけにはいかない
- ・ 立場上、譲渡先を選べない場合もあり、安全策を講じる必要がある

以上を踏まえ、適切な評価と判断の基準が求められています。

## 評価の方法は？

現在、適性評価のガイドラインとなっているのは、環境省から出されている以下の資料です。

- ・ 冊子「譲渡支援のためのガイドライン」
- ・ DVD「成犬の適正譲渡～もう一度幸せに～」
- ・ DVDつき冊子「子犬と子猫の適正譲渡ガイド」

ただ、上記の資料に示されているのはあくまでも基本であり、テストの内容や判断の基準については、各自治体のおかれている現状に基づいて、独自性があってもいいと考えます。

これから始めるという自治体なら、より安全性を重視したものを。また、譲渡事業を始めたころと現在とではかわる職員の知識や経験も増え、譲渡に対する社会の関心も高まり、事業を取り巻く環境がだいぶ変化してきたという自治体なら、条件を緩和することもできるでしょう。



**Q1** 攻撃性のある成犬についての判断に悩みます。テストの「犬が食べている食器の中に偽手を入れてみる」という項目で「うなる」「威嚇する」という行動が出ますが、食器がからまなければ問題は起こりません。ほかの項目は合格ですし、とても人なつこく不合格にするには忍びないのですが？

**A** DVDに収録されている「成犬の適性テスト」において、最も重要視しているのが『安全性』です。テストの内容や、その実施方法、判断基準のすべてにおいて、「テストを行う職員にとって」「犬にとって」安全であること、そして譲渡された場合に「飼い主が」「地域社会が」安全であることを基準に組み立てられています。つまり攻撃性が少しでも見られる犬に関しては譲渡にふさわしくないという判断です。

行政の行う譲渡事業としては、誰にとっても安全な犬を社会に送り出すことが最も重要であり、ここに不安が生じた場合、譲渡事業そのものの継続にも危険が生じます。そのため、非常に厳しい基準が提示されていました。

「食器に偽手を入れてみる」という項目は、その中で「所有欲に対する執着の度合い」を見るものです。この項目で「うなる」「威嚇する」などの行動が出た場合には、「食器」のみならず、ゴミ箱のゴミ、お菓子の包み紙、使い終わったティッシュなど、犬が執着しそうな物を取り上げようとした際にも同様の行動が出る可能性を、検討する必要があります。(そうした項目をテストに加えてもいいかもしれません)

また、その犬が小型犬か大型犬かで、実際噛まれた場合のケガの程度が違っても考慮に入れなければいけません。さらに、適切なりハビリで状況が改善したと

しても、将来違う環境下において、「うなる」「威嚇する」などの行動、さらにレベルアップした攻撃行動に出る可能性もあります。

以上を考慮した上で、それでも譲渡の方向性を探るなら、ポイントは「マッチング」にあります。

中には「食器を守るのは犬なら当然、邪魔しなければ問題ない」という方もいますが、その際、

- ・ 犬の行動を正確に包み隠さず話す。(実際に食器のテストを目の前で見せ、行動を見てもらうのもいいでしょう)
- ・ それでも欲しいという希望者には、事故が起こらないような管理(マネージメント~この場合は、食べているときは決して食器を取り上げない、体を触らないなど)の方法を教える
- ・ 子供など管理できない方が家族にいる場合は、さらに強くリスクについて説明をする

という手順で紹介し、確実な理解と管理を認められた方にだけ、譲渡を検討することになるでしょう。

犬の状態と譲渡希望者のハンドリング能力、管理能力、キャパシティを考慮して的確なマッチングができる、ということであれば、多少の攻撃性が見られても譲渡候補犬となることはできます。ただ、そこには非常に高いハードルがあることは理解してください。

**Q2** 子犬の社会化に力を入れたいと思っていますが、人手も時間も足りませんし、センターが人里離れた山の上にあるので、刺激もあまりありません。どのような工夫があるのでしょうか？

**A** 社会化とは、子犬の時代に、人間や他の動物、さまざまなものや環境に慣らしていくことを言います。一般に子犬は生後3週から16週が「社会化期」と呼ばれ、この時期の脳はスポンジのように柔軟にさまざまなものを受け入れることができるとされています。そのため、収容期間中に適切な社会化を行い、人間社会に適応しやすい子犬にしていくことは大事です。(施設内での社会化の方法については、「子犬と子猫の適正譲渡ガイドブック」をご覧ください)

しかし、どんなに社会化に力を入れたとしても、施設でできることには限りがあります。これから子犬たちが暮らしていくのは一般家庭であり、施設ではないのですから、その違いは明らかです。

手をかけて社会化をしてから子犬を譲渡するののも一つの方法ですが、なるべく早く一般家庭に送り出した上で「パピークラス(子犬の社会化を中心にしたしつけ方教室)」への参加を義務付けるなどして、社会化を新しい飼い主と共に行っていくと考えたほうがよいでしょう。

# 独自の適性評価の基準作りのポイント

## ① これから譲渡を本格化させたい、まだきちんとした適性評価を行っていない場合

まずは「安全」を第一に考え、基本の適性評価の方法に基づいて、厳しい基準からスタートしましょう。基準を高く設定し、確実に譲渡できる動物から手堅く慎重に始めることをお勧めします。他と比べたり、無理をする必要はありませんが、ただ常に前向きに取り組み、努力をするという姿勢は必要です。

## ② 適性評価を始めて数年経過している場合

ある程度の年数を経過しているなら、これまでを振り返り、評価の方法や判断基準が現在のセンターの状況、地域の状況にふさわしいか再検討を始めてみましょう。

### 1) これまでの譲渡実績を総括する

年度ごとの譲渡数の推移のみならず、譲渡後の返還率と返還の理由、譲渡後の飼育相談やしつけ方教室での飼い主からの相談内容、不妊去勢手術実施率の推移、地域からの譲渡事業に対する意見や苦情などを、スタッフ間で振り返ってみましょう。

できれば、これまでの譲渡実績の中から、いくつかのケーススタディを取り出し、検討してみるといいでしょう。

ケーススタディは、例えば

- ・テストでボーダーラインだったが、総合的な判断で結果的に譲渡した動物
- ・多少問題があったが希望者の熱烈な要望で譲渡した動物
- ・抽選で譲渡した子犬

など、つまり「ちょっと気になっていたケース」です。

こうしたケースのその後の飼育環境（問題を起こさず飼われているか、飼い主さんとの関係はどうかなど）を確認することで、評価基準の再検討材料となります。

### 2) 現在の譲渡事業を取り巻く環境を整理する

現在の収容施設のキャパシティ、人員の数、作業キャパシティ、経験・技術の程度、収容される動物の傾向（成犬・子犬、成猫・子猫、純血・ミックス、大型・小型など）、団体譲渡の状況（あるいは可能性）、譲渡希望者の数、ボランティアの活用の有無などを整理することで、判断基準の変更が可能かどうかも見えてきます。

## ③ 適性評価をした上での譲渡事業が長く実績もある場合

上記1) 2) で、これまでの総括、現状把握をした上で、自分たちの実情に合わせ、独自の評価基準を考えることで、譲渡の可能性をさらに広げることができます。

そして、新たな判断基準に基づき譲渡候補となった動物に関しては、できれば詳細な経過観察、譲渡の経緯、その後の状況などを記録し、スタッフ間で率直に意見交換をする機会をつくりましょう。

## 評価基準の緩和が考えられる例

### 例 スタッフに経験と技術がついてきたと思われるなら

テストでボーダーラインとなった動物に、適切なりハビリを行うことができるのであれば、譲渡の可能性が広がります。



### 例 譲渡事業を手伝ってくれるボランティアがいるなら

持ち込まれてもセンターでは飼育できない乳飲み子を一時的に預かって育ててもらい、自分で餌を食べられるようになったら譲渡会に連れて来てもらう、という方法を採用すれば、幼少動物の譲渡の可能性が広がります。

また、譲渡会開催を手伝ってもらえれば、開催回数を増やすこともでき、犬の待機期間を短くすることができます。



### 例 団体譲渡をすることになったなら

行政から一般に譲渡するには多少不安がある動物を託すことができます。また特定の犬種を引き出してくれる団体との連携があれば、その犬種を託して空いたスペースや人員で、別の候補犬をケアすることができます。



### 例 プロのインストラクター・トレーナーの協力が得られるなら

問題行動が多少ある犬のリハビリ方法をアドバイスしてもらい、あるいはプロに一時預かりをしてもらってから譲渡に出すなどの方法で、可能性が広がります。



### 例 譲渡希望者が増えている



性質はよいが高齢である、病気を持っているなどの理由で譲渡されにくい動物も紹介することができます。

※ 各自治体独自の基準を作るときに大事なことは、スタッフ間の意思の統一を図ることです。スタッフの意見がバラバラだと、地域住民や動物愛護団体に対しての説明が明確にできずトラブルの元です。スタッフ間で互いに納得のいく議論をし、その上で現状からさらに一歩よい方向に進むよう努力してください。

# 4. 譲渡希望者の募集～譲渡事業のPR

日頃から、センターや保健所が動物の譲渡事業を行っているとおくアピールしておくことで、潜在的な譲渡希望者が増えます。また同時に、適正飼養者を増やすきっかけにもなります。「保健所がそんなことをやっているとは知らなかった」という住民はまだたくさんいます。さまざまな機会をとらえ、効果的にアピールしましょう。

## ① ホームページ・ブログを活用する

動物の飼い主探しに、現在最も利用されているメディアです。それだけに、ただ文章や写真を工夫なく載せているだけでは人々の関心を引くことが難しいメディアともなっています。

硬い文章だけが並び、めったに更新されないホームページ（HP）には、人は惹かれられません。譲渡会の様子や飼い主募集中の動物たちの写真やプロフィール、幸せになれた動物たちのレポートなど、こまめに情報を更新し、見やすく、親しみのあるHPを作りましょう。

愛護団体や個人活動家のHPやブログも、ぜひ一度チェックして参考にしてください。特に、飼い主募集中の動物について、一時預かりボランティアが毎日ブログを更新し、動物の性格や人になれてくる過程などを楽しく報告しているページには、非常に多くのアクセスがあり、潜在的な活動の理解者、将来的な譲渡希望者を増やしています。行政としてそこまでやるのは難しいとしても、ヒントを探すことはできるのではないのでしょうか。

また、HPを作ったり、ブログを更新する時間も技術もないという場合には、愛護推進員やボランティアさんの中に詳しい人がいないか探してお願いしてみるのもいい方法です。主導権はあくまで行政にあり、HP制作だけを手伝ってくれるボランティアを採用するという試みの中から、民間との協働が始まるかもしれません。



## ② 自治体の広報誌や自治体のイベントを活用する

広報誌であれば、

- 月間の行事紹介のコーナーに、譲渡会や事前講習会のスケジュールを掲載してもらう
- 動物愛護週間には「譲渡され幸せになった動物たち」の特集を組んでもらう
- 「地域で活躍する人」などのコーナーに、ボランティアさんを紹介する

など、さまざまな企画でなるべく多く掲載のチャンスを狙いましょう。

また、行政が主催するさまざまなイベント（市民祭りなど）でも、啓蒙のためのブースを設けたり、チラシを配ったりできないか考えてみましょう。

もちろん、狂犬病の予防接種など動物関連の行事の際にも、譲渡事業に関する広報を行えないかどうか検討しましょう。人手が足りないときは、愛護推進員やボランティアの協力を得ましょう。



## ③ 愛護推進員や動物病院に協力を要請する

譲渡の案内や飼い主募集中の動物の写真を載せたチラシを作成し、推進員に地域のスーパーマーケットの掲示板に貼ってもらうのも有効です。地域に密着した推進員の協力は力強いものです。口コミでも広げてくれるよう伝えましょう。

また、近隣の動物病院に張り紙をお願いしてもいいでしょう。

動物病院が譲渡事業に理解を示してくれると、たとえば愛猫が亡くなり次の猫をと考えている飼い主さんに、行政からの譲渡を勧めてくれるかもしれません。獣医師会などに、譲渡事業をどのように行っているかを説明し、協力を要請するのもいいでしょう。

## ④ マスコミを活用する

マスコミの影響力の大きさは誰もが知るところですが、その分、どのように報道されるか、また報道後に批判の対象になるのではないかと不安も付きまといまいます。

マスコミに対してどのように対処すればいいか、ヒントをあげてみましょう。

### ■ こちらから情報を発信する

「マスコミに取材される立場」という受け身の姿勢ではなく、「マスコミに情報を発信する立場」にもなりましょう。自分たちが伝えたいこと、住民に知ってもらいたいことを、マスコミを通して発信する、つまりマスコミを利用するという意識です。

上手に情報発信すれば、譲渡会や里帰り運動会の開催を事前に告知してもらったり、当日取材に来てもらったり、ということが可能です。これまでに取材を受けたときに知り合ったマスコミの担当者や、記者、ライターなどに直接連絡する、プレスリリースを送るなどの方法があります。

### ■ 地域のマスコミを把握する

マスコミと一口に言っても、テレビ局、ラジオ局、新聞社などのほかに、地域住民が主体となったコミュニティFMや、地元情報を扱うケーブルテレビ、地元の商店街が発行しているフリーペーパー（クーポン付など）など、さまざまなメディアがあります。

自分の地域にはどのようなメディアがあり、どのような人に見聞きされているか、どのような情報を扱っているかなどを知っておき、利用できるかどうか考えましょう。（こうした情報は家庭の主婦や子供さんのほうがよく知っています。まずは家族に聞いてみるのが有効です）



### ■ 情報を公開する

センターの取り組みや、現在の状況など、きちんと情報を伝えましょう。

「なぜこれだけ多くの動物が収容されているのか」

「すべてを救うことができないのはどういう理由なのか」

「現在どのような方法で、取り組んでいるのか」

「住民のみなさんをお願いしたいのはどんなことなのか」

自分たちの姿勢や立場を真摯に伝えることが、理解を深めてもらう第一歩です。

### ■ プレスリリースを送る

マスコミ各社（プレス）に対して情報を流す（リリース）するのが「プレスリリース」です。

マスコミで取り上げて欲しい情報をメールやファックス、郵送などでマスコミ各社に送ります。企業が新しい事業を始めるとか、新製品を発売するといったときはこうしたプレスリリースをマスコミ各社に送信し、取材を依頼することが一般的です。また、マスコミ側も常に新しい情報、興味深い情報を求めており、プレスリリースを基に取材を始めたり、記事や番組を作成したりすることが多いのです。

この方法を譲渡事業（動物愛護事業すべてに関しても）の広報にも使いましょう。次ページのフォーマットを基本に考えてみてください。

# プレスリリースの例

〇〇ラジオ 情報番組担当者様

## <動物の譲渡会 開催告知および取材のお願い>

〇〇動物愛護センター

いつもお世話になっております。

さて〇〇動物愛護センターでは、飼い主が飼育放棄してセンターに持ち込まれたり、保護収容された犬や猫の中から、家庭のペットとしての適性や健康状態をチェックし、新たな家庭での生活が十分に可能な動物たちを、社会に送り出すという譲渡事業を行っております。

その一環として、このたび、〇月〇日（〇曜日）〇時から、愛護センターにおいて「譲渡会」を行います。当日は、譲渡可能な動物たちを、譲渡希望者の方に実際に見ていただき、お互いに幸せになれるよう、お見合い（マッチング）をしていく予定です。

今回の譲渡会に出る動物たちの中には、子犬や子猫だけではなく、大人の犬や猫もいます。大人の犬や猫であっても十分に新しい飼い主になれることはできます。体のサイズもきまっていますし、性格が安定している大人の動物のほうが飼いやすい場合も多くあります。そうした動物たちが、一頭でも多く、新たな適切な飼い主さんに巡り合えるよう、譲渡会の開催を広く広報したく思っております。

貴社の情報番組等でとりあげていただけませんか？

また、当日取材をしていただき、後日レポートしていただければ、一般への譲渡事業への理解が深まるものと思います。

どうぞご検討くださいますようお願いいたします。

なお、くわしい内容につきましては、下記担当者宛てにお問い合わせください。

開催概要：

日時  
場所

必要な情報は分かりやすく箇条書きに

この件に関するお問い合わせは

〇〇愛護センター 〇〇課 譲渡担当：〇〇

(直通電話：)

(担当者メールアドレス：)

※今回の譲渡会に登場する譲渡候補犬・猫の一部です。

写真①

<推定2歳の元気な男の子だよ。体は大きいけど、性格はやさしいんだ。ほかの犬や小さな子供とも仲良くできるよ。去勢手術済みです>

写真②

<飼い主のおばあさんが入院してしまって新しいおうちを探してるの。1歳半のトイプードルです。抱っこされるのが大好きです。>

特に知っている担当者もいなくて、どこに送っていいのか不明の場合、このような書き方でも届きます。ラジオ局やテレビ局の代表電話にかけて、こうしたプレスリリースを送りたい旨を話すと、FAX番号を教えてください。

どういった趣旨でプレスリリースを送っているのか、最初にはっきりと記載すると分かりやすいです。

譲渡会の中でも、特に強く打ち出したい点を書き加えるのも良い方法です。

告知でも取材でも、両方をお願いしておきましょう。

一度問い合わせを頂いたら、その方との関係が途切れないようにしましょう。さまざまな情報発信をし、行政の愛護事業への理解を深めてもらい、潜在的なサポーターになってもらいましょう。定期的な譲渡会の開催告知をしてもらうようお願いもできますし、「幸せになった動物たちのその後を取材してもらおう」シリーズ企画などを提案したり、逆に「譲渡事業を広めたいがどうしたらいいだろう？」という具合に相談してもいいでしょう。動物問題に関心のあるマスコミ人は多いです。

必ず、担当者の名前と連絡先を明記してください。広報担当者は一人（もしくは二人程度）のほうが話がつきやすいという印象を与えます。

具体的な動物の写真やコメントがあると、記事にしやすいです。人目を引くような（かわいさでも、ユニークさでも）特徴ある動物の写真を撮りましょう。コメントにも、親しみやすさや楽しさがあるほうがいいでしょう。

## 犬の返還率 45.26%! ～熊本市動物愛護センターの取り組み～

熊本市動物愛護センターでは、保護された迷子の犬の45.26%が飼い主の元に戻っています。全国の平均に比べても高い返還率。帰る場所のある動物は確実に飼い主の元に戻す……。殺処分数を減らすためにまず最初にできることとして、センターは、以下のような取り組みを通して、返還率アップを実現しました。

### ① 迷子札の徹底

鑑札、狂犬病注射済票あるいは迷子札を必ず犬に付けること。

これを「迷子札をつけよう100%運動」として、熊本市動物愛護推進協議会（獣医師会、ボランティア団体、ペットショップ業者などで設立）と共にさまざまな方法でアピールしています。

名刺サイズのカードを作り、センターや保健所のみならず、熊本市内の公共施設、獣医科病院、ペットショップやスーパーマーケットのレジ横など、さまざまな場所に置いてもらうように努めています。カードの裏には迷子になった場合の連絡先が書かれています。人の目を引きやすい黄色をベースにしていること、かわいらしいデザインであること、名刺サイズなので財布などにも入れやすく常に携帯してもらえること（冷蔵庫の扉にもマグネットで留めやすい）など、多くの人が手に取りやすいような工夫があります。また同じデザインのポスターやTシャツも制作。「迷子札をつける」というシンプルなメッセージに絞って徹底的にアピールしたことが成功の一つの要因でしょう。



### ② 熊本市のホームページに保護犬の写真入りの情報を掲載

前述の「迷子札をつけよう100%運動」カードの裏面には、熊本市のホームページのURLも記載され、もし犬が迷子になったらこのサイトを見ればいいということが市民に周知されています。驚くべきことに熊本市のHP全体のアクセスランキングで「迷い犬の保護情報ページ」は、常に2位から3位をキープ。「休日在宅当番医」のページよりアクセスが多いこともあるのです。市民に徹底的に周知されていること、そして全国的にも熊本市動物愛護センターの取り組みが注目されていることによる結果でしょう。

### ③ マスコミの活用

熊本市動物愛護センターでは、2002年「殺処分ゼロ」を目指すと宣言、引取り希望者への指導、週に一回の譲渡前講習会の開催、麻酔注射による安楽死などの先進的活動を行っていますが、そうした活動がマスコミに大きく取り上げられたことが、市民の動物に対する意識を向上させています。テレビの取材も多く全国的な注目を集めることで、自分たちが住む市の動物行政への理解が深まり（賛否両論もありますが）応援しようという市民も増える。そうした効果が犬の返還率アップにもつながっています。

# 5. 譲渡希望者の調査

譲渡を申し込んできた希望者には、「飼育可能な環境か、適正飼養者となりえるか」事前アンケートへの記入や、聞き取り、さらには家庭訪問などで調査・確認作業が行われています。

## 調査から譲渡まで、2つの方法

従来の方法

子犬や子猫が譲渡対象  
ならこちらでも

よりマッチングを重視した方法

成犬（成猫）も譲渡対象なら  
こちらをお勧め

譲渡希望者の受け付け  
事前アンケートの記入  
聞き取り（家庭訪問）

事前講習会

譲渡会と講習会が同じ日に開催される場合でも、必ず、動物を見せる前に講習会を行いましょう。動物を見てしまうと多くの方はその動物のことしか考えられなくなり、講習をほとんど聞いていません。

譲渡会（お見合い）

譲渡

事前講習会

譲渡リストに登録

動物の紹介（都度）

お見合い

トライアル期間

譲渡

この時点で、適正飼養が全く望めない希望者である場合は、譲渡することが不可能であると断りしなければならぬこともあるでしょう。

講習会に参加済みで、将来の適正飼養が期待できる候補者としてリストに登録します。常にリストはチェックして、長期にわたって希望動物が出ないような場合は、似たような条件の動物についてもとりあえず連絡してみてもいいでしょう。何の連絡もしないまま半年～1年が過ぎるとせっかくの適正飼養候補者を逃すこととなります。

希望に合う動物、またふさわしいと思われる動物がいる場合に、電話などで連絡をします。

センターに来所してもらい、動物と会ってもらいます。譲渡会と違って個別にしっかりと話をしたり、動物の様子を見たりしてもらえます。

家での様子を見たい、先住動物との相性を見たい、という希望があれば正式譲渡の前に2週間程度のトライアル期間を設けるのも賢明です。

こちらがおすすめ!

一頭一頭の動物に向き合い、ぴったりの家庭を見つけていく……

右の方法は確かに手間も時間がかかりますが、将来にわたって動物も飼い主も周囲も幸せであるためには大事なステップです。成犬や成猫の譲渡を成功させるために、よりマッチングを重視した、こうした「個別譲渡」も考えてみましょう。

# 譲渡希望者に何を聞くべきか？

この段階で大事なことは、譲渡希望者から、欲しい動物の希望を含めて、想定される飼育環境などの情報を、いかにうまく聞き取り把握するかという点です。「動物をもらってくれる人がいるだけでありがたい」という意識ではなく、「将来適正な飼養者になれるかどうか、そうした意思を持った希望者かどうか」という視点での確認が必要となるのです。

まずは、地域の特性、譲渡候補の動物たちの状況などによって、希望者への事前アンケートの質問内容を吟味してみましょう。

## ■ 家庭環境

- ・ 住居形態はどれですか？  
一戸建て（持ち家・貸家） 集合住宅（分譲・賃貸） 賃貸の場合（飼育可・不可・規定なし）
- ・ 家族構成（年齢・職業）をお書きください。
- ・ 家族全員の同意はありますか？ ある・ない
- ・ 主に犬の世話をするのは誰ですか？
- ・ 家族全員が定期的に留守にし、犬だけになる時間はどのくらいですか？
- ・ 引っ越しや転居の可能性はありますか？ ある・ない
- ・ 家族の中で出産の予定はありますか？ ある・ない
- ・ 家族の中でぜんそくやアレルギーの人はいますか？ いる・いない
- ・ 高齢者の場合、家族のバックアップ体制はありますか？ ある・ない
- ・ 現在、ほかに動物を飼っていますか？  
いる（種類 年齢 ♂♀不妊・去勢 大きさ 登録の有無）・いない

集合住宅であれば特に「吠えるタイプの犬」は難しいなというふうに判断できます。

できれば譲渡会や動物との対面には、家族全員で来てもらうようにしましょう。

子供がやると言っている……というのは所詮最初だけだと親御さんに強く言っておきましょう。

留守がちな家庭であれば、子犬ではなく成犬、もしくは犬よりも猫を勧めるように考えましょう。

もし動物の飼育不可の場所に引っ越すことになったらどうするつもりかも聞いておきましょう。

多頭飼育については、17ページを参照。

## ■ 希望する犬について

- ・ どんな犬を希望しますか？  
子犬・成犬 ♂♀大きさ（小型・中型・大型） 長毛・短毛 毛色 尾 耳
- ・ 犬を飼いたい理由はなんですか？
- ・ これまでに愛護団体などから犬を渡すのを拒否されたことはありますか？
- ・ 飼育スタイルは次のうちどれにあたりますか？  
室内飼育・敷地内の囲いの中・外で繋ぐ・屋間は外で夜は室内・その他
- ・ 朝晩の散歩はできますか？ はい・いいえ
- ・ 譲渡後のしつけ方教室に通えますか？ はい・いいえ
- ・ 不妊去勢手術を確実にに行いますか？ はい・いいえ
- ・ ワクチン接種や病気の治療に費用をかけられますか？ はい・いいえ
- ・ 終生責任をもって飼うことができますか？ はい・いいえ

子供が飼いたいと言っている、というような回答の場合、世話をし指導するのは親である旨をしっかりと伝え覚悟してもらうことは大事です。

外飼いに向いている犬もいます。マッチングの参考になる質問です。

## ■ これまでの飼育経験

- ・ 犬を飼った経験はありますか？  
ある・ない
- ・ ある場合（種類 ♂♀ 登録の有無 大きさ  
飼育スタイル（室内・外・その他）  
飼育年数  
現在飼っていない理由 老衰・病死・事故死・行方不明・人に譲った・実家にいる・その他）

以前の動物を適正に飼っていた経験があるなら安心です。

## 聞き取りは、アンケートからだけでは見えてこない 希望者の「気持ち」も探っていきましょう。

特に「どんな動物を飼いたいのか」しっかりと希望を聞くことも、マッチングに向けて大切な情報となります。「どんな子でもかわいそうな動物を救いたい」という人から「代々飼ってきたのと同じ純血種の犬が欲しい」「黒猫の子猫が欲しい」など、譲渡を申し込む人の気持ちはさまざまです。

そうした希望をなるべく先入観なく聞き取るようにしましょう。行政からの譲渡だからと言って動物を選べないというのでは、譲渡希望者の枠を狭めてしまいます。

希望に100%沿えるかどうかは別として、まずは希望を聞く。純血種と言うならなぜそれにこだわっているのか、その理由を聞けば、それなりのアプローチもできるかもしれません。

実際、最近都市部では純血犬種の収容が増えています。純血種には独特の性質があり、特にトリミングが必要な犬種の場合は、これまでに同じ犬種の飼育経験がある人に譲渡するほうが適正飼育につながるのではないのでしょうか。誰でも、好きなタイプや種類があります。好みの動物を飼えばおのずと可愛がり、適正な終生飼養をしてくれるということもあります。また、純血種を希望している人に純血種を譲渡すれば、その分ミックスを譲渡候補としてケアすることができます。希望を聞き取り、ある程度希望に沿った動物の提案をする。それもまた、マッチングの一つの考え方です。

## 家庭訪問が無理でもやれることはあります。

動物愛護推進員などの協力を得て、家庭訪問で確認調査をしている自治体もあります。

家庭訪問までは手が回らないという場合も、譲渡希望者に、飼育予定場所の見取り図を描いてもらう、デジタルカメラ（携帯のカメラ機能でも）で写真を撮って来てもらう、という方法で確認をすることができます。その上で「ここは玄関の横で吠えやすくなるので他の場所に繋ぐことはできないでしょうか」というようなアドバイスをすることができます。

### COLUMN 3

## 留守がちな家庭は、本当に動物を適正に飼えないのか？ ～譲渡条件の緩和を考える～

適正飼養者を増やすのが「適正譲渡」の目的の一つ。だから各自治体ではそれぞれに譲渡希望者に対する条件を定めています。

条件の大きな柱は、

- ① 地域の模範的な飼い主となりえる常識の持ち主であること  
(たとえば集合住宅の場合飼育可能であることなど)
- ② 動物の福祉に配慮した飼育環境であること (たとえば日々散歩に連れていけるかなど)

この二つはいずれも、動物の適正飼養を求めるには必要な要素です。厳しすぎるという意見もありますが、それは社会に対する大きな責任を負う行政からの譲渡には必要なものでしょう。

けれども、すべての人を一律の条件で評価し、適正飼養はできないと判断し切り捨ててしまうには惜しいという場合もあるのではないのでしょうか。①の社会的常識を曲げることはできませんが、②の飼育環境については、飼育する動物の性質によっては、基本条件に合わなくとも問題なく対処し生活できるという場合も多くあります。譲渡希望者と譲渡候補動物のマッチングをしっかりと行える施設であれば、譲渡条件を個々に合わせて緩和することも考えてみてはどうでしょうか？

特に成犬の譲渡が伸び悩む状況であれば、譲渡条件の「適切な」緩和が突破口になるかもしれません。たとえば、以下のような条件について考えてみましょう。

## 65歳以上の高齢者だけの家庭には譲渡できない？

確かに子犬や子猫を譲渡するにはふさわしくないかもしれませんが、成犬や成猫であれば可能性はあるのではないのでしょうか。性格はともいいのだけれど年齢的に譲渡は難しいという動物を勧めてみてはどうでしょうか？特に分離不安（飼い主の姿が見えなくなると吠えたりいたずらをしたりする）の小型犬などは、ほぼ一日中一緒にいることができるような高齢者の家庭の方がふさわしいともいえます。一緒にいれば問題が起きないわけですし、高齢者にとっては日々を明るくしてくれる最高のパートナーにもなるでしょう。

もちろん、いざというときの後見人的存在を明らかにしてもらう必要はあります。



## 現在他の動物を飼っている家庭には譲渡できない？

現在適正な飼育をしているのであれば、この条件にこだわる必要はないかもしれません。

確認しなければいけないのは

- ・先住動物との相性は大丈夫か？（これはトライアル期間を設けることで解決）
- ・先住動物に不妊去勢手術がしてあるか？
- ・多頭飼育の場合、手間も費用もかかることは覚悟しているか？
- ・将来コントロールできない数の動物を抱えてしまう「ホーダー」になる危険性はないか？

これらを面接で確認できれば、条件の緩和を考えてもいいのではないのでしょうか？

## 家族全員が留守になる時間が日常的に4時間以上の家庭には譲渡できない？



留守時間が長いということは、子犬、子猫を譲渡する場合には問題になります。食事やトイレなど、この時期に必要なケアやしつけが留守がちの家庭にはできないからです。しかし、成犬や成猫にもこの条件が必要でしょうか？

大人の動物の中には、留守番が平気な子も多くいます。かえって日中は一人で穏やかに過ごす方が好き、という子もいます。そうした性質の動物を勧めればいいのです。

ただし、譲渡してすぐに誰もいなくなる、という状況は動物を不安にしますので、家に迎える時期を連休や長い休みに合わせて最初は様子を見られる状況にすれば安心です。

## 一人住まいの人には譲渡できない？

独身者であっても、うまく動物を飼っている人は大勢います。要は個々の考え方やライフスタイルの問題です。職業や住居、また自分が面倒を見れないときはどうするかなど、まずは面接で細かく聞き取りを行うことです。猫の場合は特に、日中仕事で留守にしている、夜行性の動物ですから夜中に帰ってきた飼い主と十分触れ合うことができます。また経済的に余裕がある独身者であれば、ペットシッターを頼んだり、犬のデイケアに預ける……などの方法を進んで採用します。パートナーとして非常に動物をかわいがる人も多いので、一人住まいというだけで切り捨てるのではなく、よく話を聞いてみてください。

ほかにも、それぞれの地域ごとに緩和できる条件も変わってくるかもしれません。ぜひ一度スタッフ間で話し合ってみてください。そして、条件を緩和して譲渡した場合には、追跡調査を行うようにしましょう。もし問題が起きたとしたら、どんな点で検討が足りなかったのかきちんとフィードバックして今後に生かしてください。

# 6. 事前講習会

譲渡希望者が将来の適正飼養者になってくれるように、譲渡前に適切な情報を伝えるのが事前講習会で、現在ほとんどの自治体で譲渡にあたって参加を義務としています。どのような内容を、どのように伝えるのか。単に説明責任を果たすだけの講習会から、より相手に伝わる効果的な講習会にするための工夫もぜひ考えてみてください。

## 講習会開催にあたってのポイント

### 1 「動物を飼いたい」と思っているときこそ、学び時です！

譲渡希望者は、これからの動物との暮らしに楽しい将来像を描いています。「動物が欲しい」……その思いが強いこの時こそ、動物について、適切な飼い方について、マナーについて、学んでもらいやすい時期です。ある意味、動物と暮らす基本的スタンスを決定付けるチャンスでもあります。行政として特に伝えたいことを、しっかりと相手に伝わるように工夫しましょう。

### 2 職員が行うか、ボランティアの力を借りるか？

「事前講習会」の講師を、動物愛護推進員などボランティアに依頼している自治体もあります。人手も時間も足りない場合、こうした民間との連携は非常に有効です。ただし、その場合も「まる投げ」にすることなく、どのような内容をどう伝えるか、行政サイドとボランティアとでしっかりと話し合い、確認しておくことが大事です。

### 3 可能な限り、家族全員に参加してもらいましょう。

動物の飼い方、マナーについて、家族みんなが共通した認識を持つことがとても大切です。また子供のほうが素直にまじめに講習を聞き、実践してくれるという場合があります。

### 4 動物に会う前に講習を聞いてもらう！事前の開催が鉄則！

実際に譲渡候補動物に会ったり、触れ合ったりしてしまうと、目の前のかわいらしさに夢中になって冷静に飼えるかどうかの判断をしたり、講習を聞いたりすることが難しくなります。

講習会に出ても「上の空」で、内容をまったく聞いていなかったということもありますから「事前講習会」は、動物に会う前に参加してもらうのが鉄則です。

現在は、

- ① 譲渡会の開催に合わせて同じ日に講習会を開催し、参加してもらう
- ② 定期的に（月に一度など）事前講習会を開催し、これを聞いた人だけが後日譲渡会に参加できる、あるいは、ふさわしい譲渡動物を紹介する

以上の2つの方法が取られていますが、より適正譲渡につながるのは②の方法です。

講習を聞いた上で、動物を飼うとはどういうことなのか、改めて冷静に考えてもらう時間が取れるからです。

## 何を伝えるか

事前講習会で伝える内容は、大きく分けて以下の3つです。

- ①適切な動物の飼い方
- ②不妊去勢手術の実施要請
- ③法律の遵守

次のページから、それぞれに詳しく説明します。

## 適切な動物の飼い方

ここでは具体的な飼育方法というよりも、動物と暮らすというのはどういうことなのか、適正飼養の「意識」を持ってもらうことが大事です。細かな飼育方法には、さまざまな考え方がありますが、行政が共通して伝えるべきはまず「動物愛護管理法に基づく適正飼養の精神」であり、それを分かりやすく伝える表現として「動物の飼い主 三カ条」と紹介するのもいいでしょう。

### 「動物の飼い主 三カ条」

一、動物が幸せであり、最期まで大切にされること



二、飼い主が動物との暮らしを楽しんでいること



三、周囲の人に迷惑をかけないこと



### 第一条 動物が幸せであり、最期まで大切にされること

動物の幸せとは、次の要件が満たされていることです。

- ・動物が生きるのに必要なニーズ（食べ物や水、安心できる生活空間など）が満たされている（詳しくは、66 ページからの「犬のニーズ、猫のニーズ」を参照）
- ・健康であること。また病気があっても適切な治療が行われている
- ・飼い主とよい関係が築かれている

動物を飼うということは、単に「寝場所」と「食事」を与えていればいい、ということではないと理解してもらいましょう。なお、ここで言う「最期」とは、動物の命が絶えるその時まで、ということに限定せず、「もし飼い主が病気や生活の困窮などやむを得ない事情で動物を手放さなければならなくなった場合」も考えなくてはなりません。その場合には自分が責任を持って新しい飼い主を見つけるということが動物を飼う者の責任となります。

### 第二条 飼い主が動物との暮らしを楽しんでいること

動物を飼うことで、生活が豊かになることが基本です。

家族全員が動物を迎えたいと思っているか、動物に関するアレルギーはないか、確認することが大事です。その上で、「動物を飼ったらどんなことがしたいですか？」というような質問をして、動物との楽しい暮らしをイメージさせるのも有効でしょう。かわいそうな動物のために家庭や自分を犠牲にしているということでは決してないことを伝えましょう。

### 第三条 周囲の人に迷惑をかけないこと

行政として特に伝えなければいけないのは、地域でのトラブルや苦情にならないようなマナーを守った飼い方をしてもらうことです。

まずは、地域に寄せられる苦情の内容を整理して、自分たちの地域ではどのような問題が起きているのか、そして、それを予防するためにはどのようなことを伝えたらいいか、職員間でよく考えてみましょう。（詳しくは、22～23 ページ「トラブルを予防する動物の飼い方」を参照）

## 不妊去勢手術の実施要請

譲渡事業の成功は、不妊去勢手術の徹底を抜きにしてはありえません。

譲渡にあたっては、不妊去勢手術を必ず行ってもらおうということを、事前講習会で強く訴えましょう。手術がなぜ重要なのか確実に理解してもらい、手術を速やかに実施してもらうためには、この事前講習会でどれだけ強く伝えられたかが、鍵になります。

そのためには、譲渡希望者に対して、さまざまな「説得ポイント」でアプローチしましょう。

「かわいそうな動物を減らすために」というポイントで納得する人もいますし、「自分の動物を長生きさせる方法」として手術をしようと思う人もいます。何が聞く人の心に引っかかってくるか、地域性や動物に対する意識の高さなどを踏まえながら、さまざまなアプローチで伝えましょう。

### ■ 不幸な命を増やさないために……

譲渡されるのはごく一部であり、行政に持ち込まれる動物たちのほとんどが殺処分になっていること、また多くが望まない妊娠で生まれた子犬や子猫であることなど、施設ならではの視点から「これ以上不幸な命を増やさないために」不妊去勢手術の重要性を訴えましょう。

具体的にこの施設でどれだけの数の動物たちが処分されているかの数字を示すのも有効かもしれません。



### ■ 動物の健康と長生きのために……

これから一緒に暮らす「うちの子」には元気で長生きして欲しいと誰もが願います。そのために有効なのが不妊去勢手術であるという訴え方です。

- ・メスの場合、子宮の病気や乳がんの予防になる
- ・オスの場合、前立腺の病気や、精巣・肛門周辺の腫瘍の予防になる



### ■ 問題行動の予防のために……

不妊去勢手術をすることで、さまざまな問題行動が予防でき、飼いやすくなるというアプローチです。

- ・オスの場合、マーキング・マウンティング・他のオスへの攻撃性が軽減される（猫の場合はスプレー行動・発情期特有の鳴き声も軽減する）。また、シーズン中のメスのおいに誘われ脱走したり放浪したりする行動も予防できることがある。
- ・メスの場合、発情期のわずらわしさ（パンツの着用など）、発情期特有の行動の変化（普段よりも神経質になったりおもちゃを守ろうとしたりする）などがなくなる。猫の場合、発情期特有の鳴き声が軽減される。



### ■ 性的欲求が満たされないストレスから解放するために……

本来「性的欲求」というのも犬の自然なニーズですが、これを自由に満たしてやることはできません（「動物には自由恋愛は認めてあげられないのです」という言い方もできます）。そうであれば、早期に不妊去勢手術をしたほうが、性的欲求が満たされませんが故のストレスを取り去ってやることのできる、というアプローチです。処置もされず、でも欲求を毎回満たしてやることは不可能となると、オスの場合、メスの発情期のおいに惹かれて鎖を引きちぎって脱走したり、食事を取らなくなったり、そのイライラから人に攻撃的になったりすることもあるのです。不妊去勢手術に拒否反応を示すのは、特に男性が多いようですが「性的欲求が満たされないが故のストレス」という話をすると納得してくれる場合も多いようです。



犬の場合、狂犬病予防法に基づいて、飼い犬登録と年に一度の狂犬病予防接種が定められていることを伝えます。譲渡後に「登録番号」の報告を義務付けるほうがいいでしょう。また、鑑札も最近は犬の首輪に付けやすいように小さくかわいいデザインを採用する自治体が増えています。鑑札の見本や、市販されているかわいい鑑札ホルダーなどを実際に見せるといいでしょう。



所有者明示ということで、マイクロチップの装着を勧めるのもいいでしょう。

## COLUMN 4

### 外飼いの猫の苦情～他人の敷地で排泄をする～

譲渡希望者には猫の室内飼いを勧めますが、保健所やセンターに寄せられる苦情には室内と外を自由に行き来する飼い猫についてのものが多くあります。特に多いのが、近所の飼い猫が自分の敷地に侵入し庭に排泄をして困る、という苦情です。この場合、猫の飼い主に室内飼育に切り替えてもらうのが一番の解決策ですが、これまで内外自由だった猫を室内飼育に切り替えるのが難しいという場合は、マーキング・スプレー行動を予防するために飼い猫に不妊去勢手術を行ってもらうことはもちろん、「飼い主の庭や敷地内に、猫が排泄しやすいトイレエリアを作る」という方法をアドバイスすることもできます。

#### Why?

猫は自分の好きな足場を選んで排泄します。多くの猫が好むのが、サラサラの砂。だから公園の砂場で排泄する猫がいて問題になります。敷地内に侵入され排泄場所にされているお宅の庭には、そのような「猫が好きそうな環境」があるのかもしれませんが。

#### How?

飼い主の自宅の庭や敷地内に、猫が好む足場を設置してもらいます。

- ・サラサラの自然の砂を敷いた場所を複数（猫がどこを好むかわからないので）作る
- ・室内ではトイレ箱でしているなら、庭にも同じトイレ箱を置いてみる

#### Then..

こうしたトイレを自宅の庭に作ると、自分の家の猫だけではなく、野良猫やよそで飼われている猫もやってきて排泄をするようになるでしょう。その結果、「敷地内に他の猫が侵入して排泄をされる」という経験を飼い主自身もすることになり、苦情を言ってきた人の気持ちが分かるようになるかもしれません。それが、猫の室内飼育を真剣に考えるきっかけになればいいでしょう。

そのほか、飼い猫が好むトイレの環境を、自宅敷地内に作れば、わざわざ近所のお宅に侵入することが少なくなる場合があります。またどの程度成功するかは不明でも、苦情元に、飼い主の努力や姿勢を伝えることはできます。

## トラブルを予防する動物の飼い方

### 行政に寄せられる動物に関する苦情ワースト5

犬の場合	排泄物の放置・におい・抜け毛・吠え声・ノーリード(放し飼い)
猫の場合	鳴き声・排泄物の放置・敷地侵入(いたずら)・におい・抜け毛

動物に対して近隣から寄せられる苦情をリストアップして、講習会のときに提示しましょう。そして、そうした苦情トラブルを起こさないよう、予防策を具体的に伝えましょう。資料として見やすくまとめて、譲渡時に改めて手渡しするのもいいでしょう。

### 犬によくある苦情とその予防策

#### ●におい

##### ■排泄物のにおい

- ・ 集合住宅の場合、ベランダにトイレを設置ないようにしましょう。
- ・ 一軒家で自宅の庭で排泄させている場合、糞はその都度確実に拾って処理（排泄に出しているときには飼い主が見ていた場所を確認）、尿は水で流しましょう。

##### ■犬自身のおい

- ・ 定期的なシャンプー、ブラッシングを！

##### ■外飼いの犬小屋のおい

- ・ 中の敷き物を定期的に洗濯・交換

#### ●抜け毛

##### ■集合住宅の場合

- ・ ベランダでブラッシングはしないようにしましょう（バスルームなどで行う）。
- ・ ベランダで、犬用の敷き物などの毛をパタパタとはらわないこと（人間の洗濯物にも毛が付いている場合があります。あらかじめバスルームなどではらってから、ベランダに干しましょう）。
- ・ バスルームでブラッシングをする場合は、排水溝にネットをかけるなどの配慮を！

##### ■一軒家の場合

- ・ 庭でブラッシングをしない！（隣家に毛が飛びます）

##### ■公園や河原など公共の場所でブラッシングをしない！（飛び散る毛までは集めきれません）

#### ●吠え声

##### ■外飼いの場合

- ・ 訪問者や通行人、車などに向かって吠えることが多いので、繋ぐ場所に注意しましょう。
- ・ 玄関の横、道路に面した場所（犬から通行人や車が見える）は避けましょう。
- ・ 通行人や車の往来が多い時間帯（朝夕の通勤通学時など）だけ、玄関の中に入れる、裏庭に繋ぐなどの方法も有効。

##### ■室内飼いの場合

- ・ 窓から外を見て吠えるなら、外が見えないようにカーテンをしたり、スクリーンを貼ります。
- ・ 留守番中に吠えるなら、ラジオや音楽を流しっぱなしにして出かけましょう（あまりに静かな環境でいると、外の小さな音でも気になり吠えてしまう場合があります）。
- ・ 集合住宅の共有廊下を歩く人に吠えるなら、犬が生活する場所（部屋・ハウス・サークルなど）をなるべく共有廊下から遠い場所にしましょう。

## 猫によくある苦情とその予防策

敷地侵入・排泄物・いたずら（庭・畑・ゴミ集積所）・捕食行動（飼い鳥・鯉・野生動物）……。猫を室内だけで飼育するようにすれば、これらの問題は起きません。譲渡の際には、必ず猫の室内飼いを勧めましょう。

### ●におい

■猫を飼っている家からは、独特のアンモニア臭が漂うことがあります。

- ・ トイレを常に清潔に保つことで防げます。多頭飼いの場合はトイレの数も増やし、トイレ以外の場所に排泄をさせないようにしましょう。
- ・ 特に臭いのは、オス猫がマーキングとしてする尿のにおいです。これは去勢手術をすることでほとんど防ぐことができます。

### ●抜け毛

■猫の毛は犬のものより細くやわらかで、飛び散りやすいので特に注意！

猫アレルギーの人は、わずかな毛でも症状が出ることがあります。

- ・ こまめに家を掃除しましょう。
- ・ バスルームでブラッシングをする場合は、排水溝にネットをかけるなどの配慮を！

### ●鳴き声

■最も多い苦情は発情期の猫の鳴き声です。これを予防するのは、不妊去勢手術が最も効果的で、そして唯一の方法です。

## COLUMN 5

### 地域に合った飼い方指導を！

国内には、まだまだ外飼いの犬が多い地域もあれば、ほとんどが集合住宅で小型犬の室内飼いという地域もあります。そのすべてに、同じ飼い方を指導し「この飼い方でなければだめ」と伝えても現実的ではないでしょう。適切な飼い方を指導する際には、地域の特性を考えて独自の具体的なガイドラインを作っていくことも大事です。「犬猫の外飼い、室内飼いのおおまかな比率はどの程度か」「動物に対する地域住民の意識」「保健所に寄せられる苦情」など、地域の動物をめぐる現状を把握した上で、それに合った適正飼養のガイドラインを作りましょう。あまりにも現実からかけ離れた理想論を押し付けても、地域の中で空回りしてしまう可能性があります。

#### たとえば……

**都心部**：犬の散歩の際には糞を持ち帰るだけでなく、尿も水で流すなどの配慮が求められます。散歩の際には、糞を拾う袋だけでなく、尿を流す水を入れたペットボトル、あるいは吸い取るペットシートを必ず持つ、という指導が必要でしょう。

**郊外**：猫は家と外を自由に出入りするという飼い方がまだまだ当たり前の地域も多いでしょう。新たに飼う人に対して「完全室内飼いのメリット」を説明し納得してもらうことは大事ですが、外猫であっても、周囲に迷惑をかけないように飼うための具体的なアイデアを提示するのも現実的な飼い主指導になります。

## 本当に相手に届く 伝わるコミュニケーションを！

譲渡事業においては、人とかわかり、「人に伝える」仕事が多くあります。

譲渡事業の広報、講習会での説明、マッチングの聞き取り、飼い方指導、しつけ方教室、飼育相談への対処など、どれも動物愛護の精神と適正飼養を広めるために大切なことを伝えなければいけません。

しかし、実際には「こちらは伝えたつもりなのに」理解されていなかった、実行してもらえなかった……と悩むことも多いのではないのでしょうか。ただ「伝える」だけではなく、本当に相手の心に「届く」、そして実行に結び付けてもらえる「伝え方」のポイントをご紹介します。

コミュニケーションは**キャッチボール**だと言われます。

相手に合わせたボールを投げるのが大事です。

相手が受け取れない、キャッチできないボールを投げても、伝えたことにはなりません。

ちなみに、キャッチボールの反対は？

相手に構わず投げる、相手にぶつけるだけの**ドッジボール**……かもしれません。

ドッジボールではなく、お互いに気持ちのいいキャッチボールを心がけましょう。

## 講習会などで説明する～プレゼンテーションのポイント

限られた時間の中で、伝えたい内容を、いかに相手の心に訴えかけるか……

人を惹きつけ、大事なことをしっかり心に刻んで帰ってもらうために、以下のような工夫をしましょう。

### 詰め込みすぎない！～伝える内容を絞り込む！

伝えたい内容はたくさんあります。けれどそのすべてを漏れなく説明しようとする、散漫な印象になり、結局何も記憶に残らない……ということになります。思い切って、伝える内容を絞り込みましょう！

たとえば、犬の事前講習会であれば、飼い主の三力条と、不妊去勢手術、登録と狂犬病予防接種だけに絞り、「引っ張らずに歩くしつけ方」や「トイレのしつけ方」などは譲渡後の教室や相談で伝えることにしよう、という具合です。譲渡の流れの段階に合わせて情報の優先順位を付け、絞り込むのです。十伝えて一つも覚え

てもらえないよりは、内容を絞り込んで確実に覚えて帰ってもらいましょう。

ちなみに、『マジック3』という言葉があります。3という数字でまとめると、人の記憶に残りやすくなります。たとえば、「今日は、この3つだけは必ず覚えて帰ってください。ひとつめは……」というような表現。聞いている方も「3つ」と言われると覚えやすいですし、話す方も「3つ」と思えば資料を見なくても説明できるようになります。

### 記憶に残る「伝え方」～行政職員の思いを伝えよう！

なぜ不妊去勢手術が必要なのかを伝えるときには、殺処分の数だけではなく、そうした業務を自分たちがどのような気持ちで行っているか、正直に話すことで相手の心に訴えることもできるのではないのでしょうか。飼育放棄をされた動物たちへの思い、収容して世話をしてもすべてを救うことができない現実、個人的な体験や苦悩や葛藤……そうした具体的な経験談は聞く人

に強い印象を残し、これ以上不幸な動物を増やさないように、必ず不妊去勢手術をしなければ……という思いが生まれます。

人の感情が揺れ動いたときに脳は強く記憶する、と最新の脳科学は明らかにしています。心を動かされる話を聞いたときにも同じです。行政職員にしかできないリアルな話を伝えましょう。

## 記憶に残る「伝え方」～視覚に訴える

記憶率に関する、下図のようなデータがあります。

情報を人はどの程度覚えているか？



つまり、説明を耳で聞いてもらうだけではほとんど情報を記憶にとどめてもらえない。写真を見せる、実物を見せる、デモンストレーションを見せる、といった視覚に訴えれば記憶率は上がり、さらに自分で体験することで、情報はより記憶に残りやすくなるのです(しつけ方教室などはまさにこれにあたります)。講習会でのプレゼンテーションでも、「最も訴えたいこと」は、言葉で伝えるだけでなく、写真や実物など「視覚に訴える」のが効果的だということです。

例：言葉「犬のリード(ひも)を放して散歩させると、交通事故に合う危険がありますから、絶対に放さないようにしましょう」

+ 写真(犬が路上で亡くなっている)



ショッキングな写真ですが、これを見れば絶対にリードを放してはいけないのだと頭に強くインプットされます。

## 分かりやすく伝える！

まず、専門用語は極力使わず、平易な言葉で誰にでも分かるように説明するよう心がけましょう。

たとえば「リード」と言っても分からない人もいます。「リード、散歩の時のひものことです」という具合にひとこと加えましょう。

また、身近な「たとえ」を盛り込むと話は伝わりやすくなります。特に聞き手が共感を覚えるような「たとえ」ができるとう効果的です。たとえば、参加者の中に子育て経験者が多そうなら「赤ちゃんを育てているときに毎

日いいうんちかな?と確認しましたよね。犬の糞を拾うときにもしっかり見て今日は元気かな?と確認してあげてください。人も犬も、うんちは健康のバロメーターですよね」という話は共感を呼ぶでしょう。「ある、ある、ある……」という感覚は非常に伝わりやすいのです。さらに、数字の伝え方にもテクニックがあります。「平成20年度犬の殺処分数82464頭」という数字に加えて、「一日あたり226頭」という表現も加えたほうが身近に感じられ数字にリアリティが生まれます。

## 飽きさせない工夫を！

事前講習会の1時間、こちらが一方向的に話しているだけでは聞き手も飽きてしまい、どんな大事な話も耳に入らなくなります。飽きさせない工夫には、次のようなものがあります。

- ・ ときどき聞き手に質問する（犬を飼ったらどんなことをしてみたいですか？など、楽しげな答えを引き出す質問などを挟み込むことで参加意識が高まります。答えるのが難しくない質問にしましょう）
- ・ 資料を渡すタイミングを計る（講習会の最初にすべての資料を渡すよりは、話の中身に合わせてその都度必要な資料を渡すようにすると、その都度意識を引き付けることができます）
- ・ 書き込み式の資料も効果的！（穴あき問題のような資料を渡し、その場で説明しながら大切な言葉を（ ）内に書き込んでもらうという方式にすると、参加意識も高まり記憶にも残りやすくなります。穴埋めが多すぎるのも逆効果ですので、1枚の資料に、せいぜい2～3か所。特にここに注目して欲しいという個所を、書き込んでもらうようにするといいでしょう）
- ・ 時間配分で飽きさせない！（10分話をしたら、次に映像を見せ、また話に戻る。途中で便利なグッズを手にとって見られる時間をつくる……といったメリハリのある時間配分をしましょう）

## 準備ができれば……

まずリハーサルをしましょう。スタッフや家族に聞いてもらうのもいいでしょう。率直な意見をもらうと勉強になります（家族の意見が一番シビアではあります）。人前に立つことに緊張を感じるなら、実際に講習会を行う場所（自分が立つ位置）でもリハーサルをしましょう。場所に慣れることで、だいぶ楽になります。また、本番では、会場の聞き手の中に一人でも味方を探しましょう。こちらの話に大きくなづいてくれたり、熱心にメモを取ったり、冗談によく笑ってくれたりする、つまり良いリ

アクションをくれる方。慣れないうちはまずこうした味方を見つけ、その方に向かって話しかけるようにすると気分も上がってきます。そうして落ち着いてきたら、全体にも目配り、心配りを。プレゼンテーションがうまくなるコツは何度も経験を積むことです。

## 「納得のツボ」を刺激する

新たな考え方や情報について説明を受けたときに、その説明のどこにピンと来て「なるほど、そうか」と理解するのか、「それならやってみよう」と行動に移すのか……

その「ピンとくるポイント」＝「納得のツボ」は、年齢差や地域差、個人の価値観の差によっても、違いま

す。講習会では、さまざまなアプローチ（なぜそれを行うのか、それによるメリット。それをしないことによるデメリット。キャッチーな言葉、映像、写真、ときには感覚的な理由まで）を準備し、参加者の「納得のツボ」を刺激しましょう。どんなアプローチがあるか、スタッフ間で意見を出し合うのもいいでしょう。

### 例：狂犬病予防注射接種を勧める

- ①これは法律で決まっていることです（法の遵守というアプローチ）
- ②現在は日本に狂犬病にかかった犬はいませんが、いつ海外から感染が広がってくるかは分かりません（自分と、自分の犬を守るというアプローチ）
- ③万が一自分の犬が咬傷事故を起こした場合、狂犬病予防注射を打っているという証明がないと非常に不利になりますよ（リスク管理というアプローチ）
- ④狂犬病にかかった犬（人）の映像を見せる（危機感をあたえるアプローチ）

### 例：不妊去勢手術の実施を勧める

- ①不幸な命を増やさないため
- ②自分の犬が健康で長生きできるように
- ③問題行動（発情期の脱走、攻撃性、鳴き声など）の予防のため
- ④性的欲求が満たされないストレスから解放するため
- ⑤子宮蓄膿症など、手術を行わないことではかかる可能性のある病気の状態のひどい写真を見せる
- ⑥手術をすればいつまでも子供っぽさが残り可愛い、という人もいますよ！

### 例：散歩の時はリードを放さないよう伝える

- ①リードは飼い主と犬を繋ぐ「命綱」です
- ②リードを放してしまうと、交通事故に遭うかも
- ③リードを放してしまうと、他人に飛びつきケガをさせるかも
- ④リードを放してしまうと、糞をどこでしたか分からず拾えない
- ⑤リードを放してしまうと、何かの刺激でパニックになったときにどこまでも逃げて帰ってこれないかも

### 例：マイクロチップを入れるよう勧める

- ①迷子になったときに、確実に家に戻る（自宅から遠く離れた場所で保護されマイクロチップのおかげで戻れた例を話す）
- ②災害のとき、行方不明になっても探せる
- ③首輪や鑑札が外れても、マイクロチップは体内にあるので絶対に外れない
- ④急に外国に連れていくことになったら、マイクロチップが入っていることは渡航条件となる
- ⑤実際マイクロチップが入っている犬で、読み取りの様子を見せる
- ⑥特に室内飼育の猫は首輪をしていないことも多いが、マイクロチップを入れておけば災害時も安心

## 読んでもらえる配布物を作ろう

適正飼養のための冊子や、パンフレット資料を作っても、本当にそれが読まれ理解されているでしょうか、飼い主の心に届くものになっているでしょうか。

以下は、配布物製作のポイントです。

### ●要点を絞り、読みやすいデザインにする

パソコン製品の分厚い取扱説明書を、隅から隅まで読む人はいるでしょうか？

あまりにも多くの情報を詰め込みすぎると読みづらだけでなく、まったく読まれない場合もあります。

### ●文字だけの資料は避ける

パソコンの中に入っているフリーイラストを使う、スタッフやボランティアにイラストの上手な人がいたら協力してもらおう、センターの犬や猫の写真を掲載するなど、見て楽しいものにしましょう。

### ●事前講習会用の資料は、穴埋め形式？！

説明を聞きながら、参加者自身が言葉を書き入れられるようになっていると真剣に講習を聞いてくれるようです。

しつけ方教室のオリエンテーションに配布する資料なら、自分の犬の名前や好きなものを書き込める「パーソナルブック」のような形にしても喜ばれるでしょう。

# 不妊去勢手術の徹底

譲渡数を増やしても、持ち込まれる子犬や子猫の数が減らなければ意味がありません。まずは収納される頭数を減らす。不幸な命がこれ以上増えないよう、安易な繁殖をしないように、譲渡された子犬や子猫に不妊去勢手術を義務付けるのはもちろん、その意義を市民に広く周知し、ペットの飼い犬・飼い猫にも避妊去勢手術を行ってもらおうようにするのが最も大切なことです。以下に挙げるのは、全国の自治体が行っている「不妊去勢手術徹底」のための方法です。参考にしてください。

## ① 飼い主への指導と「実施の確認」で実施率アップ

事前講習会での説明、譲渡の際の誓約書への誓いだけでは、手術の実施率を上げることはできません。実際に不妊去勢手術が実施されたことを、報告書として提出するよう、新しい飼い主に要請している自治体も多くあります。報告の内容は、「不妊去勢手術を実施した日付、病院名、譲渡後の飼養状況」などが基本で

- 譲渡時に、往復はがきや切手付きの封書もつけて、返信をお願いする
- 譲渡後一定期間（1カ月後、3カ月後、6カ月後など）をおいて、はがきなどで報告を求める
- 報告がない場合、報告の内容に不審な点がある場合、電話さらに訪問などで確認、再度指導

といった方法がとられています。



## ② 団体譲渡では手術実施率 100%

民間の愛護団体・ボランティアなどを通して、個人家庭に譲渡する「団体譲渡」（自治体によって、ボランティア譲渡などとよばれることもあります）の場合、不妊去勢手術の実施率が、100%となります。これは、個人家庭に譲渡する前に、団体（ボランティア）が不妊去勢手術を行うためで、東京都が平成18年に行った「譲渡犬の追跡調査」によると、団体の手から譲渡された犬の場合は、不妊手術の実施率が100%。去勢手術は93.8%（一匹のみ譲渡された犬が高齢であったため、獣医師の判断で手術を見合わせた）となっています。これに比べて、行政から個人に対して行った一般譲渡では、不妊手術が71%、去勢手術が50%にとどまっており、ここにも、民間と連携し団体譲渡を行うメリットが見えてきます。

## ③ 獣医師会との連携で無料不妊手術を実施

大分県では、(社)大分県獣医師会およびボランティアとの協働事業として、平成19年度から、県が譲渡した子犬の無料健康診断とメスの子犬の無料不妊手術が行われています。

譲渡された子犬の1カ月以内の健康診断と、メスの子犬の不妊手術にかかわる経費および実施を、獣医師会の100%負担で実施。この事業によって、不妊去勢手術を実施する飼い主が増え、また手術料が高いからということで希望者が少なかったメスの子犬の譲渡も増えています。



## ④ 譲渡前の不妊去勢手術

長野県動物愛護センター（ハローアニマル）では、平成12年4月のオープン以来、県下の保健所から引き継がれた譲渡候補の犬猫（成犬・成猫も含む）すべてに、センター内の医療室において不妊去勢手術を行い、その後、一般家庭に譲渡しています。譲渡前に行うことで、譲渡された動物が出産して不幸な命がまた持ち込まれるという悪循環を完全に断ち切ることができます。

# ピンクリボン・キャンペーンと共同アピール！

## ～不妊去勢手術PRのためのアイデア集～



譲渡動物だけではなく、一般に飼われているペットの犬や猫、地域猫に対しても、不妊去勢手術の有効性をアピールすることも重要です。以下は、そのためにどんな方法があるか、今年度の適正譲渡講習会でグループディスカッションを行った際に出たアイデアフラッシュです。最初から、現実的にはこんなアイデアは無理、と決めつけずに水平思考で頭を絞っていただいたところ、これまでになかったようなさまざまなアイデアが出ました。みなさんも、前例に固執せず、さまざまな機会をとらえて効果的にアピールする方法を考え、積極的に取り組んでください。

### ■ 既存のイベントへの相乗り広報

- ・ ピンクリボン（乳がん検査の啓発）・キャンペーンの際に「ガンを予防する」という共通点から、不妊去勢手術をアピールするブースを設ける（自治体での事例あり）
- ・ 動物愛護週間の「子供の絵画コンクール」で、不妊去勢手術をテーマにする

### ■ 子供への教育（将来の適正飼養者を育成）

- ・ 「動物ふれあい授業」などの際に、子供に教育し、親にも伝えてもらう
- ・ 子供たちに分かりやすいよう、マンガなどにして訴える
- ・ 講習会には家族で参加してもらい、手術の実施を「家族の誓い」として書いてもらう（やらなかった場合、子供から親へ指摘してもらうことも）
- ・ 獣医科大学や動物の専門学校プログラムに加えてもらい、教育する

### ■ 特典作戦

- ・ 手術済みの動物には特典を与えてもらうようにする  
民間の動物保険の料金の割引、トリミング・ペットホテル利用時の割引
- ・ 手術済みの動物を表彰する  
表彰状、「優良ペット」のステッカー、首輪に付けられるIDの配布
- ・ ペットフード会社などから商品を提供してもらい、手術済みの飼い主にプレゼント

### ■ 地元獣医師・動物愛護推進員との連携

- ・ 譲渡の際に地元の動物病院のリストを配り、手術実施病院を想定してもらう
- ・ 健康診断や狂犬病予防接種、ワクチン接種の際に獣医師から勧めってもらう
- ・ 地域猫を多く手術してくれている病院を表彰する
- ・ 推進員と連携して、譲渡後の家庭訪問で手術実施の確認をしてもらう

### ■ アピール

- ・ 公園などに「看板」を建ててアピール
- ・ 狂犬病予防接種のお知らせはがきに情報を載せる
- ・ 動物愛護週間などに、電車で車内広告を出す
- ・ 地元出身の有名人・タレントなどに協力を依頼し、ポスターを作る and more……

# 7. マッチング

単なる「譲渡」になるか「適正譲渡」となるか……その違いをまず分けるのが、マッチングです。かつては「欲しいという方にその場で渡す」あるいは「抽選で飼い主を決める」という方法を取る自治体も多くありましたが、適正譲渡への意識が高まるにつれ、「個々の動物にふさわしい飼い主をマッチングする」という方法に変化してきています。また希望者に「我が家にどんな犬が適しているか」、飼育環境やライフスタイルに照らし合わせて冷静に考えてもらうのは、適正飼養者を増やす飼い主教育の第一歩です。

## なぜマッチングを行うのか？

その理由をスタッフ間で再度確認しておきましょう。「譲渡」に対するセンターの姿勢を統一しておくことは、住民への説明の際に重要な要素となります。

### ① リターン、飼育放棄、遺棄を防ぐ

家庭環境やライフスタイルに合わない動物は、結局のところ飼い主の負担になり、飼いきれなくなり、センターに戻されたり、飼育放棄や遺棄をされたりと、不幸な結果を生みます。

たとえば以下のような例は実際に起こっています。

**事例 1** 集合住宅に吠えやすい小型犬を譲渡したところ、吠え声の苦情からセンターに戻ってきた。

**事例 2** 抽選で飼い主を決める譲渡会で、老夫婦に子犬を譲渡したところ、予想以上に大きくなって扱いきれないと飼育放棄してきた。



### ② 安易な譲渡は、不適正飼養者の拡大につながる

一時の感情や子供にせがまれて「動物をいませぐ飼いたい」と希望する人の言うとおりに、安易に譲渡をしてしまうと、その後に適切な飼育がされず、リターンや放棄まではいかないものの、困った飼い主を増やすだけの結果となります。たとえば、以下のような例です。

**事例 1** 子供が欲しいと言うので子犬を希望する家庭に譲渡したところ、子供の興味はすぐに失せ、親も時間がないなどの理由で、外に繋がれたまま散歩も行かずただ餌をやるだけの飼育をしている。

### ③ 「飼いたい犬」が「飼える犬」とは限らない

流行の犬が飼いたい、子犬から育てたい、などのイメージ先行で動物を希望する家庭に、その要望通り譲渡しても、現実には飼育が難しく持てあます、ということがあります。トリミング犬種の場合は、トリミングにどれだけ費用がかかるか経済的な部分の確認が必要ですし、子犬の場合しつけにどれだけ時間と手間がかかるかをきちんと説明する必要があります。マッチングの際に家族全員の同意が得られていることはもちろん、動物を飼うに当たっての費用についても確認しないと後々の問題に発展します。

**事例 1** 流行犬種が欲しいとプードルを希望する家庭に譲渡したが、トリミングにこんなにお金がかかると思わなかった、これ以上飼うのが難しいと相談があった。

**事例 2** 「病気があってもかわいそうな犬を救いたい」と希望する主婦に老犬を譲渡したところ、病気の治療に多額の費用がかかって家庭内で問題が発生。夫からセンターに戻すよう言われている。

### ④ 抽選は、本来の「適正譲渡」の目的に大きく外れる

一見公平に見える「抽選」方式ですが、①～③でみたような問題を引き起こすリスクが非常に高いと言わざるをえません。また、動物愛護の精神から言っても「生き物（命）の運命を抽選にかける」という方法が、一般の理解を得るのは難しいでしょう。

# どのようにマッチングを行うか？

譲渡希望者の生活環境やライフスタイル、どんな動物を希望しているか？  
を詳しく聞き取っておきます。



適性評価テストや、日常の世話の中から、性質をみきわめておきます。



## マッチング



### 個別譲渡スタイル

よりよい組み合わせをスタッフ間で相談した上で、  
希望者と動物のお見合いを個別に設定。  
不安のある場合はトライアル期間（2週間程度）  
を設けて様子観察をしてもらいます。



### 譲渡会スタイル

譲渡会で、実際に動物を紹介しながら、  
よりよい組み合わせのアドバイスをします。

より適正な譲渡につなげるには、個別譲渡がおすすめです。

なぜマッチングを行うのか、どのような考え方でマッチングを行っているか、一般に対してきちんと説明する資料を作っておくのもいいでしょう。「なぜうちは子犬がもらえないのか？」というようなクレームへの対処法の一つとしても使えます。P.35 「うちの家族には、どんな動物がぴったりかな？」を参考にしてください。

# 犬のマッチングのアドバイス

## 小さい子供のいる家庭には……

子供に対して温厚にふるまえる犬がいいでしょう。子供というのは急に犬に触ったり、高い声を出したりします。そうした行為にどんな行動を見せるか、適性テストの項目に加えるのもいいですが、実際の子供に会わせてみないと反応が分からない場合もあります。譲渡会などでセンターに子供が来たときの犬の反応をよくチェックしておきましょう。

なお、子供の性別や年齢・性格によっても、ぴったりの犬は異なります。小学生の男の子の兄弟がいる場合には、多少乱暴な扱いでも気にしないおらかな元気で活発な犬がいいでしょう。比較的小となしい女の子がいる場合は、活動的すぎない落ち着いた犬がお勧めです。やんちゃ過ぎる犬だと子供のほうが犬を怖いと感じてしまうかもしれません。いずれにしても、基本的に犬の世話は親が行い、子供も手伝うというスタイルを指導しましょう。



## 共働きの夫婦、留守番時間が長い家庭には……

実は、犬よりは猫がお勧めです。犬の場合なら、若い犬は避けて、落ち着きのあるタイプ、独立心の強いタイプで、一匹でいることが苦にならない犬がいいでしょう。収容期間中に一匹でケージに入れたり、一匹で繋いでおいたりして様子を見てみましょう。ケージに入っていることが負担になっていない、繋がれた場所で落ち着いていられる、そんな犬なら留守番が長くても負担は少ないでしょう。また、特定の人にあまり執着しない犬のほうがいいでしょう。子犬を希望されたら、子犬の飼育には手間と時間がかかることを十分に説明しましょう。

## ペット可のマンションに住んでいる家庭には……

集合住宅には、吠えにくい犬を薦めるのが一番です。ただし、ペット可マンションの多くは「小型犬まで」と規定されていて、そして小型犬のほとんどは吠える傾向を持っています。センターでは吠えていなくても、環境になれると吠えだす小型犬も多いことを注意しましょう。なお、小型犬の中でも、シーズーやパグなど短頭種のほうが吠えにくい傾向にあります。また日本犬系雑種のほうが小型洋犬よりは吠えにくいので柴犬サイズくらいまでOK というマンションなら、この選択もありでしょう。



## 家族全員が大人で、比較的静かに暮らしたい家庭には……

実は犬よりも猫がお勧めですが、犬の場合であれば、落ち着いて行動できる中高齢以上の犬、動きが緩慢な犬、サイズで言うと小型犬より中型犬をお勧めしたいところです。小型の犬は動きが活発で、室内でもエネルギーに動きませんが、大型犬・中型犬は、室内ではのんびりおっとりできる犬も多いのです。

## 外飼いを予定している家庭には……

最初から外飼いを希望する家庭には、これまでずっと外で飼われ、吠え声などの問題が起きていなかった、性格の安定した、中型以上の成犬を薦めるのがいいでしょう。飼い主の引っ越しなどで飼育放棄されたけれど、性格に問題はない犬もいるはずです。これまでずっと外飼いだっただ犬の中には、家の中に入るとなかなか落ち着かずストレスになる子もいますから、そうした犬には再び外で暮らす生活もいいでしょう。ただし、外飼いであっても犬のニーズを満たすようきちんと指導しましょう。



## 番犬を欲しいという家庭には……

まず家の周囲が、本当に吠えて大丈夫な環境かどうかを確認しましょう。問題がなければ、比較的吠えやすい犬を薦めることもできます。ただし「怪しい人が来たときだけ吠える犬が欲しい、というのは無理であること」「吠えやすい犬は、すべての人間や犬、動物、音などの刺激にも吠えるものだということ」「四六時中吠えていても本当に飼い主も周囲も耐えられるか」などを、しっかりと希望者に伝え、確認しましょう。

## これまでに犬を飼った経験もあり、犬と積極的にアウトドアなども楽しみたいという家庭には……

活発で楽しい犬、逆にいえば、興奮レベルが高く、いたずらや甘噛みも激しく、運動量も相当必要となる犬（あるいは、そんな将来を予測できる子犬）も、任せられるでしょう。散歩や遊び、トレーニングなど、犬に多くの時間を割くことができ、犬との生活を楽しめるなら、最高のパートナーになるでしょう。逆にそうした犬は、一人暮らしや高齢者、また留守が多い家庭には不向きです。



## すでに先住犬のいる家庭には……

まず、先住犬に不妊去勢手術が施されているかを証明書などで確認。その上で、先住犬の性格を聞きましょう。他の犬に対してシャイな犬なら、新たな犬が入ることでストレスを感じてしまうかもしれませんから、譲渡は見合わせたほうがいいかもしれません。先住犬が他犬とのふれあいを楽しめる犬ならば、新人が入ってもストレスは少ないでしょう。ちなみに比較的うまくいくのは、以下のような組み合わせです。

- ・ 異性同士
- ・ 年齢差がある（大人の先住犬に、子犬を会わせる）
- ・ 純血種ならば同犬種（遊びやポディランゲージが同じなので仲良くなりやすい）

また、二匹の関係がうまくいくかどうか、実際に犬同士を会わせ、トライアル期間（2週間程度）を設けてみるのもいいですが、その際には最初の出会いが肝心。そのポイントは以下の通りです。

- ・ 最初に会う場所は家の敷地外にする（先住犬のテリトリーである家や庭に新人が侵入してくる、という状況を避けます）
- ・ 犬同士を無理やり近づけるのではなく、最初は少し距離を置いて、同じ方向に進む散歩を一緒にすることから始めるのもいいでしょう（仲間意識が芽生えます）

## 犬種傾向を知っておきましょう

現在、日本全国の施設で数多くの純血種の犬が収容されています。彼らを適正に譲渡していくには、それぞれの犬種の特徴や、行動の傾向を把握しておくことが必要です。犬種図鑑なども読んでみましょう。以下は、特にマッチングの際に気を付けたいポイントです。

### ボーダーコリー、 コーギー、シェルティ など、牧畜犬

車やバイク、自転車や走る人を追いかけようと過剰に吠え興奮しやすい傾向があります。スポーツやトレーニングと一緒に楽しむには最適ですが、こうした犬種の経験がない人には難しいタイプです。



### 柴犬、秋田、 甲斐犬など、日本犬

自立心が強く、一人の飼い主になつく「ワンオーナータイプ」。体を触られたり、他犬と協調するのが苦手な傾向にあります。そうした性格を理解して飼ってくれる人向き。柴犬はラブラドルにはなれませんし、そこが魅力なのです。

### ビーグル、ダックスフント など、セントハウンドタイプ

においを追ってどこまでも吠えながら獲物を追いかけるために作られた犬たちです。サイズの割にはタフなので、しっかりとエネルギー発散をしてやらないと、吠える、ものをかじる、におい嗅ぎがひどい、という問題が起こることもあります。



### ラブラドル、 ゴールデンなど、 レトリバータイプ

他の犬種に比べて「ものをくわえたい」という欲求が強く、いたずらも相当なものになりがちです。適切なかじるおもちゃなどを与え、また散歩やボール遊びなどで有り余るエネルギーを発散させてやることのできる家庭がいいでしょう。

### トイプードル、マルチーズ、チワワ などの小型愛玩犬

愛玩犬は、昔は「ベルドッグ」として、侵入者を吠えて知らせる役目を持っていました。いまでも非常によく吠える傾向にあります。集合住宅などでは吠えないようにさせる工夫が必要でしょう。



## うちの家族には、どんな動物がぴったりかな？

なぜマッチングを行うのか、どのような考え方でマッチングを行っているか、一般の方に渡せる資料を作っておくのもいいでしょう。「なぜうちは子犬がもらえないのか？」というようなクレームへの対処法の一つとしても使えます。「子供が欲しがらるから」という場合も多いので、子供にも分かるような資料にするのもいいでしょう。以下を参考にしてください。

### うちの家族には、どんな動物がぴったりかな？

センターでは動物を譲渡するときに、「抽選」方式は行いません。

「この子が欲しい」と希望しても、「はいどうぞ」とすぐにお渡しすることもしません。

それぞれのおうちの環境や生活スタイルに合わせて、人も動物も本当に幸せな毎日を送って欲しいという思いから、「マッチング」をした上で譲渡をしています。マッチングというのは、動物と飼い主家族の、最高の組み合わせを考えることです。

動物が欲しいというご希望を頂いたら、家族構成や住んでいる家の環境、これまでに動物を飼ったことがあるかなど、アンケート用紙に書いてもらいます。



担当の職員が、どんな犬や猫が欲しいか、小さい子がいいか大きい子がいいか、具体的な希望と、どこで飼うのか、誰が世話をするのか、将来引っ越しがあったらどうするつもりかなどを聞きます。



アンケートとお話を元に、譲渡候補動物の中からふさわしいと思われる動物をご紹介します。ふさわしい動物がすぐにいない場合は、そういう子が出たときにご連絡します。



家族全員で会いに来てもらいます。「この子とずっと一緒に楽しく暮らしたい」家族みんながそう思ったら、譲渡の手続きに入ります。

ちょっと面倒、と思われるかもしれませんが、この「マッチング」をちゃんとしないと、いろいろな問題が起きてしまいます。

マンションに暮らす  
家族に吠えやすい  
小型犬を譲渡したら

吠え声の苦情から、  
センターに戻って  
きてしまった

子供が自分で世話を  
するという約束で  
子犬をもらったら

子供も塾などで忙  
しく、親も時間がない。結局、外に  
繋がれたまま散歩も行かずただ餌を  
やるだけの飼い方になっている

老夫婦だけの家庭  
に子犬を譲渡したら

自分たちの体調  
も悪くなり、予想以上に  
大きくなった犬を扱いき  
れないとセンターに相談

**犬も猫も今は長生きです。10年から20年という長い時間を一緒に過ごす動物を慎重に選ぶことは、飼い主さんにも動物にも大事なことです。家族みんなで考えてみてください！**

# 猫のマッチングのアドバイス

猫に関しては圧倒的に数が多いので、希望の多い子猫からどんどん譲渡していくことを第一に考えましょう。以下のようなポイントを参考にしてください。

## 子猫を希望する人には、二匹一緒に勧めてみる……

子猫は非常に活発で遊び好きです。この遊び欲求を満たすことができないと、問題行動（いたずらや人の体へのじゃれ噛み、過剰な興奮など）につながります。運動不足が発育に影響を与えることもあります。しかし、子猫の遊び欲求に人間が完全に付き合うことはなかなか困難です。特に一人暮らしや、夫婦共働きなど留守番時間が長い家庭ではなおさらでしょう。そこで月齢の同じ位の猫同士（きょうだい等）二匹での譲渡を勧めてみましょう。二匹で遊べばエネルギーの発散ができ、また室内でも退屈をせずに暮らせるでしょう。ただし、同性同士を譲渡するか、不妊去勢手術をすぐにしてもらえる確約（譲渡時に動物病院の予約を取ってもらうくらいの方が安心です）が必須条件です。



## 成猫の良い点も伝えよう……

子猫だけではなく、成猫の譲渡も考えるなら、まずその猫の性質を見ましょう。犬のようにテスト形式で適性を見ることはほぼ不可能ですので、普段のケアの中で性質を把握しておくことです。どんな人にもなつき、センター収容時でも扱いやすい猫であれば、新しい家庭に馴染むのにもさほど時間はかからないでしょう。成猫の良い点は、「子猫ほど活発ではないことが多いので、扱いやすい」「性質が安定している」という点です。猫との穏やかな暮らしを望んでいる家庭には、子猫よりも、おっとりした成猫の方が絶対にお勧めです。

## 先住猫がいる家庭の場合は慎重に……

まず、先住猫に不妊去勢手術が施されているかを証明書などで確認。その上で先住猫の性格を聞きましょう。先住猫がシャイ（人に対してではなく猫に対して）で社会期に他の猫との接触が少なかったようなら、譲渡を見合わせた方がよいかもしれません。先住猫が新しい猫を受け入れられず、ストレスで病気になる可能性もあります。どうしても、という場合にはトライアル期間を設けて（2週間程度）関係をみるのも一つの手でしょう。また、新しく入ってくるのが子猫だと、先住猫も受け入れやすい場合が多いようです。



## 長毛種の猫を希望されたら、必ず伝えること……

毛が長いタイプの猫は、人間がブラッシングをしてやる必要があります。そうしないとあっという間に毛玉になります。猫は自分でグルーミングするから人の手は必要ないと考えている人も多いので、長毛、中毛の猫の場合はそうではないときちんと説明しましょう。ブラッシングを受け入れる猫にするには、子猫の頃から体に触られることに慣らし、ブラシに慣らす必要があります。子猫が食事をしている間に、そっとブラシを入れてみることから始めるよう、指導しましょう。（食事を邪魔されるのを嫌う猫なら、眠そうに穏やかな時間にごく短い時間だけ優しくブラッシングすることから始めましょう）

## 猫好きのこだわりを大事に……

猫を飼いたい人は、猫の容姿に関するこだわりが強い場合が多いようです。たとえば代々キジトラを飼っていたので次もキジトラがいい、尻尾が曲がっているのがいい、足袋をはいている（足先だけ白い）のがいい、など千差万別。また地域によっては、黒猫は縁起がいいとして望まれる場合（あるいはその逆の場合も）あります。そうした要望をよく聞き取り、希望する容姿の猫が入ってきたらすぐに連絡する、譲渡会にはさまざまな容姿の猫をそろえておくなどしましょう。子猫の数が多く選択をしなければならない場合、同じような容姿の子猫ばかりにならないように、という基準で行っている自治体もあります。



## 子猫の性質別の譲渡のアドバイス

(子猫の性質を見る方法については、「子犬と子猫の適正譲渡ガイド」をご覧ください)

### ●活発な猫の場合



家族が多く、猫に時間を割き、かまってあげられる家庭向き。老人だけの静かな家庭には不向きです。遊びに時間を多くとれる家庭に譲渡しないと、エネルギーの発散不足で、人の体への甘噛みや遊びでのひっかきがエスカレートする可能性も高くなります。猫のいたずらや室内での落ち着きのなさ（発散のために走り回る等）を環境的にも受け入れられる人がいいでしょう。

### ●ノーマルな猫の場合



比較的どんな家庭でもいいでしょう。ただし、猫は新しい環境に慣れるのが苦手な動物です。施設では人に慣れているようでも、譲渡先ではなかなか慣れてくれない、という場合もあるでしょう。無理強いせずに、ゆっくりと様子を見守ってくれるようにアドバイスするのを忘れずに。

### ●シャイな猫の場合



子供のいない、静かな大人だけの家庭向き。留守がちでもかまいませんが、ゆっくりと気長に根気強く猫が慣れるまで穏やかに接してくれそうな人がいいでしょう。以前に猫と暮らした経験が豊富な方や、同じようなシャイな猫と暮らした経験のある人ならよりよいでしょう。また、慣らすのに時間がかかりそうであれば、民間の愛護団体へ団体譲渡し、適切なケアをしてもらいながら、その後の譲渡を検討してもいいでしょう。

# 8. 正式譲渡（動物を渡す時）

マッチングされた動物を新しい飼い主に引き渡す時には、新しい家族としての一日目が、人にも動物にもよいスタートとなるように適切なアドバイスをしましょう。

## 事前に連絡しておくこと

家の環境を飼育にふさわしく整えておいてもらうこと、動物を迎えに来るのに必要なものなどを事前に伝えておきましょう。

### ■ 家の環境整備

特に子犬や子猫の場合は家の中に危険がないかどうかチェックしておいてもらいましょう。

電気コードなどかじられやすいもの、子猫の爪研ぎに使われそうな家具、動物が食すると害がある観葉植物など、子犬子猫の目線で室内を確認してもらいます。

また、トイレ、サークルやケージなど、動物の生活環境を事前に準備しておいてもらいます。

#### ・迎えに来るのに必要なもの

犬であれば首輪やリード、ケージ。猫であればケージを持参するように案内します。

家に連れ帰る途中で逃げられるようなことのないように。

### ■ 誓約書の記入～書類の引き渡し

誓約書は、終生飼養や不妊去勢手術の実施を誓うものです。

より具体的に、何カ月後までに不妊去勢手術を行うかを定め、報告の義務を誓約書に掲げているところもあります。その後、収容期間中の健康状態や、ワクチン接種の証明書などを渡します。

このとき、医療費（ワクチン代など）を一部を負担してもらうということで、手数料（料金）を定めている自治体もあります。

### ■ 引き渡し

動物の抱き方や、リードの扱い方など、その場で指導できることがあります。

また、譲渡直後によく見られる行動やその対処法（動物が新しい環境に慣れるまでは無理強いしないなど）をアドバイスしましょう。（40、41ページを参考にしてください）

### ■ 日付入りのチェックリストを渡す

登録・不妊去勢手術など、譲渡後にやらなければならないことを、日付入りのチェックリストにして渡しましょう。ここには、迷子になったときの連絡先など最低限の情報も載せておきます。そして、このチェックリストは家族が最も目にしやすい場所「冷蔵庫の扉」に貼っておくように薦めましょう。

## 家に迎える時は家族全員で……

動物を家庭に迎えるときは、家族全員がそろっているように伝えましょう。

新しい環境に連れてこられた動物は、緊張の中で、少しずつ家の環境に慣れ家族にも慣れてくるものですが、やっと慣れたかなというときに突然見知らぬ人間（単身赴任中のお父さんなど）が帰ってきて、いきなりなでられたりすると非常に怖い思いをし、なつかなくなることもあります。一家の大黒柱も、動物にとっては「後から現れた警戒すべき相手」となりうるのです。

そんなことにならないように、ぜひ家族全員がそろって日に家庭に迎えるようにアドバイスしましょう。動物が慣れるまでゆっくり付き合ってもらえるように、三連休などを上手に利用して「家庭に迎えるスケジュール」を組むのがお勧めです。

参考：日付入り譲渡後のチェックリスト～日付を記入して渡せるように作成しましょう。

### 犬の場合

1週間後  生後2カ月      1カ月後  生後3カ月      3カ月後      半年後

**子犬**

- 動物病院で健康診断
- 混合ワクチン接種
- 混合ワクチン接種
- 狂犬病予防接種
- 役所で畜犬登録
- 不妊去勢手術
- 手術済み報告書をセンターにFAX

しつけ方教室

★ ————— なるべく早めに不妊去勢手術を ————— ★

**成犬**

- 動物病院で健康診断
- 混合ワクチン接種
- 狂犬病予防接種
- 役所で畜犬登録

1週間後       1カ月後       3カ月後      半年後

愛犬の健康と不幸な犬を増やさないためにも、早めの不妊去勢手術を！！  
皆さんが不妊去勢手術をしてくださることで、救える命がたくさんあります。

迷子になったらすぐ電話⇒〇〇〇-〇〇〇-〇〇〇〇      ×× 動物愛護センター

### 猫の場合

1週間後  生後2カ月      1カ月後  生後3カ月      半年後

**子猫**

- 動物病院で健康診断
- 混合ワクチン接種
- 混合ワクチン接種
- 不妊去勢手術
- 手術済み報告書をセンターにFAX

猫の相談会

**成猫**

室内飼育で愛猫を  
交通事故、感染症、虐待、行方不明から守りましょう！

★ ————— なるべく早めに不妊去勢手術を ————— ★

- 動物病院で健康診断
- 混合ワクチン接種
- 混合ワクチン接種
- 猫の相談会
- 猫の相談会
- 不妊去勢手術
- 手術済み報告書をセンターにFAX

1週間後       1カ月後       半年後

愛猫の健康と不幸な猫を増やさないためにも、早めの不妊去勢手術を！！  
皆さんが不妊去勢手術をしてくださることで、救える命がたくさんあります。

迷子になったらすぐ電話⇒〇〇〇-〇〇〇-〇〇〇〇      ×× 動物愛護センター

# 譲渡直後によく見られる行動とその対応方法

新しい環境に慣れないうちは、不安から以下のような行動を見せる動物がいます（特に成犬・成猫の場合）。その場合は、「あせらずに動物が家や家族に慣れるまでゆっくり穏やかに接し、時間をかけることが大事である」ということをあらかじめアドバイスしましょう。



## ■ 譲渡後によく見られる行動

落ち着きがない・かたまって動かない・うずくまる・非常におとなしい・不安による吠え・うろうろする・過剰に興奮する・脱走しようとする・食欲がない・下痢をする・尿が頻繁になる・フケが増える

## ■ 対応方法

### ● 犬自身が安心だと思えるような居場所を作る

サークルで囲った居場所、あるいは狭い場所を怖がるなら、広い部屋の一部に犬用ベッドややわらかな敷物を置く。

### ● 外飼いの場合、新しい犬小屋に馴染むまでに時間がかかる子もいるので無理強いしない

犬が入ったときに、ガタついたりギーギー音がすると安心できないので確認しておく。

### ● しつこい触れ合いは避ける

犬の自主性に任せ、犬が自分から寄ってくるのであればなでたりしてもよいが、近寄ってこないようなら、しばらく放っておくほうがよい。

急に抱きしめる、正面から急に近づくなどを怖がる犬も多い。

### ● 少しずつ仲良くなる

頻繁に手から食べ物を与える、犬が好むことを（おもちゃ遊びや散歩など）を積極的にやってやる。

### ● いきなり叱らない

まだ信頼関係が築けていない状態で、大声で叱ったり叩いたりすると犬が恐怖を感じ、その人を「怖い」「嫌い」と思い込み、これからの生活に支障が生じる。まずは「叱らずにすむ状況を整えておく」ことが大事。たとえば、犬が入っていい場所と悪い場所をきちんと決め、だめな場所には犬が行けないようにドアを閉めておく、ゲートをつけておくなど。

### ● 譲渡当日は、いきなり長時間の留守番をさせない

知らない環境で不安が募るので、家に迎えるのは家族が揃って家にいる時間が取れる週末や連休がおすすめ。ただしあまりにもべったり一緒にいると、留守番のできない子になるので、家族全員がほかの部屋に行く、コンビニ程度は出かけるなど、少しの時間犬が一人になる状況を作るといい。当日はずっと一緒にいて翌日から家族全員仕事で日中いない、というような状況は犬には負担が大きい。

### ● 脱走や迷子に注意！

玄関や門扉は確実に閉めておく。環境に慣れるまでは、散歩中はもちろん室内でも庭でも、万が一を考え首輪を念のために2つ付け、それぞれに迷子札を付けておく。

### ● 食欲や体調をよく見ておく

これまで施設で食べていたフードを1日分持たせ与えるのもよい。不安から頻繁に尿をする場合、ここからトイレの失敗につながるなので、トイレに頻繁に誘導する、外に連れ出すなど配慮する。



### ■ 譲渡後によくみられる行動

隠れる・隠れたまま出てこない・うすくまる・においを嗅ぎながら探索する・においをつける・抱こうとすると逃げる・触られるとシャーと言ったりして嫌がる・かたまっている・おとなしい・小さな音にも反応してびくっとする・排泄を失敗する・食欲の低下・下痢をする・フケが増える



### ■ 対応方法

#### ● 猫のいる空間を限定する

猫が落ち着くまでは空間を限定したほうが安心する。一つの部屋だけとかケージの中だけなど、まず安心できる場所を確保してやり、それから徐々に活動範囲を広げる。

また、その中に隠れ場所をたくさん作るとよい（段ボール・猫ベッドなど）。

#### ● 猫が行きやすい場所に、トイレを置く

できれば複数用意。施設で使っていた猫砂と同じものを用意。可能なら自分のにおいがついた猫砂を施設からもらってくる。

#### ● 猫が寄ってくるまでは触らない

いきなり抱き締めたり、大声を出したりしないで、猫から近寄ってくるのを待つ。少し馴染んだらおもちゃなどをやさしく動かしてスキンシップを図ってみる。

#### ● フードを食べるまでには時間がかかると思っていたほうがよい

人が見ている間に食べないようであれば、フードをそのまま一晩置いておく。朝には空になっていることが多い。

#### ● 家の環境整備（猫は上下運動をする）

環境に慣れず、さまざまなことに過敏に反応すると逃げようとして部屋の中を縦横無尽に走り回るので、棚の上を含め環境整備をしておく。猫を叱らなくていい状況を作っておく。

#### ● 脱走に注意！

活発な猫の場合、窓や網戸を開けて出る可能性があるので開閉にくれぐれも注意。

動物が「ここは自分の家だ、家族だ！」と認識すれば不安は軽減します。それまではじっくり時間をかけて仲良くなるよう、アドバイスしましょう。

# 9. しつけ方教室

譲渡後の動物を対象にした「しつけ方教室」では、人と動物が互いに快適に暮らすために役立つ内容を伝えるのが目的です。犬だけでなく、猫の飼い主を対象にした相談会も有効です。新たな飼い主にとっては気軽に飼育相談でき、行政サイドから見ればきちんと適正飼養がなされているかどうかの確認および指導ができる機会でもあります。

## なぜ「しつけ方教室」を行うのか～目的の再確認～

行政が譲渡後の動物を対象に行う「しつけ方教室」は、民間の「ドッグスクール」や「しつけ方教室」とは開催の趣旨に違いがあります。「服従訓練」や「トレーニング」を教えるのではなく、あくまでも以下の3つの目的のために行うのだということを、まずスタッフ間で意識統一を図りましょう。

- ①愛護精神の向上
- ②適正飼養の確認・普及
- ③苦情の予防

譲渡された動物が健康であるか、愛情を持って育てられているか、飼い主を信頼し安心して家族の一員として暮らしているか、不妊去勢手術が済んでいるか、近隣に迷惑をかけることなくマナーを守って適切に飼育されているか……これらを確認し、必要に応じてアドバイス指導をするのが、譲渡動物に対しての「しつけ方教室」開催の趣旨です。この「目的」を意識することによって、教室で何を教え、何を伝えるべきかが見えてきます。

## 最低一回は参加の義務を……

上記の目的のためには、少なくとも譲渡後のしつけ方教室に一度は参加することを譲渡の条件とするのが有効でしょう。さまざまな事情でそれが不可能な場合にも、アフターフォローとしての「追跡調査～特に不妊去勢手術の実施確認」「電話などによる飼育相談の受け付け」「里帰り運動会など譲渡動物を対象にしたイベントの開催」などを通して、上記の目的を果たす必要があります。

## 「しつけ方教室」のキーワードは『安全』

犬猫のしつけや問題行動対処にはさまざまな方法がありますが、行政が行う「しつけ指導」や「問題行動への対処アドバイス」においては**人と動物双方が安全な方法**を基本と考えましょう。

**人と動物双方が安全な方法**とは、まず「罰をメインとしない」方法です。たとえば「大声で威圧する」「体罰を用いる」というような「罰を用いたトレーニング」は時として動物の虐待につながることもあり、愛護の精神を訴える行政であるなら避けるべきでしょう。また、しつけ方教室を見学する市民や子供たちの感情も考慮しましょう。威圧され、罰を与えられ、オドオドと命令に従う動物を見て何を感じるでしょうか。飼い主も動物もストレスなく安全に楽しくできる……そんな「しつけ方」こそ、家庭動物には求められるものであり、現在、環境省の「適正飼養講習会」でも「正の強化をメインにしたしつけ」が推奨されています。



### ■ 「正の強化をメインにしたしつけ」とは？

動物の好ましい行動（人が望む行動）をほめて強化する（その行動がさらに強く多く出るようにする）方法です。好ましくない行動（失敗）はなるべく起きないように予防し、よい行動に導く……

これは「子供でもお年寄りでも体力のない女性でも、しつけのプロでなくても誰でも行える」方法で**人と動物双方にとって安全な方法**です。

## おすすめできない『叱り方』

適切な叱り方をすれば、してほしくない行動を止めることはできるでしょう。ただし、適切な叱り方というのは非常に難しい（現行犯で、してはいけない動作の遅くとも2秒以内に、必要かつ十分な強さで行わなければ意味がない）ものですし、「何をすればいいのか」こちらが望む行動は叱るだけでは教えられません。

そして、不適切な叱り方をしていると、こちらが考えもしないような副作用が起きます。

特に、以下の叱り方は、飼い主との信頼関係を崩し、かえって人への攻撃行動につながることもありますからおすすめできません。



鼻先を犬が降参するまで握る  
(マズルコントロール)



犬が暴れなくなるまで仰向けに押え込む  
(アルファロール)

## 参考資料

アメリカ獣医行動学会（AVSAB）が発表している「動物の行動修正に罰を使うことに関する声明」からの簡略抜粋

罰を用いることで

- ・ 不適切な行動が増強される場合がある
- ・ 不十分な強度による罰に動物は慣れるため飼い主は段階的に罰の強度を強めることがあり、それは最終的に動物を深く傷つける結果となる
- ・ 罰が強い強度で与えられると動物の身体に障害が生じることがある。たとえばチョークチェーンを用いた場合には、気管の損害やホルネル症候群（神経線維障害）、短頭犬種での致死性、肺水腫、眼圧の高い犬における緑内障の悪化などの可能性がある
- ・ 罰刺激から逃避しようとして動物が攻撃的になる可能性がある。特に攻撃経験のある犬では攻撃の増加が強くそれが人間に向かう可能性が高い
- ・ 罰によって好ましい行動（人が望む行動）を教えることはできない

よってAVSABは

- ・ 動物の行動問題に対処する最初の選択肢として簡単に罰（チョークチェーンやピンチカラー、電気ショックカラーの使用を含む）を使うべきではないと、声明する

AVSAB (American Veterinary Society of Animal Behavior)  
www.AVSABonline.org

AVSAB Position Statement

「The Use of Punishment for Behavior Modification in Animals」

[http://www.avsonline.org/avsonline/images/stories/Position\\_Statements/Combined\\_Punishment\\_Statements.pdf](http://www.avsonline.org/avsonline/images/stories/Position_Statements/Combined_Punishment_Statements.pdf)



左 チョークチェーン

右 ピンチカラー

# 犬のしつけ方教室開催にあたって考えるポイント

一回限りか複数回の開催か、講師は誰が務めるか、さまざまなスタイルがあります。いま自分たちの施設で可能な範囲から考えてみましょう。

## ① 何を教えるか？

「しつけ方教室」というと「アイコンタクト・おすわり・ふせ・つけ」などが必要不可欠と思うかもしれませんが、本当にそうでしょうか？もちろんできるに越したことはありませんが、譲渡後の犬が家庭犬として幸せに適切に飼養されるには「ふせ」よりも「散歩の後の足をおとなしく拭かせること」のほうが大事ではないでしょうか。完璧な「つけ」を教えるよりも、エネルギーを発散させるためのボール遊びの方法を教えたほうが、実生活で役に立つのではないのでしょうか。地域の実情を知り、飼い主のニーズを知り、適正飼養に直結する内容、近所からの苦情を予防できるような内容を考えましょう。

### ■ 飼い主は何を求めてくるのか？

一般に飼い主は「困っていることがその場で解決する」というような「結果」を求めてきます。しかし、たった一回のしつけ方教室で問題が解決することはまずないでしょう。一方教える側は「もっと熱心にしつけをして欲しい」と思いますが、飼い主皆が熱心なトレーニングマニアではなく歯がゆい思いをすることも多くあるでしょう。つまり、それぞれの過剰な期待を調整する必要があります。

行政が主催する譲渡後のしつけ方教室でできる範囲はどこかをみきわめ、それ以上の飼い主の要望（問題行動の解決など）には、専門家や民間の教室を紹介してもいいでしょう。

### ■ よくある質問について

飼い主から寄せられる「困ったこと」の相談は、ほとんどがよく似ています。

子犬の場合は、甘噛み、トイレ、いたずら……

成犬の場合は、散歩時の引っ張り、飛びつき、吠え……

こうしたよくある質問について答えられるように勉強して、準備しておきましょう。要点をまとめたプリントを用意して渡すのもいいでしょう。

## ② 開催回数について

一度に伝えられる内容には限りがあるので、複数回の開催が理想です。しかし、行政側の事情（人手不足や開催場所の都合など）、参加者の事情（複数回の参加は難しいなど）もあるでしょう。最初からハードルを高くしすぎて結局続かない、参加してもらえないという状態になるよりは、まず一回の開催から始めてみるのも大事な一歩です。

なお、複数回の場合、一回目は犬を連れずに飼い主だけに参加してもらって「オリエンテーション」としましょう。犬のしつけ方の基本的な考えや、家の中での問題（トイレがうまくできないなど）についての対処法、また次回から犬を連れて参加するときの注意や持ち物の案内などを盛り込みます。実際に犬を連れていけると、犬に集中して講師の話の聞けない人も多いのです。まずは飼い主だけに説明し理解してもらってその後がやりやすくなります。



### ③ 開催時期について

譲渡後いつ開催するかについては、各施設の譲渡の流れによります。

#### ● 定期的な譲渡会で子犬を譲渡

子犬の成長は早いこと、飼い主の悩みも多いことなどから、譲渡後早めの複数回の開催が理想でしょう。譲渡会の際に告知し、参加を予定してもらいましょう。

#### ● 定期的な譲渡会で成犬を譲渡

譲渡後 1 カ月程度たつと犬も新しい環境に慣れ、逆にさまざまな個性や悩みも出てきます。譲渡会の際に、1 カ月後の開催を告知し、飼い主に予定を入れておいてもらいましょう。

#### ● 希望者に適した犬を随時紹介・譲渡

月に一度、あるいは隔週で一度の「しつけ方教室」の開催を定例化し、新しい飼い主の都合に合わせて参加してもらうよう案内しましょう（参加の義務を伝え、譲渡の際に予定を決めてもらいましょう）。このスタイルの場合も、成犬向けと子犬向けは分けて開催したほうがいいでしょう（子犬には子犬特有の問題や必要なしつけがあります）。

### ④ 開催場所について

室内、屋外、いずれにしても、安全に開催できる場所を選びます。安全管理については次ページをご覧ください。

### ⑤ 講師について

職員が講師を行う場合と、外部のインストラクター、トレーナーに協力を求める場合があります。

#### ● 外部に依頼する場合

まる投げではなく、行政サイドから教室開催の目的をしっかりと伝え、しつけの方法や教える内容を確認しておきましょう。特に「罰をメインにしていないか」「事故につながる道具の使用を勧めていないか」チェックする必要があります。依頼する前にどんな指導法をとっているか、譲渡事業や譲渡される動物について理解があるか確かめておく必要もあるかもしれません。

#### ● 職員が行う場合

まず犬の行動やしつけについての勉強が必要です。その上で自分たちにできる範囲を考え、カリキュラムを考えましょう。カリキュラム作成に当たっては「しつけ方教室の目的を再確認する」「その目的のためにどんなことを教えたいか考える」「教室の開催条件を確認（場所、回数、参加頭数、時間、アシスタントはいるか）」という要素を考えましょう。



# しつけ方教室を安全に開催するために

教室を開催するにあたって、まず事故を起こさないように、安全に配慮しましょう。

## ① 駐車場で……逃亡注意！

車から降りるとき、乗せるとき、きちんと首輪とリードが付いているか確認してからドアを開けるように指導しましょう。なお、首輪が緩すぎて首から抜けそうだったり、リードの金具がうまくはまっていな



かったりということも多くみられます。教室に入る前に講師が一頭一頭確認しましょう。首輪は指が一本入るくらいのきつさが目安です。

## ② 室内の教室なら…… 犬同士の接触トラブルに注意！

天気は左右されず、逃亡の心配も少ないですが、スペースが狭く犬同士の間隔をあまり取れないところも多いようです。他の犬が苦手な犬がいる場合は、端のほうに案内する、スタッフが犬と犬の間に入る、衝立などを利用するなど工夫をしましょう。



## ③ 子供の参加者に注意！

家族で参加してもらうのは歓迎ですが、小さいお子さんはご家族でケアしてもらいましょう。勝手に他の犬に触ったり、教室を走り回ったり、大声をたてたりするお子さんがいると、怖がりな犬は不安から吠えたり、奥に隠れて出てこなかったり、また恐怖のあまり手を出してきたお子さんにうなる・噛むなどの行動が出る場合もあります。お子さんは親が確実にコントロールしてくれるように指導しましょう。



## ④ 屋外での教室なら……逃亡注意！

屋外の場合は、広さも十分あり、犬と犬の間隔も広く取れることが多く、犬同士の接触によるトラブルを避けることができます。ただし逃亡注意。センターの敷地内など、フェンスで囲われた場所が望ましいでしょう。飼い主にはリードを絶対に放さないように注意しましょう。また子犬の場合、ワクチンプログラムがすべて済むまでは屋外での教室には参加できません。



## ⑤ シーズン中のメス犬は参加不可！

シーズン中のメスがいると、オスはそのにおいに反応し興奮したりオス同士の争いになったりすることもあります。シーズン中のメスは教室への参加を断りましょう。(もちろん早期の不妊去勢手術を勧めましょう)

## ⑥ 教室の床に注意！

リノリウムなど滑る床は、犬の足にやさしくありません。滑る床面で走ったり興奮したりすると、関節を痛めたり、腰を痛めたりする原因になります。タイルカーペットを敷くなど工夫をしましょう。



# 子犬向けのしつけ方教室

## ■ ポイント

生後4カ月齢くらいまでの子犬向けの教室は、社会化をメインにプログラムをたてましょう。

社会化とは、人やほかの動物、環境や音など、これから出会うであろうさまざまな刺激に対してうまく慣らしていくことです。生後3週から16週の「社会化期」と呼ばれる時期の子犬はさまざまなものを受け入れやすく、この時期に適切な社会化をしておくと将来飼いやすい犬になります。

また、この時期の子犬特有の問題（排泄、甘噛みなど）に対応した内容も盛り込みましょう。

社会化と、子犬特有の問題への対処が、「おすわり」や「ふせ」よりもずっと大事なことです。



## ■ 注意

ワクチンプログラムが終了していない子犬がいる場合は、室内での開催が必須です。屋外でしか開催できない場合は、ワクチンがすべて終了した後に開催しましょう。

## ■ 飼い主に準備してきてもらうこと

- 子犬がいつも食べているフードを持って来てもらう
- 子犬には首輪とリードをつけて来てもらう
- なるべく家族で来てもらう



## ■ 準備

室内トイレスペースを必ず用意しましょう。設置の仕方、連れていくタイミングなどを実体験から参加者に学んでもらえます。また、適切なおもちゃやフードを用意し、飼い主に紹介するのもいいでしょう。



# 子犬のプログラム例

## 1 フードを食べさせてみる

場所や環境にあまりにストレスがかかりすぎていると、フードを食べることができません。食べられるということは子犬が新しい事を学べる状態にあるということ。少しずつ楽しく教えていきましょう。



## 2 人に対する社会化

他人に良い印象を持つように、相手からフードをもらっていきましょう。フードを与える人は子犬を怖がらせないように「急に近付かない」「大きな声を出さない」「横から近づく」優しく接してください。



## 3 ものに対する社会化

子犬にとって人間社会には不思議なものがたくさんあります。日常生活によくあるものに慣らしましょう。無理やり近づけるのではなく、フードで誘導しながら、子犬が自分から近づいていけるように優しく誘導しましょう。



## 5 トイレに連れていっていきましょう

子犬は少し動くと排泄したくなります。ある程度動きのあるプログラムの後はトイレに連れて行きましょう。そこでできたら、ほめてフードのごほうび。タイミングをとらえてトイレに連れていき、成功させることを経験してもらいましょう。



## 4 犬同士の社会化

教室の仲間にご挨拶。子犬たちの様子を見ながら組み合わせを考え、会わせます。ひどく怖がる、隠れようとするなどの様子が見えたら無理をさせずにしばらくは抱っこで見学させましょう。その上で少しずつ慣らしましょう。



## 6 落ち着かせる練習 (おおむけだっこ)

エネルギーを発散した後は、優しく子犬を抱き、飼い主が優しいタッチで落ち着かせましょう。バタバタ暴れたときに床におろしてしまうと、暴れたら自由にしてもらえると学んでしまうので注意！飼い主の腕の中なら安心して身をゆだねる……そんな犬にしていきましょう。



## 7 体のあちこちを触る練習

優しく声をかけながら、体全身を触ってみましょう。足先、口元など、先端部分は敏感なところ。抵抗のある子にはフードを使いながら慣らしていきましょう。どこでも触れる犬にしておけば、健康チェックも、獣医さんに行ったときも安心です。

## 8 お悩み対策

### お悩み対策 ①甘噛み予防 (遊び方の指導)

間違えて手を噛まないような大きさ、ひもの付いたおもちゃで遊びましょう。



### お悩み対策

### ②吠えの予防 (インターフォンの音)

インターフォンに反応して吠えるようになる前に、音がしたらフード、音がしたらフード、という練習を繰り返しておきましょう。インターフォンが鳴ったら吠えるのではなく、飼い主が美味しいものをくれる合図と教えるのです。



※楽しさの演出

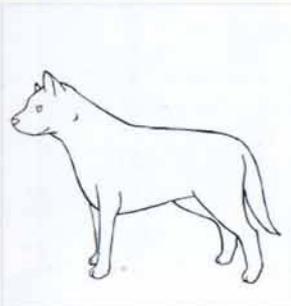
しつけを楽しんで行ってもらえるように、教室のプログラムにもゲームを取り入れたり、季節に合わせた工夫 (ハロウィンやクリスマスの絵を飾るなど) をすると、飼い主のモチベーションも上がります。

# 犬のボディランゲージ

犬を扱う際には、常に犬の様子を観察し、ボディランゲージを読み取ることが大事です。

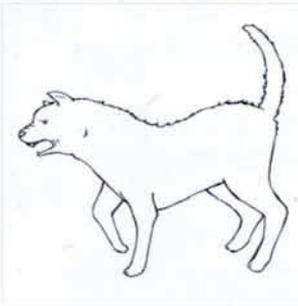
ボディランゲージとは、犬同士がコミュニケーションを取るための手段で、体の各部分の微妙な動きや、体の姿勢、相手との距離の取り方、動き方などで気分や意図を表現します。いわば、犬にとっての「ことば」。以下のイラストは、犬の代表的なボディランゲージです。適性評価を行う際、しつけ方教室を行う際には、こうしたボディランゲージに注目してください。

## 1 リラックス



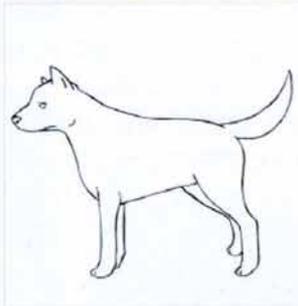
全身に力が入っていない／口元は緩んでいる／尾は自然な状態で下がっている／立ち耳の犬の耳は前に傾かず立っている

## 2 攻撃



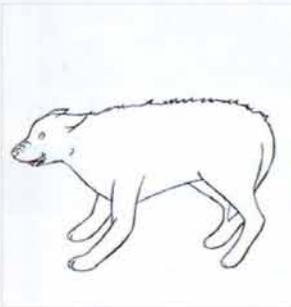
体を前に傾ける／背中の毛が逆立つ／耳を前に倒す／鼻の上にシワを寄せる／唇をめくりあげ、歯を見せる／尾を立てる

## 3 警戒



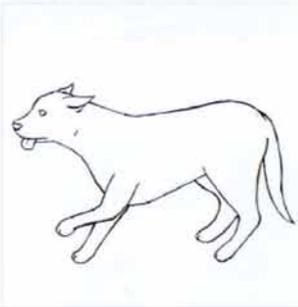
前のめりに立つ／背中の毛が逆立つ

## 4 防御



耳を後ろに倒す／瞳孔が広がる／鼻の上に皺を寄せる／口角が広がる／背中の毛が逆立つ／姿勢を低くする／尾を足の内側に巻き込む

## 5 服従（能動的）



耳を後ろに倒す／舌をペロペロ出す／口角が下がる／姿勢を低くする／尾を下げる／なだめるような行動をとる

## 6 服従（受動的）



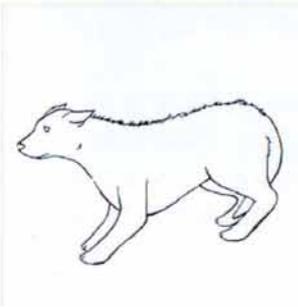
体を低く、小さくする／相手からのアプローチを避ける／不安で自信がない様子

## 7 服従（受動的）



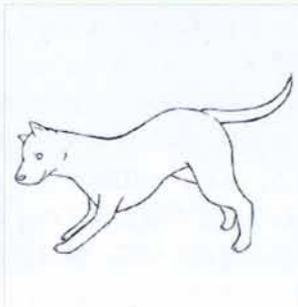
おなかを見せる／耳を後ろに倒す／視線をはずす／尾を足の内側に巻きこむ

## 8 「攻撃」か「逃走」かで迷っている



尾をさげるか、足の内側に巻き込む／体を低くする／背中の毛が逆立つ

## 9 遊びに誘う



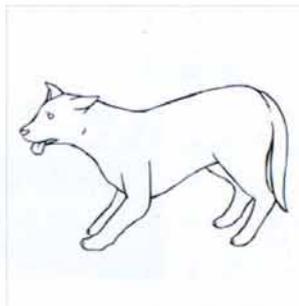
体を低くする／前足を伸ばす／尾を大きく振る

## 10 甘えている



体をくねらせる／尾を振る／体をすりよせる／口の周りをなめる

## 11 緊張・ストレス



体を低くする／尾を下げる／息使いが荒くなる／人や動物だけでなく、環境にストレスを感じることもある

# 成犬向けのしつけ方教室

## ポイント

成犬向けの教室は、とにかく「安全」に開催することを心がけましょう。

さまざまな個性を持った犬と飼い主さんが集まります。事故やケガが起きないようにするのはもちろん、犬によくない経験（犬同士のけんかなど）をさせないようにしましょう。

プログラムは、単なる服従訓練ではなく、現実の生活に即したものにしましょう。

飼い主の悩み（引っ張りや飛びつきなど）に対して、難しいトレーニングでの解決法ではなく、安全で使いやすい道具の紹介をしたり、管理（マネージメント）をして問題を予防する方法を指導しましょう。

## 飼い主に準備してきてもらうこと

- 犬がいつも食べているフードや美味しいおやつを持って来てもらう
- 犬には首輪とリードをつけて来てもらう
- なるべく家族で来てもらう
- 排泄物を片付け持ち帰れる道具一式



## 準備

屋外でも、室内でも、安全に配慮した準備をしましょう。

また適切な道具やおもちゃを用意し、飼い主に紹介するのもいいでしょう。

## 注意

成犬のクラスでは、安全のために、犬同士の距離を保つことが重要です。



注意！近づきすぎです！



間にイスを入れる



間にアシスタントが入る

# 成犬のプログラム例

## 1 リードの持ち方の注意

安全なリードの持ち方を覚えましょう。特に大型犬の飼い主には、両手でしっかりとリードを持つことを指導しましょう。



## 2 フードを食べさせてみる

場所や環境にあまりにストレスがかかりすぎていると、フードを食べることができません。ちゃんと食べられるか確認します。



## 3 アテンション（名前を呼ばれたら飼い主を注目する）練習

名前に一瞬でも反応して飼い主のほうを見たら、すぐにごほうび。何秒も何十秒も目を見つめ続けなくてかまいません。名前に対する飼い主への反応をよくしておく、どんな場面でも役に立ちます。

## 4 うんち拾いゲーム

まずオスワリができるか確認。そのままの姿勢でごほうびを食べさせ続けている間に、ビニール袋でうんちを拾うマネをしてもらいます。日常生活に役立つよう工夫された「おすわりまって」の練習です。いくつ拾えたか、ゲーム感覚でカウントしましょう！



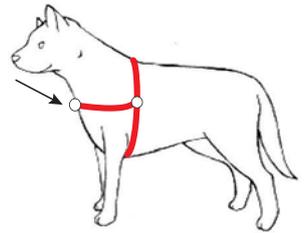
# 5 お悩み対策

## お悩み対策 ①お散歩（引っ張って困る）



引っ張りの強い犬には、引っ張り防止ハーネス（イージーウォークハーネス、センシブルハーネス）を勧めましょう。実際に着けて歩いてみると、その効果を実感できます。

※このハーネスは、引っ張る犬を胸の部分で止めるという構造です。一般の首輪よりもずっと弱い力で止めることができます。引っ張らずに歩いているときは、ほめることを忘れずに。



リードは前胸のリング（矢印）に着けます。

## お悩み対策 ②飛びつき

人が近づき飛びついたら、すぐに立ち去ってもらいます。落ち着いていられたら、なでたり、ごほうびを与えほめます。どちらが得か、犬自身に考えさせる練習です。



## お悩み対策 ③いたずら

退屈対策に、いたずら防止に、噛んでよい物を与えましょう。実際におもちゃの中にフードを詰める様子を見せてから与える、などのポイントも伝えましょう。

## お悩み対策 ④エネルギー発散（遊び方の指導）

引っ張りっこ、ボール遊びなどの遊び方のポイントも指導しましょう。遊びの中に、オンオフのコントロール（犬が落ち着くまではおもちゃを与えない、など）を入れていく方法もあります。



## 犬のエネルギー発散の方法

しっかりエネルギーを発散させないと問題行動につながる、とは言っても、実際にどのように犬のエネルギーを発散させたいか、分からない飼い主もいます。以下のような具体的なアドバイスもしてみましょう。

庭などフェンスに囲われ犬を放すことができる場所か、室内で……



### ■引っ張りっこ遊び

犬は引っ張りっこ遊びが大好きです。だんだん興奮してくると「ウーッ」というなり声を出しますが、これは危険な合図ではなく「盛り上がって楽しい！ イエイ！」というような意味です。勢い余って手まで噛まないように、長いロープのようなおもちゃを使いましょう。



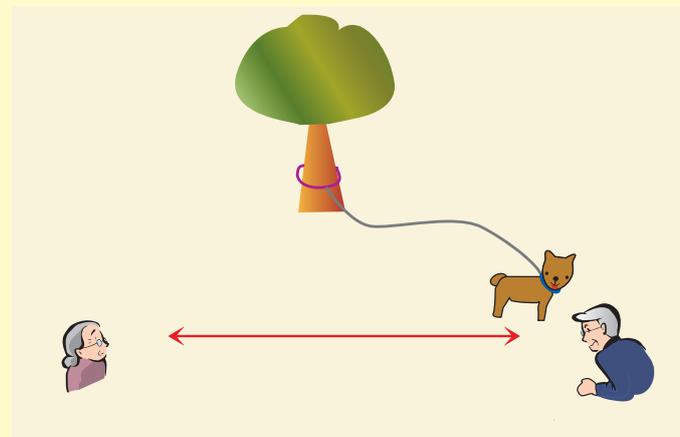
### ■ボール遊び

レトリバー系の犬にはたまらない遊びで

す。ボールを口から離さないというような場合は、同じボールを二つ用意しましょう。交互に投げることで、一つのボールに執着せずに投げてもらった方を追いかけます。

### ■運動量の目安

必要な散歩時間や運動時間は、犬種やサイズ個体差もあり、一概には言えませんが、たとえば散歩から帰って水を飲みすぐに横になるようなら満足しているということでしょう。散歩から帰宅しても飛び付いてきたり、走り回ったり、ちょっと寝ただけですぐ起きて遊ぶようになるなら、エネルギーの発散が十分ではないのかもしれませんが、2歳未満の若くて健康な犬には、一日に一回肩で息をし、ハアハアとあえぐぐらの運動を提供してやりたいものです。それだけで問題行動（吠える、いたずらする、家の中で大運動会になるなど）が軽減することもあります。



### ■飼い主の体力がない、

犬をノーリードにして放す場所がないなら……

支柱になるもの（しっかりした柱や、大きな木の幹など）に、長くしっかりしたひも（市販のロングリードや、普通のリードを複数つなげたもの、長いロープなど）を結え付けます。ひもの伸びる最も遠い場所に一人、逆方向に一人が立ち、犬を呼び合います。犬が走ってきたら美味しいおやつを与え、またすぐに逆側の人呼びます。走ってきたら美味しいおやつ。これを繰り返すと、10メートルのロングリードなら20メートル間を犬が走り回って運動できます。体力がない高齢の方にもお勧めです。



## 犬も、飼い主も、ほめて楽しく ～しつけ方教室でのコミュニケーションスキル～

犬と一緒に「しつけ方教室」にやってくる飼い主は、自分の犬のことでいっぱいいっぱい、講師の話が聞けなかったり、周りの状況が見えなかったりします。習ったことをすぐにうまくできないのも当たり前のことです。そうした参加者に対して、少しでも楽しく前向きに参加してもらうために、以下のような点に配慮して指導しましょう。

### 楽しい雰囲気演出！

犬を連れていると、いつも以上に人は緊張します。それをほぐすのは講師やスタッフの笑顔。人も犬もリラックスした楽しい状態でないと学習能力が半減すると言われます。明るい挨拶や親切な対応、優しい笑顔で、楽しい雰囲気を作りましょう。

### 頭ごなしに否定したり、 批判したりしない！

「そのやり方は間違っています」などといきなり言われたら、コミュニケーションの扉は閉じられてしまいます。改善を促す時は、少しでもいいところを見つけてまずほめてから、「さらによくするには……」というアプローチで指導しましょう。少しでも改善されたら、すかさずほめましょう。

例：「犬を上手にほめていてとてもいいですね、次はもう少しリードを短く持ってやってみましょうか。そうです、とてもよくなりましたね」

### それぞれの人に合わせた指導を！

人によって、頭で理解しないと体が動かないタイプの人、まず体で覚えるタイプの人など、いろいろです。年齢や性別の違いもあるでしょう。相手に合った指導を工夫しましょう。

### 日常生活に結び付けた指導を！

これから行う練習が日常生活で何の役に立つのか、必要性について説明しましょう。やみくもに「これがしつけです」では説得力がなく、練習しようというモチベーションが上がりません。

例：「散歩でうんちを拾うときに、犬がおすわりで待っていてくれたらいいと思いませんか。拾うのも楽し、周りからも賢い犬だって思われますよ。だから今から『おすわりまって』を練習してみましょう」

### よくできているときは、ほめる！

犬が上手にできているときはもちろん、飼い主さんがうまく犬を扱っているときは、声に出してほめましょう。犬も人もほめられると、やる気になります。

### 休憩を挟んで、 無理のないプログラムを！

教えたいことがたくさんあっても、1時間の教室に内容を詰め込みすぎノンストップで行っても、人の記憶に残るのはわずかです。また、犬の集中力も長くは続きません。同じ練習ばかりしているとすぐに飽きて、他の犬が気になったり吠えたりすることもあります。ゲーム形式を取り入れる、途中で休憩を入れるなど、人も犬も飽きさせないプログラムを考えましょう。

# 猫の飼い主向けの相談会

譲渡後に猫を連れて集まることは実際とても困難ですが、飼い主に集まってもらってさまざまな悩み相談に乗ったり、飼い主同士お互いに情報交換をしたりすることで、適正飼養を勧めていくことができます。「しつけ方教室」ではなく「猫の飼い方相談会」というイメージです。猫の飼い主は、犬の飼い主と違って比較的孤立しているものですが、こうした機会を通じてネットワークを作ることで、地域の猫問題解決のサポーターを育てることもつながります。ぜひ一度開催してみてください。

## 開催のポイント

### ① 定期的開催

月に一度あるいは2カ月に一度程度予定し、参加しやすいときに参加してもらいましょう。

譲渡後一度は参加してもらうよう案内します。

### ② 楽しく親しみやすい雰囲気作り

堅苦しい勉強会ではなく、お茶などを用意した「茶話会」として案内すると、猫の飼い主も参加しやすいでしょう。

### ③ 相談には親身に対応

実際に飼い始めてからの悩みや疑問に適切に答えられるよう、猫の行動学や飼育方法など勉強しておきましょう。また、参加者同士「うちはどうしてうまくいった」というアドバイスをもらうのもいいでしょう。よくある質問には解決のヒントをまとめたプリントを用意しておきます。

### ④ 不妊去勢手術実施の確認

子猫の殺処分数を考えても、不妊去勢手術の徹底が急務です。譲渡後の手術実施を確認し、まだの場合には具体的な不妊去勢手術のメリットを再度説明し、近くの獣医師を紹介する、日程を予定させるなど積極的に働きかけましょう。



## COLUMN 9

### 松本市「猫のにゃんでも相談会」

長野県松本市では、松本保健所と長野県動物愛護会「ネコ部会」の共催で、月に一度、松本保健所の会議室で「猫のにゃんでも相談会」を開催しています。ここでは、猫の飼い主（一般の飼い主はもちろん、譲渡猫の飼い主も）、また猫の問題で困っている人たちがさまざまな相談を持ち込みます。猫の飼い方から、猫に関する苦情まで多岐にわたる相談に答えるのは、保健所のスタッフ、愛護会のメンバー、そして協力してくれる地元の開業獣医師。さまざまな問題への対処方法を、専門家の立場、市民の立場で共に考えようという相談会になっています。



猫に関しては、現在どこの自治体でも問題が山積みです。譲渡事業だけを熱心に行っても解決にならず、これといった策もなく困っている自治体も多いと思いますが、この相談会のように、猫問題を多角的にとらえ、多くの人を巻き込み、適正な飼い方、そして地域で人と猫が共生できる社会を作っていこうという試みは参考になります。

譲渡後の相談会という枠にとらわれず考えてみてください。



# 猫のエネルギー発散と適切な道具

猫は本来捕食性が強く、動くものに敏感に反応します。

その本能が十分に満たされないと、室内飼いの場合、飼い主の体に爪や歯を立てたり、過剰に部屋の中で走り回ったり、夜中に騒ぐなどの問題が発生しやすくなるのです。

そこで必要なのが飼い主さんとの適切な遊びです。猫と毎日しっかり遊んであげることで、捕食行動が適切に満たされるだけでなく、飼い主さんとの絆も深まり、よいコミュニケーションを取る時間にもなります。

以下に挙げたおもちゃでの遊びを、ぜひ飼い主に勧めてください。なお、猫と遊ぶ際に忘れてはならないルールが一つあります。それは人間の体をおもちゃにして遊ばせないこと。手や足で猫をじゃらすことを習慣にしてしまうと、猫は人の体を遊び道具だと思い、かなりひどいケガをすることがありますので注意してください。



## 一緒に遊ぶおもちゃ

飼い主さんが手に持ち動かすことで、猫に全身運動をさせることができます。

コツは「取れそうで取れない」ように動かすこと。そして時々猫にくわえさせたり、爪に食い込ませてやりましょう。おもちゃを家具の上から床まで動かし猫に追わせると、上下運動にもなります。上手におもちゃを動かして、猫を疲れさせましょう。

## 吊るすことのできるおもちゃ

市販のおもちゃにひもや洋服に使用するゴムなどをくり付け、ドアノブやフック、イスの背もたれにしばっておきます。留守がちな方は、こういったおもちゃを複数用意してから出かけるようにすると、猫が勝手に遊んでいてくれるでしょう。飽きさせないコツは、おもちゃを吊るす場所を毎日変えること、吊るすおもちゃをローテーションで取り替えて変化をつけることです。猫によってはひもを体に巻き付けてしまう子もいるので、まずはどんな遊び方をするのか飼い主さんが見ていられる時に試してから留守中に使用してください。



## フードを入れることができるおもちゃ

肥満傾向にある猫や食欲が旺盛ですぐに催促する猫におすすめなのは、透明で中にフードを詰めることができるタイプのおもちゃです。おもちゃには穴が開いていて、猫が前足や体を使って転がすと、穴からフードが少量ずつ出てくるしくみです。まずは少量フードを入れて猫がおもちゃを転がすのを手伝いながら遊び方を教えてあげましょう。

慣れてくれば食事を全てこの中に入れても大丈夫。取り出して食べるためにはかなり体を動かすこととなります。

また、このおもちゃは空になったペットボトルで簡単に作ることができます。カッターでペットボトルに穴を開け、猫がケガをしないようにガムテープやビニールテープで切り口をガードしましょう。

ペットボトルのどこにどんなサイズの穴を開けるかで、フードの取り出しやすさを調整することができます。留守がちな家庭で飼われている猫にも良いおもちゃになるでしょう。



## 一人遊び用おもちゃ

猫用のおもちゃとして今は多くのおもちゃが市販されています。まずはいくつか購入してその猫の好みを探ってみましょう。もし猫がおもちゃをすぐに壊してしまったり、噛みちぎって飲み込んでしまうことがあれば、そのおもちゃは留守中に与えるのは避けましょう。誤飲を防ぐためです。

飽きさせないコツは、同じものをずっと与えっぱなしにしないこと。定期的に新しいものと取り替えローテーションを組み適切な刺激を与えましょう。



## 猫の飼い方アドバイス

### ■猫がトイレを失敗するときは？

猫の飼い方で最も相談が多いのが「トイレ」に関することです。

トイレでしてくれない、急にトイレを使わなくなった……というような悩みに対しては、次のようなポイントを押さえて、アドバイスしましょう。

#### 1 健康を害していないでしょうか？

猫がトイレを急に失敗するようになったときには、まず体調を崩していないか考えましょう。猫は他の動物に比べ泌尿器系の病気にかかりやすく、体調の悪化が原因でトイレを失敗しているのかもしれませんが、かかりつけの獣医師に相談してみてください。

#### 3 トイレの砂はどんなものを使っていますか？

いままで問題なく排泄していたのに、急にトイレを使わなくなったというようなときは、トイレの砂に問題があることも多いようです。

特売で安かったから、と急にトイレ砂を変えると、猫は使わなくなる場合があります。

それぞれの猫に好みもありますが、一般に「荒い砂＝粒が大きい砂」よりも「細かい砂＝粒が小さい砂」が好まれます。猫は排泄をする際に、しっかり足を踏ん張ります。あまりに荒く、足が安定しないような砂だと、そこでしなくなります。排泄しづらいわけです。

また、排泄の前後、砂を掘って排泄物を埋めたり隠したりするのが猫の習性です。

それができるように、トイレ砂は深くたっぷり入れてやりましょう。



#### 2 トイレの設置場所はどこですか？

家の中で猫がいつもいるところに近く、猫が行きやすい場所に設置しましょう。リビングルームにすることが多い猫なら、その部屋の片隅がいいでしょう。よくないのは、床面がガタガタと安定しない場所、洗濯機の横など大きな音や振動がある場所、ドアのすぐ近くの場所（急にドアが開くとびっくりする）、寒くて遠い場所（普段はリビングにいる猫のトイレが廊下の奥の洗面所だと、遠さや寒さが億劫になってトイレに行かなくなります）などです。

#### 4 トイレの数は足りていますか？

基本的に、猫のトイレは「頭数＋1」と考えてください。つまり猫が一頭でも、トイレは2つ、それぞれ離れた場所に置きましょう。猫の数が増えたら、それだけトイレの数も増やします。設置する場所も十分離します。猫同士の相性が悪い場合、強い猫がトイレのそばにいと、弱い猫は近づくことができません。

## 5 トイレ容器は十分な大きさで、使いやすいですか？

猫のサイズに対して、トイレが小さいとよくありません。

トイレの縁に猫がつかまって排泄をしていたり、体がはみ出しているようなら、それは小さすぎるということです。十分な大きさのトイレを用意しましょう。

猫トイレとして市販されているものだけではなく、プラスチックの衣装ケースに砂をたっぷり入れてトイレとするなど、工夫してみましょう。

また、カバーが付いているタイプのトイレは、砂が飛び散らないので人には便利ですが、中においがこもりやすく、また

排泄するたびに掃除をすることを人が億劫に感じてしまうので、猫にとっては、カバーなしのほうが快適でしょう。

もともと猫は囲われた場所で排泄をする動物ではありません。

また、容器を洗う洗剤を変えただけでも、その洗剤のにおいが原因でトイレを使わなくなる子もいます。気をつけましょう。



## 猫の動作で分かる「トイレの不快感」

～こんな動作が出たら、そのトイレは快適ではありません～

- ①猫がトイレの縁に立って排泄する（狭い）
- ②慌ててトイレから出てくる（汚いので、そこに居たくない）
- ③短時間しかトイレに入らず、あまり掘ったり埋めたりしない（掃除がされていない）
- ④トイレの後、足を振っている（足についた排泄物を振り払っている＝足に排泄物が付いてしまうくらい砂が浅い）

## ■猫にケージを使う場合の注意点

ケージに猫を長時間入れっぱなしにしないようにアドバイスしましょう。

猫は、ケージの中にいる間は活動的に動き回ることができません。すると、その反動で、ケージから部屋に出して自由にしたときに、非常に活動的になり、部屋中を暴れまわったり、飼い主に対してじゃれ噛みをしたり、引っかいたりしがちです。こうなると飼い主が手を焼き、結局またケージに戻してしまう。また出すと大騒ぎ、という悪循環につながります。

ケージを使う場合は、出し入れを頻繁にし、長時間猫を入れっぱなしにしないように伝えましょう。

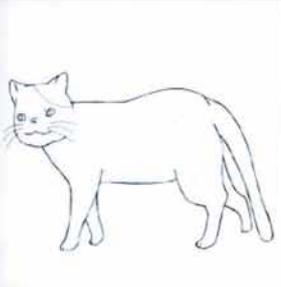


# 猫のボディランゲージ

猫を扱う際には、常に猫の様子を観察し、ボディランゲージを読み取ることが大事です。

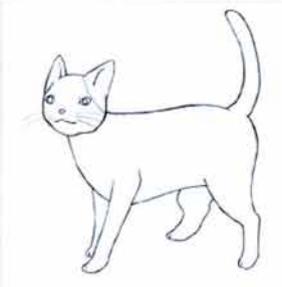
ボディランゲージとは、猫同士がコミュニケーションを取るための手段で、体の各部分の微妙な動きや、体の姿勢、相手との距離の取り方、動き方などで気分や意図を表現します。いわば、猫にとっての「ことば」。以下のイラストは、猫の代表的なボディランゲージです。適性評価を行う際、ケアを行う際には、こうしたボディランゲージに注目してください。

## 1 平常な状態



全身に力が入っていない／尾は自然な状態で下がっている

## 2 喜び



尾を高く上げる／喉を鳴らす／体を揺り寄せる／軽い甘噛みがある

## 3 恐怖



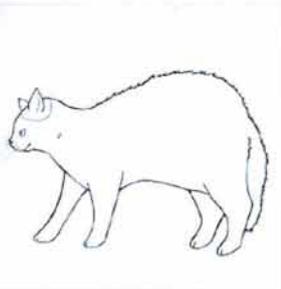
体を低く小さくする／体を後ろに引く／耳を倒す／瞳孔が開く

## 4 恐怖による威嚇



体が弓なりになる／尾がブラシ状になる／完全に耳を倒す／瞳孔が開く／口角を後ろに引く

## 5 攻撃（能動的）



体を大きく見せる／前のめりの姿勢になる／耳を前に倒す／低いうなり声／相手ににじり寄る

## 6 不快



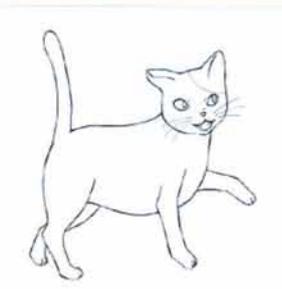
尾を左右に振る／耳がびくびく動く

## 7 遊びに誘う



仰向けになる／全身に力が入っていない／突然甘噛みをする／じやれる

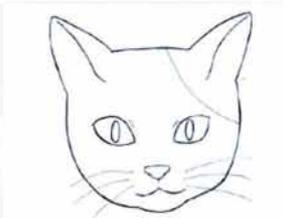
## 8 遊びに誘う



尾をたてる／尾をくねらせる／前足でちよっかいをだす

## 表情の変化

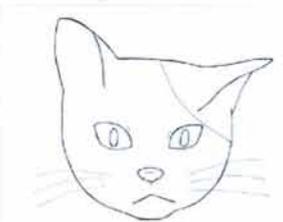
### 1 リラックス



力が入っていない／瞳孔は閉じている／耳は自然な状態で前を向いている



### 2 不安・緊張・葛藤



耳がびくびく動く／口元がやや緊張する



### 3 恐怖による威嚇



耳が後ろに倒れる／瞳孔が開き始める／唸り声、威嚇音



### 4 恐怖による攻撃



耳が完全に倒れる／口角が後ろにひかれる／瞳孔が開く

# FAQ (講習会などでよくある質問にお答えします)

**Q3** 子猫の場合は、健康状態がよく、特に大きな問題がなければそのまま譲渡していますが、何かテストを行ったほうがいいのでしょうか？成猫の場合はどうでしょうか？

**A** 猫の場合は、犬のように明確なテストを行うということがまず不可能です。猫の世話をするスタッフが、ケージに移すとき、日々のケアの際などに、どの程度人に慣れているか、攻撃性が見られるか、性質や癖、好みなどを記録し、評価し、その情報を譲渡希望者に伝え、マッチングの参考にしていくことが实际的でしょう。最も大事なものは、犬の場合と同様『安全』という基準。つまり人に対する著しい攻撃性がない、ということが最大の要件になります。特に猫は残念ながら収容頭数が多い現実があります。まずは扱いやすく攻撃性のない猫から譲渡候補に選んでいく必要があります。

一つの目安として、「収容後長く経過していても」「誰に対しても」「いつでも」、以下のような行動を見せる猫は、譲渡が難しいでしょう。

- ・近づくと毛を逆立てる、またはまったく触らせない
- ・はっきりとした警告を出さずに急に攻撃することがある
- ・人が近づくだけで攻撃性を示す

※子猫の場合の性格チェックの方法は「子犬と子猫の適正ガイドブック」をご覧ください。

**Q4** 飼い猫の不妊去勢手術を勧めるいい方法はありませんか？

**A** 特に苦情が寄せられているわけでもない場合、猫を飼っている家庭に直接不妊去勢手術の方法を伝える機会はありませんが、愛知県岡崎市動物愛護センター animo では、地域の回覧板をうまく使っています。猫の繁殖シーズンに合わせて制作し、岡崎市内全地域の町内会の「回覧板」に挟み込み、地域で回覧してもらうようにしています。回覧板は多くの家庭が目にする「地域のメディア」。それを有効に利用した事例です。

ねこの飼い主さん  
子ねこの産まれる季節がやってきました。 **回覧**

**飼いねこの繁殖制限対策※はできていますか??**

※ 繁殖制限とは、  
避妊・去勢手術、発情中は外に出さないなど、望まれない子ねこが産まれないようにすることです。

「どうして繁殖制限が必要なのか？」

岡崎市では、**毎年400頭以上ものねこが処分されているという現実があります。**

繁殖制限をしないで外に出すと・・・  
オスの場合は、**メスの野良ねこなどが子ねこを産む原因**となります。  
メスの場合は、**子ねこを産み、飼い主さんが責任を持って飼えなくなる**ことがあります。

ということから、**知らず知らずのうちに処分される不幸な子ねこを増やしていることになる**ことがあります。

野良ねこが迷惑だと思ふ方々もいることを理解し、**無責任な繁殖が起これないように**しましょう。

**あなたのねこが処分される不幸な命を増やす前に、飼い主の責任として、繁殖制限を行うよう努めて下さい！**

# 10. 飼育相談

吠える・引っ張る・トイレがうまくできないなど、譲渡後の動物に関して電話や来所による相談があった場合には、適切な対応（その場でのアドバイス、専門家の紹介、情報提供など）をし、問題が深刻化しないよう、そして飼育放棄につながらないようにしましょう。



## 飼育相談を行う前に

### ① どんな相談が多いか、現状を把握しておく

外飼いの犬が多いか、集合住宅が多い地域か、猫の飼育スタイルはどんなものが主流かなど、各地域の動物の飼育状況によって、相談の内容は違ってきます。これまでに寄せられた相談の内容を整理し、現状を把握しておきましょう。よく寄せられる相談には、答え方の基本フォーマットを用意しておくのもよいでしょう。

#### 譲渡後によくある相談（適正譲渡講習会出席者へのアンケートから）

	よくある相談
犬	無駄吠え、興奮、引っ張り、飛びつき、噛み癖、脱走、トイレ、先住動物との関係、なわばりの主張、食事の量、怖がり、留守番、特定の人にしかつかない、落ち着きがない……
猫	トイレ（猫の場合は、ほとんどがトイレに関するもの）、人へのじゃれ噛み、興奮……

### ② 常に情報収集する

動物の飼育方法、行動学などについて、積極的に学ぶようにしましょう。現在は動物に関するセミナーやワークショップ、研修会が数多く開かれています。一般の飼い主にも分かりやすく書かれた飼育本や簡単な行動学の本も出版されていますし、インターネット上にもさまざまな情報があります。ただし、数多くの情報を集めるうちに、いったい何が正しい方法なのか途方に暮れる場合もあるでしょう。その際には、行政が飼い主に指導する際の基本「その方法は人にも動物にも安全か」という視点を思い出してみてください。

### ③ スタッフ間で意見を統一しておく

スタッフによって相談に対する答えがバラバラだと飼い主は混乱し、センターに対する不信感が生まれることもあります。たとえば「トイレを覚えられない」という子犬の相談に対して「タイミングをみてトイレに誘導し適切な排泄場所を教えましょう」というような最新の行動学に基づく方法をアドバイスするスタッフもいれば、「粗相をしたときは、新聞紙を丸めてお尻を叩くといい」と昔信じられていた方法をいまだに指導するスタッフがいたのでは、相談者は混乱するばかりです。

こうした状況を避けるためには、スタッフの勉強会を定期的に行うのがいいでしょう。外部からしつけインストラクターや獣医師など専門家を呼んでレクチャーを受けるのもいいですし、スタッフが自分で学んできたセミナーやワークショップの報告をするのもいいでしょう。

スタッフが何人かいるならば、犬のしつけ相談担当、健康相談担当、猫の担当といった具合に専門分野（得意分野）を決めるのもいいでしょう。それぞれに興味のある分野を割り当てれば、おのずと知識習得に力が入ります。

#### ④ 自分たちに答えられる範囲を決めておく

職員は、トレーニングのプロでもありませんし、問題行動の専門家でもありません。複雑化した問題に対して、すべてに答えられるわけではないのだと認識しておきましょう。手に負えない問題に、安易に不適切なアドバイスをしたことによって、問題が悪化することもあります。まずは、自分たちが答えられる範囲を把握し、それ以上は専門家を紹介するという判断が大事でしょう。

特に深刻な問題行動で悩んでいる飼い主には、適切な紹介先を示し、飼育放棄まで進まないよう迅速に対応しましょう。

#### ⑤ 適切な紹介先を把握しておく

行動治療の専門家、インストラクター、トレーナー、獣医師など、地域にどんな専門家がいるか、情報収集をしておきましょう。中には遠方であっても協力してくれる人もいます。口コミやインターネット、専門誌などで調べてみましょう。実際に相談者に紹介する前に、職員自身がその専門家と話をし（時にはレッスンを受けてみて）その手法を理解しておくのもいいでしょう。相談者にすぐに紹介できるように、専門家リストを作ってみてはどうでしょうか？



## 吠えないようにトレーニングする？ 吠えない場所に犬を繋ぐ？

### ～行政の飼育相談でアドバイスできること～

飼育相談で最も現実的なのは、動物のおかれている環境や、動物に対する飼い主の態度・行動を変えるアドバイスをすることです。

たとえば、玄関先に繋がれている犬が通行人にワンワン吠えるのであれば、繋ぐ場所を裏庭にして犬から通行人が見えないようにする……それが最も簡単で現実的な解決策です。犬が吠えないようにトレーニングするというよりも、ずっと早く問題は解決します。

行政職員は、トレーニングのプロでも問題行動の専門家でもありません。また、相談してくる飼い主も、何日も何週間もかかるトレーニングプログラムをやりたいわけではないでしょう。

「簡単にすぐに」解決するアドバイスを求めている飼い主には

- 動物のニーズを満たすこと
- 飼い主がうまく問題を管理すること

この2点を基本に相談を受けましょう。寄せられる問題の多くは、飼い主が意識や行動を変えることでずいぶん改善されるものなのです。



# 飼育相談のSTEP

犬の吠えや散歩の問題、猫のトイレ問題など、動物の問題行動に関する相談の場合は、以下のような流れで相談を進めていくといいでしょう。

## 問題を聞き取る

飼い主の話の中から問題を具体的に聞き出し、明確にします。たとえば、「外飼いの犬が吠えて困る」ということでも、「誰に対して吠えているのか、吠える時間帯はいつか」などで原因も、対処方法も違います。動物を連れて来所しての相談なら、実際の動物の様子も見てみましょう。

## 確認

以下の3点を中心に、飼い主に確認しましょう。

### Check1 飼育状況（ニーズが満たされているか）を確認する

動物が動物として幸せに生きるために必要なこと（ニーズ）が満たされていないと、「人間から見たら」困った問題行動（吠える、いたずらするなど）が出てしまいます。飼い主から相談が寄せられたら、まずは、動物のニーズが満たされているかを確認しましょう。満たされていないということは、犬の生活の基盤がマイナスである、ということです。これをまずは最低限でもプラスに変えることで、問題が解決する（あるいは軽減する）ことが多くあります。

また、飼育状況を確認すると、問題の原因が見えてくることもあります。

### Check2 飼い主が求めるゴールを確認する

たとえば吠える問題の場合、「とにかく今、すぐにやめさせる方法を知りたい」のか「近所から苦情を言われないようにしたい」のか「吠えない犬にしたい」のか、飼い主の希望するゴールのイメージによって、いま伝えるべきことも変わってきます。

### Check3 飼い主のタイプや環境を確認する

どんなにいいアドバイスでも、飼い主にできることでなければ意味がありません。

問題を解決するには引っ越したほうがいい、と言われても、犬だけで留守番する時間を短くするためにパートをやめたほうがいい、などと言われてもほとんど無理です。

飼い主の住環境や、生活スタイル、また体力なども考慮に入れて、「飼い主ができること」をアドバイスするために、家族構成やいつも世話をする人のことなども確認しましょう。

## アドバイス

ここまで確認してきたことを頭においた上で、「飼い主ができること」をアドバイスします。

### A ニーズをしっかりと満たすようにアドバイス

たとえば、エネルギー発散が足りず退屈もあって吠えているだろうと思われるなら、散歩や遊びを増やしてもらうように伝えましょう。具体的に、朝は出勤前に誰が散歩に行けるか、夕方は庭でボール遊びをしてから散歩に行けないか、など一つ一つ「これならどうですか？」と提案し「できそうだ」ということをやってもらうように伝えます。

### B 問題を起こさないよう管理する方法をアドバイス

外飼いの犬を繋ぐ場所を変える、吠えやすい時間帯だけ家の中に入れるなど、うまく管理をすることで、吠える問題を起こさないように予防することができます……これが、管理という考え方です。

このアドバイスも、飼い主にできるかどうか確認しながら勧めてください。「家の前を通る通行人が多い朝の時間帯だけでもおうちに入れられませんか？玄関のドアノブに繋いで、タタキに一枚毛布でも敷いてやったらおとなしくしていられますか？」など具体的なアイデアを示し、「それならできる」という妥協点を見つけましょう。

また、近所からの苦情が心配というなら、一度挨拶に行くことを勧めてみましょう。

「吠えてご迷惑をおかけしてすみません、なるべく吠えないようにセンターにも相談しているところなので、もう少しお時間を頂けますか？よろしくお願いします」と挨拶をしておく、いきなりのご近所トラブルにはなりにくいものです。

### C 専門家を紹介する

問題が非常に深刻で安易に答えられないような場合、またしっかりトレーニングしたほうがいいだろうと思われる（飼い主自身にもやる気がある）場合、専門家を紹介します。

## アフターフォロー

アドバイスをしたあと、その後の経過を後日電話などで報告してもらえるといいでしょう。アドバイスを実践してもらって2週間後に電話をもらう、あるいはこちらからかけるなどをしてフィードバックを受けるのは、自分たちにとって励みにも勉強にもなります。

# 飼育相談のアドバイス

## ニーズをしっかり満たすようアドバイスする

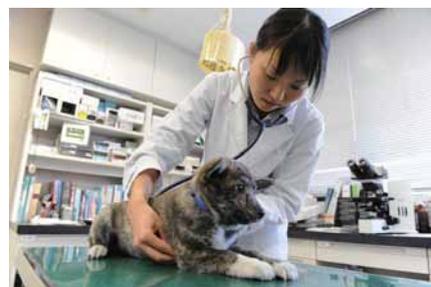
動物がいきいきと生活するために必要なこと（ニーズ）を、飼い主がしっかりと満たしてあげることで防げる問題がたくさんあります。犬、猫それぞれのニーズをリストにしました。飼育相談の参考にしてください。

### ■ 犬のニーズ



#### 体の健康

- 予防できる病気は予防する  
狂犬病予防接種・混合ワクチン・フィラリア予防・  
内外部寄生虫予防
- 毎日の健康チェック～異常の早期発見
- 定期的な健康診断
- 適切な治療
- デンタルケア
- 不妊去勢手術



体の健康が保たれていなければ、さまざまな問題が起こります。たとえば、痛みがあればイライラし不安症状や攻撃行動が出る場合もあります。困った行動が出たら、まず最初に身体的な問題がないかどうかをチェックしましょう。普段と違うことはないかよく様子を見て、おかしいことがあれば動物病院で診察を受けましょう。

また、「性的欲求」によって起こる問題行動（攻撃行動、脱走など）もあります。本来性的欲求というのは犬の自然なニーズですが、現代社会で人間と共に暮らしている犬に、これを自由に満たしてやることはできません。それならば、早期に不妊去勢手術を行い、性的欲求が満たされない故のストレスや問題行動を予防したほうがいいでしょう。

#### このニーズが満たされていないと

例1) 膀胱炎によって排泄の回数が増え、それが引き金で排泄の失敗が増える。

##### 改善策

定期的な健康診断、また、いつもの様子と違うなら獣医の診察を受ける。



例2) メスの場合、発情期にモノ守りがひどくなる、人に攻撃的になるということもある。

またオスの場合、メスの発情期のおおいに惹かれて鎖を引きちぎって脱走したり、食事を取らなくなったり、そのイライラから人に攻撃的になったりすることもある。

##### 改善策

早急に不妊去勢手術を実施する。



## 快適な生活空間

- 安心して休める寝場所を用意する
- 適切な排泄場所を用意する
- 生活空間を清潔に保つ
- 環境を整備し危険を取り除く
- 安全で適度なスペース、居場所を作る



住環境は生活の基盤です。室内飼いで、外飼いで、犬が快適に過ごすことができるように整えてやることで、さまざまな問題を予防、軽減できます。

安心して休むことができる場所があれば精神的に安定し、吠えや不安による行動が減りますし、適切なトイレの場所を用意すれば排泄の失敗も防げます。いたずらされて困るものを犬に届かないところにしまえば、危険もいたずらも予防できます。

また最近では、室内にサークルで囲った犬の居場所を作り、そこだけで生活させる飼い主もいますが、本来犬は狭い場所に閉じ込めて飼う動物ではありません。狭い場所に閉じ込められればなすとストレスとエネルギーをため込み、よく吠えるようになったり、部屋に出ずとすごい勢いで走りまわったりするようになります。留守番のとき以外は頻りにサークルから出す、留守番が長いならサークル内を広くし環境を豊かにするなどの工夫が大事です。

### このニーズが満たされていないと

例1) 外の犬小屋に雨が入る、風が入る、外を通る人から丸見え、というような環境だと安心してしっかり眠ることができないので、常に精神的に落ち着かずひどく吠えたりすることがある。



#### 改善策

暑さ寒さ調節（入口に風除け、毛布、日陰に移動、よしずをかける、周りに打ち水など）広さをキープ（繋がれている鎖が短すぎないか、絡みつかないか、犬小屋（檻）の大きさ）、周りから見えない場所へ移動、ついたてを建てるなどで落ち着ける環境へ。

例2) 室内飼い。一日中留守番をしているサークルが狭すぎることで、吠え、食糞、トイレの失敗につながる……

#### 改善策

ケージサークルの大きさを適切なものに広げる。サークル内のトイレと寝場所をはっきり区別し、遠くに置く。

サークルの置き場所を確認（日光が当たり続けていないか？暑さ・寒さは大丈夫か？外が丸見えでないか？ジメジメと湿気はないか？また、洗面所にサークルを設置すると落ち着くことができません）。

サークル内におもちゃやコングを入れ環境を豊かにする。



## バランスの取れた食事と新鮮な水

- 個体に合わせた食事量
- 栄養バランスの取れた食事
- 犬が食べると危険なものを避ける
- いつでも新鮮な水が飲めるようにする



健康を維持できる食事を与えるのは当たり前ですが、内容や与え方にも工夫をしましょう。

**食事量：** 市販のフードの袋に書かれている体重に合わせた量を基本としますが、食べ残したり食べ過ぎて少し下痢をするなどであれば、様子を見て加減しましょう。同じ量を与えていても、太る犬もいれば痩せる犬もいます。肥満は生活習慣病の原因になりますし、痩せすぎもよくありません。

**食事の回数：** 子犬は胃が小さく一度にたくさんは消化できず下痢をしやすいものです。生後2カ月までは一日4～5回、6カ月までは一日3回、その後朝晩2回と移行していきましょう。また食事の時間をきっちり定時に決めすぎると、その時間に与えられないときの要求吠えなどにつながることもあります。

また、食事をしているときに小さな子供が邪魔をするような環境や、食事量が極端に少ないと食事（資源）を守る行動にもつながるので、注意。

もちろん、犬が食べると危険なもの（玉ねぎなどのネギ類、レーズン、チョコレートなど）にも気をつけましょう。

### このニーズが満たされていないと

例1) 栄養のバランスが取れた食事を適量与えないと体調を崩し、下痢などから排泄の問題が起きることもある。

#### 改善策

獣医師とも相談の上、個体にあった栄養バランスの良い食事を与える。

例2) 成犬の場合でも、一日に食事が一回では、空腹な時間が長くイライラしたり食事を催促して吠えたりすることもある。

#### 改善策

朝晩2回の食事に変える。一日の給餌量を、2回の食事時間だけではなく、しつけのごほうびや、留守番の際にコングに詰めるものとして使うこともできる。あつという間に終わる食事ではなく、食べることを楽しめる。

例3) サイフォン式やペットボトルをさかさまにして使う給水器具。水が少しずつしか出ないので、飲水量が減り、脱水症状を起こしたり、水分が足りず尿を舐めるようになること等が考えられる



#### 改善策

給水器具は留守番のときの補助として使用し、基本はステンレス容器などでたっぷり新鮮な水を与える。





## 運動欲求

- ・エネルギーの発散
- ・本能（噛む欲求、においを嗅ぐ欲求）を満足させる



本来犬には、狩りに出たり羊を追ったりという仕事があったわけですが、現代の犬は仕事もなく退屈でエネルギーをもてあましています。適切にそのエネルギーを発散させないと、犬は自分で仕事を勝手に見つけます。たとえば室内で大運動会をしたり、インタフォンの音に反応して吠えたり、庭を掘り起こしたり、散歩のときにひどく引っ張ったり、ということになり、それが人にとっては問題になるのです。十分にエネルギーを発散させ、問題を予防しましょう。

欧米には「疲れた犬はいい犬」という表現があるほどです。留守番の前にたっぷり運動をさせることで、留守中静かに寝ていてくれます。

また「においを嗅ぐ」といった犬の本能を、きちんと満足させてやるための遊びや散歩も工夫しましょう。においを嗅ぐのは犬にとって大事な情報収集であり、脳への刺激ともなります。「かじる」のも犬の本能。かじっている物を与えておかないと、人にとって大切な物をかじられてしまいます。

### このニーズが満たされていないと

例1) 特に、活動的な子犬や若い犬の場合は、しっかりエネルギーを発散させないと以下のような行動が起こる。

- ・家の中を走りまくる、暴れまくる
- ・散歩のときにすごく引っ張る
- ・いたずらがひどい（庭を掘ったり、人に飛びついたり）
- ・吠えがひどい

#### 改善策

たっぷりエネルギーを発散させる（エネルギーの発散のページ参照）

例2) 噛んでよいおもちゃを適切に与えないと、家具やスリッパなど、噛まれては困るものをいたずらする場合がある。

#### 改善策

適切な噛むおもちゃ、長く持つおもちゃを与える





## 社会的なかかわり

- 飼い主とのスキンシップ
- 他人や他犬との適切な触れ合い
- 子犬の場合、適切な社会化



犬はもともと仲間と共に暮らす社会性の高い動物です。家族の一員として、たっぷりとコミュニケーションをとってあげましょう。

他の人や犬とのふれあいを好む犬ならば、そういった機会を増やしてやりましょう。

日常的に十分に飼い主や他犬、他人と触れ合い、それらが当たり前になり、良い経験を繰り返している犬たちは、他犬や他人を見て過剰に興奮して吠えたり、極端な恐怖反応や攻撃行動を見せたりしにくいものです。

子犬の場合、こうした社会化が適切に行われると、将来起こりうるさまざまなリスクに対応できるようになります。

ただし、すでに成犬で、他人や他犬を怖がるタイプには、慎重に接してやる必要があります。

犬にも個性があり、犬付き合い・人付き合いが苦手なタイプもいるのです。そうした犬の場合は、積極的に触れ合うというよりも、「さまざまなものを見ても平常心でいられる」ことを目標にしましょう。

### このニーズが満たされていないと

例 1) 外飼いで、ひどく吠えたり、人が近付くと過剰に興奮し飛びついたり激しくじゃれたりするのは、食事を与える以外、犬と触れ合うことがまったくない飼い主に飼われている場合が多い。



#### 改善策

犬と触れ合う時間を多くする。外飼いで、窓から室内が見える位置に犬小屋を置いたり、朝晩散歩に連れ出す、遊んでやる、などをすることで、犬は精神的に安定し行動も落ち着いてくる。

例 2) 新しい環境や人を怖がり、慣れるのにとても時間がかかる。

社会化期に適切な社会化が行われなかったのも原因と考えられる。

#### 改善策

社会化期を過ぎても、さまざまなものに慣らしていくことは可能。

犬の苦手なことは無理強いをしないで、おやつなど好きなものを使い、慎重に時間をかけて慣らしていく。

(しつけインストラクターを紹介し、さまざまな物や事に慣らす方法を習うよう勧めるのもいいでしょう)



# 猫のニーズ



猫の  
ニーズ

## 健康管理

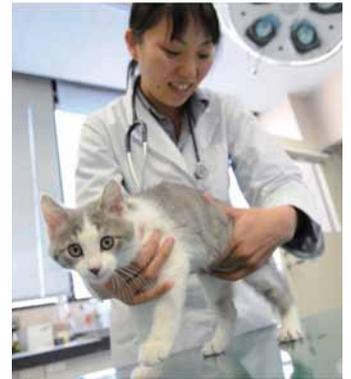
- 予防できる病気は予防する
- 健康診断・適切な治療
- 不妊去勢手術

獣医療の進歩と共に昔は防げなかった病気もワクチンなどで予防でき、猫の寿命は伸びてきています。しかし猫には、犬に比べてワクチンで防げない感染症も多いので、室内飼育はその予防のためにもお薦めです。

普段から猫の様子をチェックし、何か少しでも体調の変化に気付いたら、すぐに動物病院で診察を受けましょう。特に、食事をまったく取らない、尿が出

ていない、尿の様子がいつもと違う、ということがあればすぐに相談をしてください。

不妊去勢手術も、病気の予防という観点からも、不幸な動物を増やさないという意味においても必要不可欠。28ページを参考にしてみてください。



猫の  
ニーズ

## 快適な生活環境



- 自由に動き回れる空間
- 上下に移動できる段差のある環境
- 安心して休める寝場所
- 不安を感じたときに隠れる場所

### ■室内でも十分飼える！

交通事故や感染症などのトラブルを避けるためにも、現在、多くの専門家が猫の室内飼育を推薦しています。ただし、ただ部屋の中に入れておけば良い、というわけではなく、猫の欲求を満たすような生活環境を整える必要があります。ある程度のスペースに、上記のような生活環境の条件が整えば、室内だけでも満足してくれる生き物なのです。

### <室内飼育のメリット>

- 1：交通事故の危険回避
- 2：感染症の予防
- 3：連れ去り、いじめ等、虐待からの回避
- 4：故意による毒物による中毒死や散布された農薬による中毒死の防止
- 5：行方不明の防止
- 6：排泄物等によるご近所トラブルの防止



### ■隠れ場所

特に、猫は本来とても臆病な動物なので、何か不安を感じた際にすっぽりと身を隠せるような場所が必要不可欠です。そうした安心できる場所がないと、猫は神経質になりやすく、飼い主になつきづらくなったり、

恐怖による攻撃を誘発したり、排泄の失敗につながることもあります。段ボールやバスケット、猫用のベッド等を、猫が出入り可能な各部屋に最低でも一つずつは用意してやると良いでしょう。設置場所はタンスや本棚などの上、そして人の視線が届かない場所がお薦め。快適な寝場所にもなるはずです。

### ■上下運動

また、猫は立体空間の移動や、複雑に入り組んだスペースの移動を好みます。部屋の中の家具の配置を考えて、猫が上下運動できるよう工夫してみましょう。あまり背の高い家具がない家では、猫用に市販されているキャットタワーを設置してもらうのも良い方法です。

上下運動ができると、猫は自らある程度エネルギーを発散できます。多くの若い猫は非常に活発で、じゃれつきや家の中を過剰に興奮して走り回るなどの行動がよく見られますが、猫としてはとても正常なこの行動も、飼い主にしてみれば、困った問題。深夜に部屋の中で運動会が始まったり、過剰にじゃれつかれてしまったりするという相談も多いですが、そんなときは、まず上下運動が可能な室内環境をしっかりと整えてあげてください。





## バランスの取れた食事と新鮮な水

- 個体に合わせた食事量
- 栄養バランスの取れた食事
- いつでも新鮮な水が飲めるようにする

### ■食事の内容

猫は犬に比べはるかに肉食傾向が強く、より多くのタンパク質や脂質が必要な動物です。現在では多くのキャットフードが市販されていますから、基本的にはこれを上手に取り入れ、猫の主食にするとよいでしょう。手作りで猫のご飯を作る際にも、キャットフードを使用する際にも、各猫に合わせた健康を害さないバランスの取れた食事を与えるよう、心がけましょう。



通常は同じフードを食べていても、病気療法食が必要となったり、年齢差が離れている場合にはライフステージ別のフードを食べる時期が来るので、最初から別々の食器で食べさせることに慣らしておきましょう。他の猫の食べ残しを別の猫が食べ肥満につながるといったことを予防するために、食器だけではなく、食べる場所も一頭ずつ分けたほうがよい場合もあります。



### ■複数頭の場合

猫を複数頭で飼育する場合、考えなくてはならないことはそれぞれの猫の健康管理。

どの猫がどれだけ食べたかを確認するためにも、一頭ずつ別々の食器で食事を与えることをお勧めします。

### ■新鮮な水

猫は本来、水の少ない砂漠地帯で家畜化されてきた背景から、水をあまり積極的に飲もうとしない傾向が強くなります。とはいえ、水分を十分に摂取しないとさまざまな病気を引き起こす可能性があります。なるべく多くの水を飲んでもらえるよう工夫しましょう。たとえば、水を入れる容器は陶器や磁器でできている物の方がプラスチック製の物より好むようで、水の摂取量が増えることが多いようです。いつでも新鮮な水が飲めるよう、猫が飲みやすい場所に用意してやりましょう。



## 運動欲求・捕食行動を満足させる

- しっかりと遊ぶ
- 生活に刺激を与える

猫を室内飼育する際の唯一のデメリットは、猫が退屈しやすいことです。



特に若い猫たちは捕食行動が非常に激しく、刺激の少ない室内では動くものが飼い主の体しかないので、飼い主にじゃれつきます。引っかけられたり、甘噛みで悩む飼い主さんは少なくありません。

猫を室内飼育にするのであ

れば、しっかりと猫と遊ぶ時間を作ることも、また部屋の中に時々新しい刺激を加えるのもいいでしょう。いろいろな段ボールや紙袋（持ち手は猫に絡むと危険なので外しましょう）、猫草など、猫にとって安全なものを置くことを考えましょう。

室内飼育されている猫たちの捕食行動を満足させるおもちゃや遊びは57ページで詳しく紹介しています。





## 本能を満足させる

### ■マーキング

猫は自分のなわばりや気に入ったものに対して、さまざまな印をつけます。その印の多くは「におい」。体のあちこちにある臭腺から体を擦り付けることにより、においを残します。家具や壁の角などに頬や体をこすりつけているのは、このマーキングという行為。また、爪を研いだ跡を残すこと、尿をかけることでも自身の存在を主張することがあります。

尿マーキングの多くは去勢手術で改善されますが、体を擦り付けることや爪研ぎを完全になくすことは不可能に近く、室内にある程度こういった欲求を満たせるものを置いてあげる必要が出てきます。



### ■爪研ぎ

爪研ぎは適切な物がなければ、室内の適当な場所（壁や柱やソファなど）が格好の餌食になります。

今はさまざまな猫用の爪研ぎが市販されていますので、色々な素材の物をいくつか用意し、その猫の好みに合わせて設置してみてください。

設置する際には床に直接置くだけでなく、壁面に貼り付けるなど縦に設置し、猫が背伸びをしながら爪が研げるようにしておくのも大切なポイントです。

そういった爪研ぎを各部屋に2個以上設置しておく、家具などへの爪研ぎ被害は少なくなるはずですよ。

- ・顔や体でのマーキングができる場所
- ・爪研ぎができる場所

### ■爪切りに慣らす

猫はもともと捕食性の動物。獲物を捕るため常にすどく爪を尖らせておく必要があります、頻りに爪を研ぐ傾向があります。古い爪の鞘を外し、より獲物が捕りやすい新しい爪にするのです。

しかし、現代の室内で飼われる猫は十分な食事を与えられ獲物を捕る必要はないので、子猫の頃から爪切りを習慣にしておくといいでしょう。最初は猫が食事をしている最中に、一日一本、爪を切る習慣を付けてみましょう。嫌がる猫を無理やり押さえ込み一気に全ての爪を切るのは、爪切り嫌いな猫を増やすだけです。食事を邪魔されるのが嫌いな猫は眠そうな時に一本だけ切り、切った後のごほうびとして体をゆっくり触ってあげると良いでしょう。





## 猫のニーズ 快適なトイレ環境

猫は非常にきれい好きで、トイレにこだわりがあります。

トイレを教えること自体は犬に比べはるかに楽。特に教えなくてもできる猫も多いですが、トイレできちんと排泄できた時に好物のおやつなどを与えてほめていくことで、確実にすぐにトイレを覚えます。

ただし、トイレ環境のわずかな変化にも敏感で、それをきっかけに失敗が起きやすくなることもありますので、58～59ページを参考に、猫にとっての快適なトイレ環境を心がけてください。

- トイレの数、大きさ、砂の種類、清潔さ



## 猫のニーズ 社会的なかかわり



単独生活を好むように思われている猫ですが、実は社会性の高い動物です。

- 飼い主さんとのスキンシップ

室内飼育されている猫の場合は他の社会や動物との接点がありませんから、その分飼い主が毎日コミュニケーションを図り、かまってやる必要があります。話しかけたり、なでたり、おもちゃを使って遊んだりする時間が、室内飼育の猫には特に必要なのです。

それが満たされないと、エネルギー過剰やそれに伴う攻撃行動の発生が問題になります。一人暮らし、もしくは人数が少なく留守がちな家庭で、一頭だけで飼われている室内飼育の猫によく見られる問題なので、注意してください。猫は放っておいても平気、猫は家につく、という概念はもう昔のもの。現代では、犬も猫も人（飼い主）につくのです。

**Q5** これまで自由に猫を飼っていた人は、新しい猫についても完全室内飼いをしてくれませんか。理解してもらうにはどのような説明をすれば有効でしょうか？

**A** 家も外も自由に行き来できる従来の猫の飼い方をしてきた経験のある人に、「完全室内飼い」を決断させるのはなかなか大変です。まずは「完全室内飼い」のメリットを伝えると共に、外に自由に出入りしているとどんなリスクがあるか、事実に基づくアプローチも時には有効です。

下記を参考にしてください。

## 猫の室内飼いを決断させる 4つの事実！

### 事実①：交通事故で死亡する猫の数（動物死体収容数の90%が猫という報告も！）

#### 事実の伝え方：

地域の清掃局に年間どれくらいの猫の路上死体を収容するかを確認し、その数を講習会などで積極的に伝え、交通事故のリスクの高さを伝えるといいでしょう。事故に遭った猫の写真を見せる方法もあります。

### 事実②：感染症の恐怖！

#### 事実の伝え方：

外へ自由に出ることによって病気に感染する可能性があるとは知っていても、その病気がどんなものか、治療にどの程度時間やお金がかかるのか、具体的に知らない飼い主も多いものです。猫免疫不全ウイルス感染症にかかった猫の悲惨な写真を見せたり、治療の苦労、治療費の概算などを具体的に示すといいでしょう。

### 事実③：ご近所トラブル！（裁判や事件になることも……）

#### 事実の伝え方：

猫の排泄などをめぐって発生した近隣トラブルの実例を伝えましょう。ご近所の関係がぎくしゃくしたという程度から、近所同士で起こされた裁判や事件発生などの例も把握しておくといいでしょう。

### 事実④：虐待は実際に起こっている！

#### 事実の伝え方：

動物に対するいじめや虐待の例を、写真を使って伝えましょう。また連れ去りの事実もあることも伝えましょう。

# 飼育相談のアドバイス

## 問題を起こさないように管理する

動物のニーズを満たした上で、問題が起きないように動物の生活を管理しましょう。

動物の生活環境を変える、飼い主の行動を変える、人間と動物の生活の妥協点を見出す……そうして管理することで、困っていた問題を起こさずに済むのです。

以下に、その具体策を示しました。発想の転換をすれば、実はとてもシンプルな解決策です。参考にしてみてください。

### 外飼いの犬によくある問題を『管理』で解決！

通行人に向かって吠える



通行人が見えない場所に犬の居場所を移す、繋ぐ。

隣の家の人が出勤する時間に吠える



その時間だけ玄関に犬を入れる。

明け方にワンワン吠える



夜遅い時間に一度排泄をさせる（短い散歩）、可能なら玄関か土間に居場所を作り夜間だけ室内に入れる。

庭に出ると激しく興奮して飛びついてくる



散歩の時間を増やし、退屈しのぎができるおもちゃを一日何度も与える。

干してある洗濯物を引きずり落とす



洗濯物に届かない位置に犬を移動する。庭の中で犬を自由にできる場所を区切る。洗濯干しの周りだけ犬が入れないようにする。

庭を掘る



掘られてもいい場所に犬を繋ぐ。掘られたくない場所はフェンスで囲って犬の居場所と分ける。

脱走する



首輪のチェック、フェンスの高さ、すき間をふさぐなど、原因をチェックしてそれを改善する。

車をかじる



犬を繋ぐ場所を変えて車に近づけないようにする。

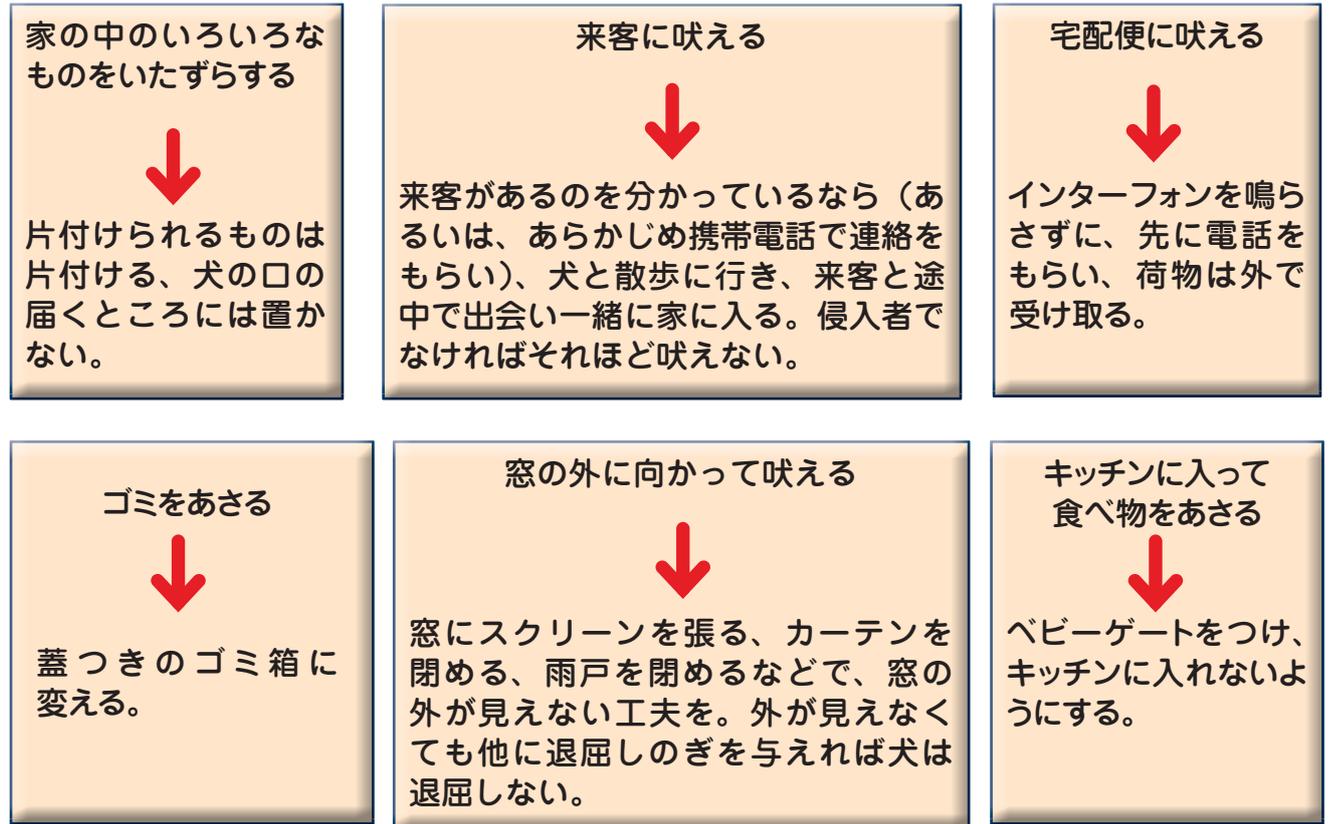


庭を掘るなら…

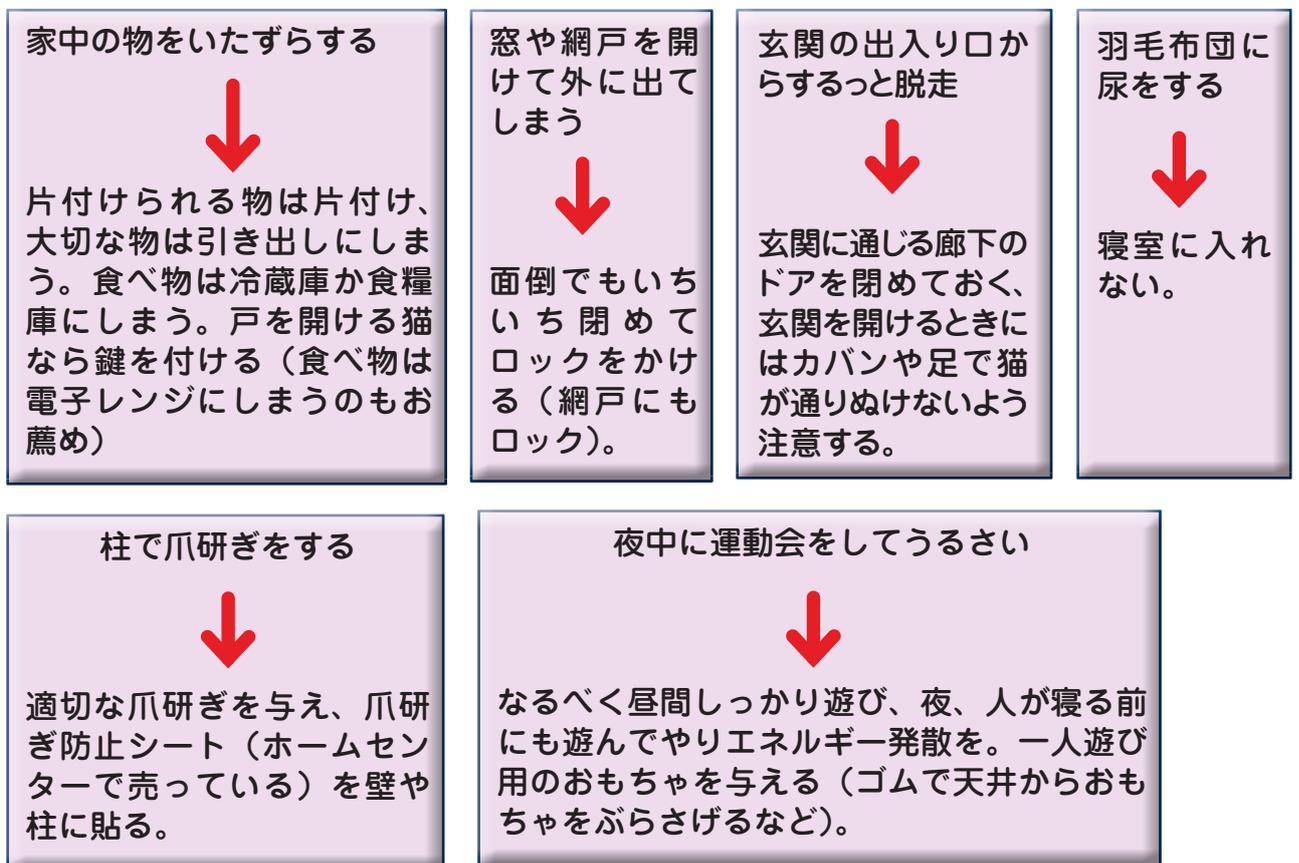


キッチンに入るなら…

## 室内飼いの犬によくある問題を『管理』で解決！



## 猫によくある問題を『管理』で解決！



## 飼育相談で大事な「姿勢」「質問力」「助言力」

譲渡後の飼育相談は電話の場合も多く、会話だけで正確に問題を把握できるのか、遠隔からの的確なアドバイスができるのか、難しい側面もあります。特に電話相談に役立つようなコミュニケーションのポイントを示しました。参考にしてください。

### 相談を受ける姿勢

どんな種類の相談も同じですが、相談者の気持ちに寄り添ってしっかりと話を聴く姿勢（＝傾聴）がまず求められます。人は、自分の話を真剣に聴いてくれた相手のことは信用し、相手の話も聴こうとします。まず信頼関係を築くことで、その後提示するアドバイスも受け入れてもらいやすくなるのです。

#### ●傾聴のポイント

##### ① 相手の気持ちに共感する

動物のことで悩んでいる気持ちを理解し、「共に解決策を考える」という姿勢を示しましょう。

##### ② 相手を否定しない

話を聴く途中で、「なぜそんな対応をしたんですか、だから犬がますます悪くなったんです」などと、相手を否定したり、批判したりするとコミュニケーションの扉は閉じられてしまいます。

##### ③ 適度なうなづき、あいづちで、相手の話を促す

特に電話の場合、「なるほど」「そうなんですか」といったあいづちで、相手は話を進めやすく感じます。

##### ④ 要約しながら聴く

相談者の話を要約し確認しながら進めると、「分かってきている」と信頼も増しますし、限られた時間の中で話を前に進めることもできます。

例：「なるほど、猫が外に出たがっているけど、本当に室内だけでいいのか不安だと思っていらっしゃるんですね？」

### 質問力

限られた時間の中で問題の核心をつかむためには、どのような質問をしていくか「質問力」が問われます。実際の犬の状況を見ることなく、飼い主の言葉だけで正確な状況を把握することになりますから、適切な質問をしていくことが大切です。いったい何が問題なのか、具体的な質問で正確な情報を聞き取りましょう。

#### ●質問を使い分けると、問題がクリアになる

**オープンクエスチョン（自由な答えを引き出す質問～概要をつかむ）**

例：「甘噛みは、その後どうですか？」

**クローズドクエスチョン（はい・いいえで答えられる質問～核心に迫る）**

例：「お母さんには甘噛みしますか？お子さんにはしますか？」



## ●大きな質問には、小さな質問で、細かな情報を得る

相談者は、ざっくりとした質問の仕方をしてくるものです。その大きな質問に対して、小さな細かい質問を返して、正確な状況を把握しましょう。そこから問題の原因が見え、具体的なアドバイスにもつながります。「無駄吠え」「いたずら」と言った言葉も、人によって想像する状況は違うものです。その共通項を見出していく作業でもあります。

例：相談者「無駄吠えがひどくて困っているんです、どうしたらいいですか？」

回答者「どんなときに吠えますか？」「吠える対象は人ですか、犬ですか？」

「吠える時間帯は決まっていますか？」「吠えたとき飼い主さんはどう対応していますか？」

## 助言力

アドバイスをするときも、相手が受け入れやすい表現で伝えましょう。相手に合わせたアドバイスを、相手に合わせた表現で伝える必要があります。

## ●否定や批判ではなく、建設的なアドバイスをする

これまで飼い主がとってきた対応に問題があるとしても、そこに固執して攻める必要はなく、これからどうしたらよくなるかを前向きに伝えましょう。

## ●「～すべきです」ではなく「～してみませんか？」

断定や命令ではなく、提案型の表現のほうが受け入れやすいものです。「なぜそれを勧めるか、どんなよい結果が期待できるか」を説明し、納得してもらうことが大事です。

## ●理解したかどうかを、随時確認

特に電話であれば、相手が理解したか納得したか、表情を読むこともできません。相手に確認しながら進みましょう。

例：「この方法はできそうですか？」

ときには、提案内容を相手にリピートしてもらおうと記憶に残りやすいでしょう。

例：「犬が吠えたときには、今日からどうするんですって？」

相談者に、必ずメモを取ってもらいましょう。

例：「メモを取っていただいてもいいでしょうか、ご用意ができるまでお待ちします。」

## ●具体的な情報提供を

効果的な道具を勧めるのであれば、その値段やどこで購入できるか、といったことも伝えましょう。相談者がすぐに実行に移しやすいような情報を提供をします。

## ●時間的な制限を設けてみる

人は「〇〇日までに」という締切があると、動くものです。

「明日の日曜日に、この道具を買いに行けますか？」「この方法を1週間やってみて、月曜に報告の電話をください」というように日時指定をしてしまうのも、提案を実行してもらおうよい方法です。

**注：**問題を解決したいというよりも、話を聞いてほしくて頻繁に長い時間電話をしてくるという相談者もいます。すべてに付き合えば仕事に支障が生じます。「今日は相談の依頼が多いので1件15分以内で、と決まっているんです、申し訳ありませんがご協力いただけますか？」というような表現で、まず最初に断りを入れてしまうのも一つの方法です。



## その他のアフターフォロー

追跡調査とは別に、譲渡後の動物たちの様子を把握し、適正飼養をさらに勧めるために以下のような楽しいイベントを実施しているところもあります。

こうしたイベントの中から、飼い主同士のグループができたり、譲渡事業に協力してくれるボランティアが増えたり、また、マスコミや地域に向けてのとても良い広報のチャンスになります。ぜひ実施してみましょう。

### 里帰りイベント

譲渡された動物（主に犬が対象）が、家族と共にセンターに里帰りする日を設定し、参加を呼びかけます。大勢の犬たちが集うこうしたイベントの実施にあたっては、事故防止のためにも、しつけインストラクターやボランティアスタッフの協力は不可欠です。



### しあわせ家族写真コンテスト

譲渡された動物と家族の楽しい写真を送ってもらって、センターに展示したり、その中から「笑顔が一番賞」「そっくりで賞」などを決めて表彰したりというイベントもよく行われます。これなら、猫も参加できます。

地元の新聞社に協力してもらい、優秀作品を新聞に載せてもらえば良いPRになりますし、飼い主家族にもうれしい思い出となります。



## COLUMN 10

### 和歌山県の事例「里帰りイベント」

和歌山県動物愛護センターでは、譲渡後のフォローアップとして、「みんな集まれ！譲渡犬」というイベントを年2回開催しています。これは譲渡された犬たちが家族と共に、センターに里帰りして、しつけを基本にしたゲームなどをセンタースタッフや、ボランティアのしつけインストラクターの指導の下に楽しむイベント。こうした機会があると、譲渡犬たちのその後を知ることができます。また、こうした譲渡後の交流の中から、譲渡犬（および猫）の飼い主による、「わうくらぶ」という組織も誕生。写真コンテストやしつけの講演会などを通じて、会員相互の親睦を図り、地域の模範的な飼い主として、センターと共に正しい飼い方の普及をすることを目的としています。こうした活動が口コミで広がり、犬を飼うならセンターから……という希望者を増やすことにつながっています。

## 電話相談の例

今年度の適正譲渡講習会で行われた、電話相談のデモンストレーションを再現しました。問題をどう聴きとるか、飼い主にどう分かりやすく伝えるか、ぜひ参考にしてください。

相談者： もしもし。

回答者： こんにちは。今日は電話相談にご連絡いただきまして、どうもありがとうございます。お名前を教えてくださいましてよろしいですか。

相談者： わたし、松村と言います。

回答者： はい、松村さんですね。こんにちは。

相談者： こんにちは。

回答者： 今日はどういったご相談でしょうか。

相談者： うちの犬なんですけど……

回答者： はい、ワンちゃんですね。

相談者： 以前から結構吠えてたんですけども、最近近所の人から「ちょっとうるさい」というふうにくれームが出てしまって。もうどうしようかなと思ってんですけども。

回答者： そうですか。ワンちゃんのことをちょっとお聞きしたいんですけども。ワンちゃんはどんなタイプですかね。種類ですとか性別ですとか年齢ですとか、ちょっと教えていただいてもよろしいですか。

相談者： 中型の雑種犬で、2歳のオスの犬です。

回答者： はい。中型のMIXで男の子ですね。去勢手術はなさっていらっしゃいますか。

相談者： はい、もう済みました。

回答者： されていますか。いま年齢は。

相談者： 2歳です。

回答者： 2歳ですか。去勢手術は何歳ぐらいのときにやっていますか。

相談者： 半年ぐらいのときにやりました。

回答者： 生後半年ぐらいですね。いまワンちゃんは、おうちの中で飼っていらっしゃいますか。お外で飼っていらっしゃるんですか。

相談者： 庭で繋いで飼っています。

回答者： 庭で繋いで飼っていらっしゃるんですね。それで先ほどのご相談ですと、吠えて困っていらっしゃるということなんですけれども。ワンちゃんはどんなときに吠えている様子がありますか。

相談者： やっぱり知らない人が通ったりとか、車だとか、あと、人がガサガサ歩いて、ガサガサする音に対しても。

回答者： 音ですね。

相談者： 猫とかも多いので、猫とかに対しても結構吠えているみたいです。

回答者： なるほど。なんとなくでいいんですけども、飼い主さん。ワンちゃんが特にうるさく吠えているなあ、なんていう時間帯っていうのはあったりしますか。例えば、朝の人の通勤の時間に吠えているんだとか、何か吠えがひどくなっている時間帯というのは、なんとなくお分かりでしょうか。

相談者： そうですね。やっぱり朝、人が通るので。結構ここが通路になっているので、そういう時間帯が結構人が通るときとか、犬の散歩が多い時間帯は、朝が多いですかね。

回答者： なるほど。ワンちゃんはお庭にいて、その通路を何か通ったときに吠えているということなんですけれども、ワンちゃんはつながれているんでしょうか。

相談者： はい。

回答者： その場所からは、通行人の方とか他の犬とか、何か外が見えてしまう状態でしょうか。犬が直接そういうものを目にする事ができる環境でしょうか。

相談者： もう全部見えます。

回答者： ああ、全部見えてしまいますか。お庭はどうでしょう。生け垣とか塀とか、そういうものは何かあったりするんですか。

相談者： 一応柵はあるんですけども、全部外が見えるような状態です。

回答者： なるほど。結構風通しがいい柵の状態なんですね。

相談者： そうですね。

回答者： なるほど。ワンちゃん、2歳ということでしたけれども、そこにいて結構吠えるようになったなあ、なんて飼い主さんが思われるようになったのは何歳ぐらいからでしょうか。ちょっと昔のことなので、もしかしたら忘れていらっしゃるかもしれませんが、覚えている範囲で結構です。教えていただけますか。

相談者： 子犬のうちはそのあまり人に吠えなかった気がするんですけど、1歳になったぐらいですかね。吠えるようになった気がします。

回答者： なるほど。1歳ぐらいからワンちゃん吠えるようになってきたんですね。ちなみにワンちゃんのお名前は。

相談者： タロウです。

回答者： タロウくんですね。タロウくんは、1歳ぐらいから吠えるようになってきたということなんですけど、ちょっとご近所の方からクレームがきてしまったんですよね。

相談者： はい。

回答者： いつぐらいにそのクレームはきましたか。

相談者： 本当に最近なんですけど。ストレス溜まっちゃって。

回答者： そうですよ。飼い主さんとしてもちょっとね。ご近所の方にそういうこと言われちゃうと、ご近所の手前、吠えるとちょっと気になるようになってしまいますよね。  
ご近所でクレーム出された方って、おうちの隣の方とか、何軒か先の方とかなんとなく憶測つきますか。

相談者： そうです。隣の方からもう直接言われたので。

回答者： 直接ですか。なるほど、それは結構ハードですね。

相談者： はい。

回答者： その後、お隣の方との関係はどうですか。ちょっと何か強く言われて、それ以外に何かされたとかってことは出てないですか。

相談者： 特に何もなくて、こちらも挨拶するようにしています。

回答者： そうですか。ご挨拶したときにこう、普通にお話ができるようなかたちですかね、今は。

相談者： ちょっとごちないですけどね。

回答者： そうですか。そうですよね。ちょっとごちないふうになってしまいますよね。分かりました。  
タロウくんは、外にいてですね、他の車とか人とかっていうものに対して吠えてしまうということなんですけれども、特にこれに対して激しいっていうものは何かありますか。

相談者： 特にあんまり感じたことはないです。

回答者： 一つのものに吠え始めると、大体、例えば人が通ってしまったときには、どれぐらいの間吠え続けますか。

相談者： 人がもう見えなくなるまで。

回答者： 見えなくなるまでですね。

相談者： はい。

回答者： なるほど。  
ちょっと松村さんのご家族のことをお聞きしたいんですけども。松村さんご家族は、比較的日中はおうちにいらっしゃるんですか。それとも留守が多いでしょうか。

相談者： 日中は留守が多いです。

回答者： 何時から何時ぐらいまで外出されていることが多いですか。

相談者： もう朝8時頃にはみんな出勤してしまって、夕方頃までには帰ってこないです。

回答者： なるほど。お隣の方からのクレーム、ちょっと何度も申し上げて申し訳ないんですけども、そのときに「特にこういうときにうるさいんだ」みたいなことって言われたことはありますか。留守中に吠えているような様子がありますか。

相談者： 留守中はそういう……。隣の人も出かけているので。

回答者： ああ、なるほど。では、日中はあまり問題視はされていないということなんですかね、ご近所の方は。  
ということは、朝出かける前か、もしくは帰られて、その6時ぐらいから帰ってこられるということなんですけど、それ以降の時間帯ってということでのクレームというふうに考えたらいいでしょうかね。

相談者： はい。そうです。

回答者： 大体、朝が多いですか。夕方、夜が多いでしょうか。

相談者： 朝、人が通るときが。朝が、ですかね。

回答者： 朝が非常に多い。夕方、夜はそうでもないですか。

相談者： 人が通れば、やっぱり吠えたりしています。

回答者： 特に、松村さんご自身が感じていて、朝と夕方、夜だとどっちの方が吠えている時間が多いと思いますか。

相談者： やっぱり朝の方が、散歩に行く前とかご飯もあるので、そういうのも一緒になって吠えている気がします。

回答者： なるほどなるほど。ではポイントは朝ということかもしれませんね。この時間帯に吠えないようになんとかということでしょうかね。まあ、それ以外の時間も吠えないでくれれば一番いいんですけどね。分かりました。  
タロウくんは、お散歩は1日に何回ぐらい、もしくは1週間の間に何回ぐらい行ってもらってますか。

相談者： 毎日、朝と夕方は行っています。

回答者： ああ、そうですか。1回どれぐらいの時間行ってもらっているのでしょうか。

相談者： 大体30分ぐらいです。

回答者： 30分ずつぐらいは1日2回してもらっているんですね。  
タロウくんは結構元気がいいんでしょうか。

相談者： とっても元気がいいです。

回答者： とても元気がいいですか。好きな遊びとか運動とか、そういうのは何かありますか。

相談者： おもちゃで遊ぶのが好きなんですけど、あんまり遊んであげてないです。

回答者： ああ、そうですか。子犬の頃は結構遊んであげたりしていましたか。

相談者： そうですね。でもやっぱり日中いないので。はい、あんまりですかね。

回答者： そうですか。朝、お散歩に行くのは大体何時ぐらいからでしょうか。

相談者： 朝7時ぐらいからですね。

回答者： 7時ぐらい、ですね。はい。ワンちゃんの朝ごはんは何時ぐらいですか。

相談者： 散歩帰ってきてから、出勤する前にあげます。

回答者： ということは、大体7時半から8時の間ぐらいということでしょうか。

相談者： そうですね。

回答者： なるほど。8時にはみなさんがご出勤でいなくなるということですね。  
大体、この朝の7時から7時半ぐらいまでがお散歩なのかなというふうに思うんですけど。その時間よりも早い時間に吠えていることが多いんでしょうか。

相談者： そうですね。

回答者： 大体、朝早いというと、何時ぐらいから吠え始めていることがありますか。

相談者： 大体6時とかだと思うんですけども、5時ぐらいにちょっと吠えてるなって思うこともあります。

回答者： なるほど。  
夜ですけれども、排泄はこの子お庭でしますか。お散歩の最中に済ませますか。

相談者： もうほとんど、散歩中に済ませます。

回答者： 散歩中ですか。なるほどね。  
松村さんのご家族で、夜一番最後まで起きていらっしゃる方は、大体何時ぐらいまで起きていらっしゃるんでしょうか。

相談者： 12時とか、それぐらいまでは。

回答者： 12時ぐらいですね。  
タロウくん、お散歩出して、ご近所ちょっと連れ出したら、すぐおしっこはしてくれますか。

相談者： そうですね。あんまり考えたことないかな。

回答者： なるほど。  
そうしたら松村さん、私からいくつか、やれそうなことのアドバイスを今からお話ししますので、もしできそうなことがあったら取り入れられてみてください。  
いまお手元に、筆記用具と何かメモができる紙はございますでしょうか。

相談者： はい。大丈夫です。

回答者： では、言ったことをちょっと一個ずつ確認をして書いてみていただいでいいでしょうか。

相談者： はい。

回答者： まず一つ、多分このタロウくんが吠えている理由は、退屈だということですね。

相談者： ああ、退屈。

回答者： それから、周りに対して、何かが来たときに吠え続けることで、追い払えたっていうのが多分タロウくんにとって一番のごほうびになっていると思います。なので、人が近づいてきて吠えている間に一人追い払った。また次追い払えた。ということでどんどん吠えるようになってしまっているのかなと思うんですよね。

子犬の頃は吠えなかったけど、いま吠えているということは、ちょっとずつ癖が積み重なってきたということがあるんじゃないかと思いますので。

ただ、いまからでもできることはたくさんありますから、ちょっとまずはやれそうなことから始めてみましょう。

まずは、ワンちゃんに対してやっていただきたいことは、夜です。12時ぐらいに一番最後の方が寝るので、いまの時期寒いですからちょっと大変かもしれませんが、5分で結構です。できればまず、おしっこ出しちゃってください。お散歩連れてっちゃってください。なるべく膀胱を空にさせていただいて、排泄はもうしっかり済ませている状態を作ってください。

どうでしょうか、私の提案としては、特に朝が問題だということなので、夜12時から朝のお散歩に行くまでの間の時間帯、ちょっと玄関ですとかガレージですとか、どこかそういった所にワンちゃんを見晴らしの悪い場所ですね、何も見渡すことができない場所に入れておくことができると、吠える問題は少し軽減できるかなと思うんですけども。お隣の方からのクレームも来ているということですので、何かそういった場所で過ごさせることっていうのはできそうでしょうか。

相談者： じゃあ、ちょっと玄関かたづけて。ちょっと玄関入れてみます。

回答者： やれそうですか。

相談者： うん。

回答者： はい。  
玄関先は、外で飼っているワンちゃん入れちゃうっていう、ちょっと抵抗感はあるかもしれないですけどね。お隣の方との関係がどんどん悪くなっていくっていうのもどうかと思いますので、ちょっとまずは試しに1週間やってみてください。

相談者： 1週間。

回答者： うん、1週間でもいいと思います。まずは玄関先に入れてみて、最初ちょっといたずらしちゃったりとか、粗相して失敗しちゃうりする可能性もあるので、とりあえず1週間頑張ってみてください。ずっとは言いませんので。

相談者： はい、分かりました。

回答者：まずは1週間ですね。1週間玄関先に入れていただいて、夜とりあえずそこに、何か柵を囲ってもらってもいいですし、ドアノブにリードを結んで繋いでおいてもらってもいいですし、そんなかたちで何か寝やすそうな毛布ですとか、犬小屋ですとか、そんなものを置いていただいてもいいと思いますから、ちょっと工夫してください。

相談者：はい。

回答者：そうしていただいて、朝を迎えるまで吠えるか吠えないかをちょっと確認していただいでいいでしょうか。

相談者：はい。

回答者：多分いまのお話を伺っていると、タロウくんは外が見えて見晴らしがいいので、余計に吠えやすくなっているんじゃないかなと思いますので。外の物音にも吠えてしまうということですから、100%防ぐことはできないかもしれませんが、猫とか車とか、知らない人に対して吠えてしまうという問題、お隣の方からのクレームがあるという状況ほどはひどくならないと思いますので。

それともう一つ。松村さんご自身、ちょっと大変かもしれませんが、お隣の方にこちらから話しかけるのも勇気がいるかもしれませんが、一応今日お話ししたようなことをこれから取り組むので、ちょっと吠えてしまうかもしれないけれども、申し訳ないけど努力はしますということで、何か菓子折りでも一個持っていて、一応ちょっと頭を下げておいていただくといいかもしれませんね。

相談者：そうですね。ちょっとやってみます。

回答者：そうしていただくと、お隣との関係も少し修復されやすくなるかなと思いますので。なかなかワンちゃんのことなので、そこまでと思われるかもしれませんが、一応ちょっとカッとならずに頑張ってみていただけると嬉しいなと思います。

相談者：はい。分かりました。

回答者：では、松村さん、最後に、まず何をするかということを確認させていただきたいと思います。

夜は、ワンちゃんまず最後に、一番最後に寝る人は何をしていたか確認してください。

相談者：5分ぐらいでいいので、散歩して排泄を済ませる。

回答者：完璧です。松村さん、すばらしいです。それをちょっとまずさせることで、膀胱が空になります。おしっこで汚されることも少ないでしょうし、まずはそういったことで確認をされてみてください。

次に、その状態で朝までワンちゃんを玄関先に置いておくということをやってみてくださいね。

この2点ですけれども1週間の間でしたらば、おうちでできそうでしょうか。

相談者：はい、何とか頑張ってみます。

回答者：もし、また途中で何かありましたら、ご連絡いただければと思いますが、可能でしたら1週間後どうなったか、その後の様子も私も気になりますので、ご連絡いただいてもよろしいでしょうか。

相談者：はい。大丈夫です。

回答者：担当矢崎と申しますので、何かございましたら私のほうまでご連絡をよろしく願いいたします。

相談者：はい。ありがとうございました。

回答者：はい、どうもありがとうございました。それでは失礼いたします。



## 動物の適正譲渡における飼い主教育

- 企画制作 環境省自然環境局総務課動物愛護管理室  
〒100-8975 東京都千代田区霞ヶ関 1-2-2  
電話：03-3581-3351（代）
- 請負者 株式会社オーエムシー  
〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-3 ケイアイ四谷ビル 5F  
電話：03-5362-0120
- 発行 平成 23 年 3 月
- 監修 矢崎 潤  
日本獣医生命科学大学非常勤講師  
公益社団法人日本動物病院福祉協会認定家庭犬しつけインストラクター
- 構成・執筆 羽金道代  
公益社団法人日本動物病院福祉協会認定家庭犬しつけインストラクター
- 撮影協力 岡崎市動物総合センター “あにも Animo”